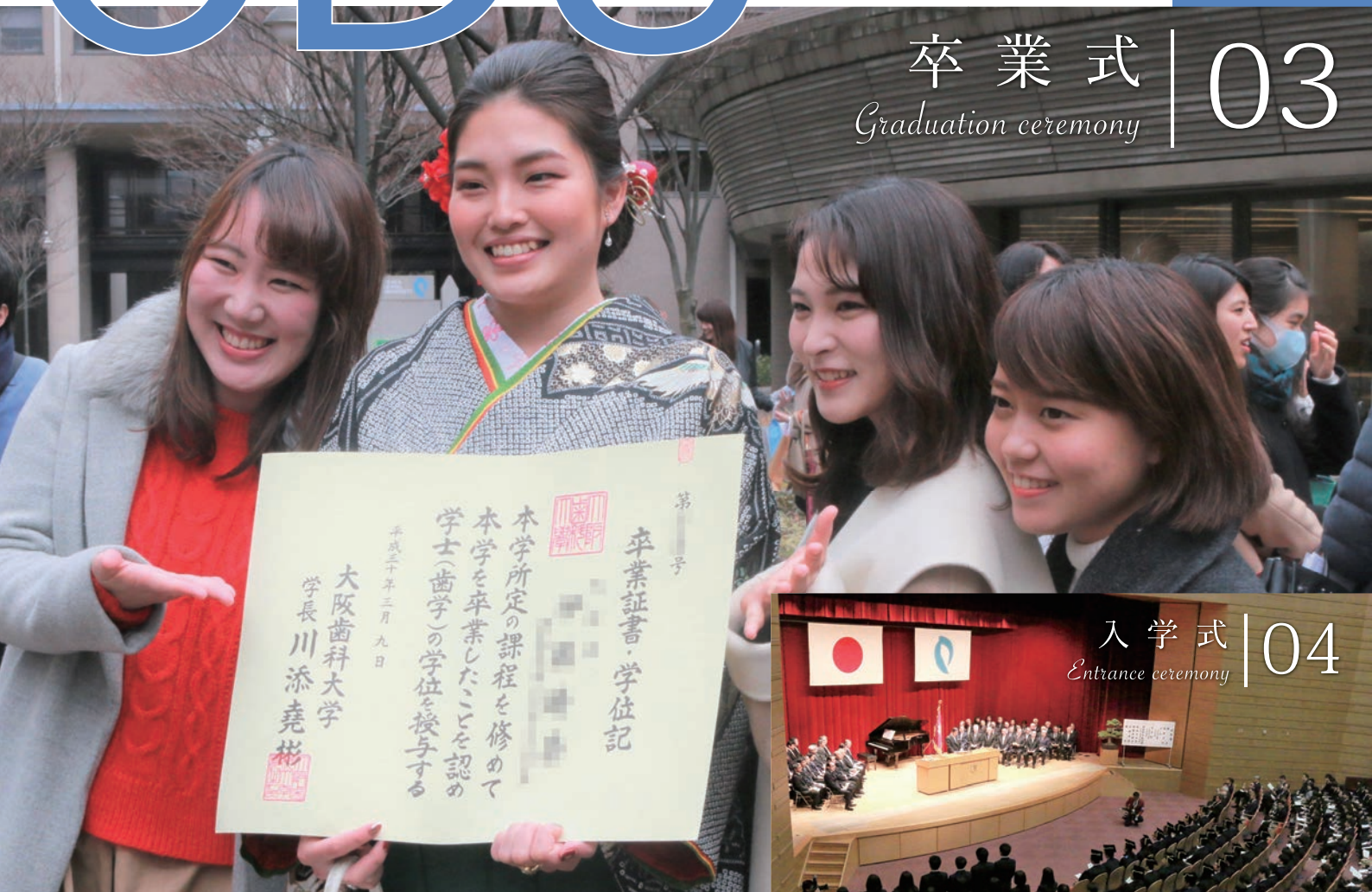


卒業式 | 03

Graduation ceremony



入学式 | 04

Entrance ceremony



06 | 大阪介護老人保健施設協会 と連携協定を締結



08 | 枚方産学公連携プラットフォーム に関する協定調印式



第8回臨床ゲノム医療学会 “大阪学術大会”開催 | 12



12 | 大阪歯科大学歯科衛生士研修センター 歯科衛生士復職支援・新人研修スタート

ODU NEWS

大阪歯科大学広報 No. 180

Contents

■掲載期間／2018.1.1～12.31

02 TOPICS

- ・大学院医療保健学研究科が開設
- ・「大阪歯科大学歯科衛生士研修センター」開設
- ・本学主管・第8回臨床ゲノム医療学会“大阪学術大会”開催
- ・「枚方産学公連携プラットフォームに関する協定」締結
- ・大阪介護老人保健施設協会と協定締結
- ・本田義知准教授が新規骨再生材料で特許を取得
- ・田中佑人助教が学会研究奨励賞を受賞
- ・濱島淑恵准教授のヤングケアラーに関する研究活動 メディアで注目集める

08 2017年度大学卒業式・大学院学位認証式

- ・理事長・学長 式辞
- ・同窓会会長 祝辞

10 学位・博士(歯学)授与

11 2017年度大阪歯科大学歯科技工士専門学校・歯科衛生士専門学校卒業式

11 2017年度定年退職者

- ・「大阪歯科大学における49年間」 大浦 清
- ・「定年退職のご挨拶」 西川 泰央
- ・「定年退職のご挨拶」 森田 章介

16 2018年度大学・大学院入学式

- ・理事長・学長 式辞

18 教授就任挨拶

26 国際交流

- ・中国昆明医科大学と学生交流協定締結
- ・学生短期海外研修報告
- ・協定校からの学生受入
- The 2nd Forum for International Students 開催

行事報告

30 2018(平成30)年の主な行事

31 ▼大学

- ・医療保健学部オープンキャンパス2018
- ・歯学部2018年度『学長と語ろう』
- ・2018年度学生研究発表会
- ・2018年度FDセミナー
- ・歯学部2018年度オープンキャンパス
- ・研究チャレンジ発表会
- ・第1回歯科大わくわくキッズセミナー@まきの
- ・2018年度人権啓発講演会
- ・第1回医療保健学部生涯学習セミナー

- ・第26回大阪歯科大学公開講座(天満橋講座)

- ・高大連携 一香里ヌヴェール学院高校生来学、細菌学実習を体験

- ・2018年全学教職員忘年慰労会

40 ▼附属病院

- ・臨床研修管理運営委員会(全体会議)
- ・第12回、第13回歯科医師臨床研修指導歯科医講習会
- ・2017年度医療機器講習会
- ・第15回病診連携講演会・懇談会
- ・2017年度医薬品安全管理講習会
- ・2018年歯科医師臨床研修情報交換会
- ・2017、2018年度医療安全講習会
- ・2018年度院内感染対策講習会

45 2018年新年互礼会

- ・年頭所感 理事長・学長 川添堯彬

53 平成29年度「私立大学等改革総合支援事業」に採択

53 2017年度事業報告

66 平成29年度決算報告

68 2017年度監事監査報告

68 2018年度事業計画

72 平成30年度科学研究費補助金交付

74 2018年度大阪歯科大学学術研究奨励助成金(大学院生)

75 平成30年春秋の褒章・叙勲受章者

75 大阪府病院協会第43回病院職員永年勤続表彰

75 寄贈

76 人事

78 あとがき

大学院医療保健学研究科が開設

2018年4月1日、本学は大阪歯科大学牧野キャンパスに大学院医療保健学研究科を開設しました。

本研究科は、医療保健学部を基礎とする修業年限2年の修士課程で、全国私立大学で2番目となる「口腔科学」を専攻する大学院です。（授与する学位：修士（口腔科学））

4月4日には医療保健学部と合同の入学式が行われ、入学

定員10名を超える14名が第一期生として入学しました。

歯科衛生士又は歯科技工士の免許を持つ入学生が、本研究科で口腔保健学又は口腔工学に関する教育者、研究者としての能力を養い、将来的に斯界の指導者として活躍することが期待されます。

「大阪歯科大学歯科衛生士研修センター」開設

本学は3月30日付で、厚生労働省・平成30年度歯科衛生士に対する復職支援・離職防止等推進事業（うち、歯科衛生士技術修練部門初年度整備・運営事業）の実施団体に選定されました（補助金額81,943,000円）。これに伴い、附属病院西館4階に復職支援の拠点となる「歯科衛生士研修センター」を設置し、近畿圏における歯科衛生士（就業者数）不足の改善に取り組むことになりました。

10月8日にはセンター設立を記念して、本学創立100周年記念館でキックオフセミナーを開催。厚生労働省医政局歯科保健課の小嶺祐子課長補佐、東京医科歯科大学の水口俊介・歯科衛生士総合研修センター長等、各方面からお招きした4人の講師に講演いただきました。また、山本一世センター長が、eラーニング対応の大型ディスプレイを備えたゼミ室、デンタルチェアー研修室、訪問歯科診療研修室、エックス線撮影室、高性能の機器が揃ったサブライなど、六つのパートで構成されるセンター内部を映像で紹介しました。



2018年度第1期生の研修は12月3日からスタート。結婚・出産・子育て等を機に離職し10年、20年以上ブランクがあるが復職を目指しているという方、長期ブランクを経て復職したが知識・技術が追いつかず自信を失くしているという方、専門学校を今年卒業したばかりでもっと学びたいという方など、さまざまな背景を持つ18人（定員）が研修に参加しています。初日のオリエンテーションでは、川添堯彬理事長・学長が「（研修修了後は）やりがいのある歯科医療の現場にぜひ参画を」と激励しました。

研修期間は翌年2月まで。次年度以降は4月から6月、8月から10月、12月から2月の年間3回実施する予定です。受講生全員が自信を持って研修最終日を迎えられるよう、これから大学・病院全体でサポートしていきます。



▶ 歯科衛生士研修センターホームページ： <https://www.osaka-dent.ac.jp/dh-center.html>



本学主管・第8回臨床ゲノム医療学会“大阪学術大会”開催



12月9日、臨床ゲノム医療学会の第8回学術大会が大阪歯科大学創立100周年記念館で開かれ、本学の川添堯彬理事長・学長が大会長を務めました。大会テーマは『先制医療としてのゲノム予防医学・歯学への展開'2018～ゲノム歯科医は、マナー(mRNA)検査で病気を入口・口腔で止める～』。医科、歯科界から錚々たる先生方を演者に迎え、名誉大会長基調講演、特別基調講演、特別講演五つ及び教育講演八つが行われました。

大会は8時55分に開幕。はじめに、大会長の川添理事長・学長が、開催にあたり渥美和彦・同学会理事長から多大なご支援を頂いたことに対して謝辞を述べ、「今日一日が(ご参加の)先生方の将来、方向付けにとって、何か響くものがあればこの上ない幸せです」と挨拶しました。

続いて教育講演が始まり、最初に本学歯学部教員3人が講演しました。医科で先行するゲノム研究は、歯科においてどのような展望を描けるのか。橋本典也准教授は、従来血液サンプルを用いて行われている mRNA 検査が、非侵襲性で採取が簡便な唾液によっても可能であることが明らかになったと報告。本田義知准教授は、唾液を用いた血管老化診断法開発への取組みを、南部隆之講師はゲノム診断の結果から、口の中に棲む細菌パターンを予防医学的に「疾患型」から「健康型」へ変える、個別化医療への試みをそれぞれ紹介。3者3様のアプローチによって、歯科におけるゲノム研究の展望を示しました。



大会長 川添堯彬 理事長・学長



橋本典也 准教授



本田義知 准教授



南部隆之 講師

次に特別講演に移り、大阪大学大学院医学系研究科の熊ノ郷淳教授、大阪国際がんセンターの松浦成昭総長、学会理事の白澤卓二・白澤抗加齢医学研究所所長が相次いで登壇。それぞれ専門の免疫研究、がんの治療法、アルツハイマー病について最新の知見を交えながら解説されました。ここで午前のプログラムは終了。

お昼時間を利用して、附属病院内で開かれたランチョンセミナーでは、本学歯学部奥野健太郎助教が「口腔内治療でメタボリックドミノを食い止める！—睡眠時無呼吸症への歯科的アプローチ—」と題して講演しました。落語による解説など、奥野先生の工夫をこらした発表に参加者も終始リラックスして耳を傾けていました。



奥野健太郎 助教

また過去最多の24題もの演題が展示されたポスター会場では、本学歯学部3年生3人が、歯科ではあまり行われていない文献研究について発表しました。



ポスター発表



学会理事長・東京大学名誉教授 渥美和彦 先生

午後は、学会理事長で東京大学名誉教授の渥美和彦先生による名誉大会長基調講演で再開。「ゲノム診断の現在と未来」というタイトルで、これからの医療においては病気を予防するという予防医療が非常に重要となり、予防医療の本幹となる遺伝子科学の中枢にゲノム診断があること、ゲノム診断はまず地域で広がり、その後全国に展開していくと考えられると話されました。

続いて、渥美先生から第三高等学校時代のクラスメイトという紹介を受けて登壇されたのは、斯界の権威で京都大学元総長の井村裕夫先生。「医療の新しい動向—精密医療（プレジジョン・メディシン）と先制医療—」と題して、特別基調講演をしていただきました。最近のゲノム医学の進歩を概観し、それに基づいて、さまざまな病気（がん、単一遺伝子病、多因子疾患）の研究は今後どのようなステップで進んでいくか。見解を示された上で、21世紀の医学（歯学・薬学を含む）は、疾患発症後においては、標準的な医療から個人のゲノム情報に基づく個の医療「精密医療」へ、発症前においては、一般的な予防からライフコース情報に基づく先制医療（発症前診断と介入）へと進むことによって、健康長寿が実現できるのではないかと結ばれました。会場全体がじっくり聴き入った井村先生の講演後は、感銘を受けたという聴講者から熱心に質問が寄せられました。



井村裕夫 先生

その後、世界初のiPS細胞移植手術を実現に導いた理化学研究所プロジェクトリーダーで眼科医の高橋政代先生をはじめ、学会副理事長で愛知医科大学の福沢嘉孝教授、mRNA検査を発明された国際医療福祉大学の筒井久美子助教等の講演が続きました。

歯科医師、医師をはじめコメディカル、企業の方、そして海外からは中国の研究者も多数参加された今大会。400人を優に超える来場者があり、川添大会長、田中昭男準備委員長以下、本学の大会準備委員が1年をかけて準備した大阪学術大会は盛会裏に幕を閉じました。

「枚方産学公連携プラットフォームに関する協定」締結

かねてより、枚方市所在の私立4大学（摂南大学、大阪工業大学、関西医科大学、大阪歯科大学）は、枚方市及び産業界との間で同市の高等教育の活性化と地域活性化を目指し、協力を重ねてきましたが、8月3日北大阪商工会議所において、「枚方産学公連携プラットフォームに関する協定」の調印式が開催されました。

調印式には、摂南大学・八木紀一郎学長、大阪工業大学・西村泰志学長、関西医科大学・友田幸一学長、本学・川添堯彬学長、伏見隆・枚方市長、亀岡育男・北大阪商工会議所副



調印式の模様

会頭、錦戸誠一・資生堂ジャパン株式会社近畿支社長が出席、新たな社会連携へ第一歩を踏み出しました。

さっそく9月25日には、本学において本事業の「キックオフシンポジウム」を開催したほか、9月29日には、枚方市立メセナひらかた会館において「4大学合同入試説明会」を開催するなど本格的に事業がスタートしています。今後は、中高生大学体験事業、未病・予防対策事業、防災機能の強化・充実、共同研究など多彩な取り組みを展開していくものです。



左から錦戸支社長、亀岡副会頭、伏見市長、八木学長、友田学長、川添学長、西村学長

大阪介護老人保健施設協会と協定締結

学校法人大阪歯科大学と公益社団法人大阪介護老人保健施設協会は6月28日、大学創立100周年記念館で調印式を行い、連携協定を締結しました。この協定は、老健施設で専門的な口腔疾患の治療を必要とする患者さんが増加していることをきっかけに具体化し、双方が有する「人的・知的資源を有効に活用して臨床・研究・教育分野において協力することにより、地域包括ケアシステムにおける未来の連携モデルの推進に寄与すること」を目的としています。

調印式で、本学の川添亮彬理事長・学長は、地域包括ケアシステムに対応できる体制づくりを検討していたところ、大老協の川合秀治会長の勧めで提携に至ったことや、今回の協定が歯科大学と介護施設団体の連携という全国的にも先駆けた取り組みであるのを光栄に思うと話し、「今後学生や研修歯科医に対して、未来に向けて教育していく意味においても、この連携は絶好の機会」と期待を示しました。

大老協の川合会長は、「この提携で大阪歯科大学と大老協はがっちりスクラムを組むことができた。これから、各老健施設に有効性のある口腔ケア、誤嚥性肺炎等を含めて、その管理にご指導、ご協力をお願いしたい」と挨拶されました。

出席役員の紹介後、川合会長と川添理事長・学長は協定書に署名し、本日から協定は発効となりました。協定の中で、本学と大老協は次の事項について協力するとしています。

1. 地域医療・介護における歯科医療職種（歯科医師、歯科衛生士、歯科技工士など）と介護老人保健施設に属する各医療・介護職との連携教育モデルの構築推進に関する事項
2. 介護老人保健施設の利用者ならびに大阪歯科大学附属病院を受診する患者における歯科口腔関連疾患・顎口腔機能障害の治療に対し、両者が有する社会保障資源を最大に活用し、連携・推進に関する事項



協力の具体的な内容、方法等については、これから協議を重ねることになりますが、本学大学院生の老健施設での介護研修の実施や、老健での歯科・誤嚥性肺炎・栄養等に関する指導などを計画しています。

大老協は、地域で要介護認定を受けた高齢者に医療・介護・リハビリを提供する施設団体で、1991年にスタートした「大阪府老人保健施設老人協議会」を前身としています。会員数は現在184施設を数え、川添理事長・学長をはじめ本学卒業生も役員として名を連ねています。

本田義知准教授が新規骨再生材料で特許を取得

本学中央歯学研究所の本田義知准教授と京都工芸繊維大学の田中知成准教授が共同開発した、新しい骨再生材料が6月22日付で特許登録されました。

- ◆発明の名称:機能性架橋構造体及びその製造方法並びに医療材料
- ◆特許権者:国立大学法人京都工芸繊維大学、学校法人大阪歯科大学
- ◆発明者:田中知成、本田義知

これは、骨再生の専門家である本田先生が2012年に本学に赴任して最初に取り組んだ研究です。先生の話によると、歯周病、外傷、癌、口唇口蓋裂など様々な口腔疾患によって歯の周りを支える歯周組織の骨（歯槽骨）が無くなってしまおうと、インプラントなどが打てなくなります。そのため、歯科では骨を再生する研究が盛んに行われているとのこと。また近年、インプラント周囲炎や歯周病など細菌感染炎症が起きている口腔内では、従来の自家骨による骨移植や骨補填材による骨再生が難しいことが問題になっています。こうした背景から、免疫や炎症を制御できる新たな骨再生材料の開発を目的として、この研究は始まりました。

本田先生が着目したのは、エピガロカテキンガレート（EGCG）というお茶の成分・茶カテキン。抗炎症作用、抗菌・殺菌作用、コレステロール低下作用など種々の効能で知られるメジャー物質・カテキンの骨再生医療への応用は、in vitro（培養実験）ではそれまで複数の論文で報告されていました。しかし、in vivo（生体内）では、骨再生を促進した報告は開発を始めた2012年当時、ほとんどありませんでした。本田先生はまずこの違いに着眼し、EGCGの構造式を検討。ある閃きを得ます。「EGCGはOHという水酸基に囲まれており、他の物質に吸着しにくい。EGCGを生体親和性の高い物質（ゼラチン）と化学結合させれば、患部での貯留性が高まり、生体内でも優れた骨形成能を発揮するのではないかな？」

そこで、水酸基と高分子を効率的に合成する技術を持たれている化学合成の専門家、古くから知り合いの田中知成先生に話を持って行き、新規骨再生材料（EGCG結合ゼラチンスポンジ：EGCG-GS）開発の研究が始まりました。過去の経験から骨再生材料として応用するには、スポンジ状の物質が望ましいと知っていましたが、最初は、粉状の物質が多すぎるばかりでスポンジ状にはならず、失敗ばかりでした。試



行錯誤の後、スポンジ状の材料ができる条件を発見。マウスやラットを使った動物実験でEGCG-GSの骨形成能評価を行った結果、化学結合がなされるある条件では、カテキンの効果が生体内で発揮され骨が形成されることが分かりました。本特許は、これらの合成方法と骨再生に関わる内容となっています。特許庁の審査を経て、出願から4年、本田先生にとっては四つ目の特許獲得となりました。

その後、EGCG-GSの研究は更に進み、自家骨や、既存の骨補填材を凌ぐ骨再生能を示す事を明らかにしています。研究を振り返り、「馬場俊輔教授、松本尚之教授、橋本典也准教授、戸田伊紀准教授を始めとする講座横断型でフランクに再生医療を研究している本学再生グループの先生方、多くの院生、職員の皆様に頂いた有形無形のご協力のお陰です」と本田先生。この研究を進めつつ、将来的な臨床応用を視野に入れ情報収集に努めています。特許に関しては、このほかにも出願中1件、出願準備中1件を抱えています。「今回は大阪歯科大学に来て創ったアイデアで、大阪歯科大学から出願し、多くの皆様のお力をお借りして達成した思い入れのある特許。とてもありがたく思っています」と静かに喜びを語ってくれました。

田中佑人助教が学会研究奨励賞を受賞

一般社団法人日本スポーツ歯科医学会第29回総会・学術大会が6月23日、仙台市で開催され、附属病院障がい者歯科の田中佑人助教が平成29年度研究奨励賞（ロツテ賞）を受賞しました。この賞は、第28回学術大会における第1位・第2位の研究発表（発表者は2017年4月1日時点で39歳以下）に対して贈られるもの。田中先生は大学院生時の2011～2013年度にかけて同学会賞を3年連続で受賞しており（学会賞2回、研究奨励賞1回）、今回は4度目の受賞となりました。

受賞演題名は「筋・腱紡錘反射の変調が食品の破碎と脱負荷反射に及ぼす影響」。わたしたちは普通、食物をかみ砕いた後、無意識にすぐ力を抜き（脱負荷反射といいます）上下の歯がぶつかるのを防いでいます。これは体のこういったシステムの働きによるものか。この問題を調べるため、田中先生はかねて研究テーマとしてきた筋紡錘（筋肉内の長さセンサー）を用いて実験を行いました。その結果、筋紡錘を目茶苦茶に攪乱させると、食物は粉碎できても脱負荷反射は達成されないことが解り、咬筋と側頭筋の筋紡錘が脱負荷の調節に関与していることが明らかになりました。

田中先生はこの研究をさらに発展させ、最終的に、歯を喪失して入れ歯を使用している人が効率のいい食事・咀嚼ができるように役立てたいと考えています。具体的には、入れ歯やかみ合わせの良し悪しを評価する方法として、従来の見た目等でなく、日常の食事と関係する新たな尺度——食物を最小限の力で効率よくかみ砕けるように上下の歯の間に位置づける「咀嚼の巧みさ」や、食物の固さを事前に想定して入れ歯の破壊を防ぐ「脱負荷反射歯」——を確立することを目指しています。

今回の受賞について、田中先生は次のように感想を話して



くれました。「以前の受賞は大学院生の時で、上の先生に指導してもらいながらだったので、自分の力で獲ったという実感はなかった。今回はある程度自分で自立して行った研究で、自信がなかった。（受賞は）嬉しさより驚きの方が大きかった」（田中先生は同じく2018年に「肩こりと口腔習癖の関連性」に関する研究で、研究分担者として第60回日本顎口腔機能学会優秀賞も受賞しました。）

濱島淑恵准教授のヤングケアラーに関する研究活動 メディアで注目集める

本学医療保健学部・濱島淑恵准教授の「ヤングケアラー（家族の介護やケアを担う子ども・若者）」に関する調査研究が2017年12月、『京都新聞』で紹介され、その後NHKやTBS、『毎日新聞』『クロワッサン』（生活雑誌）などさまざまなメディアで取り上げられました。

濱島先生等の研究グループは2016年1～12月、大阪府内の公立高10校でアンケートを実施、約5200人から回答を得ました。その結果、高校生の5.2%、272人がヤングケアラーであり、うち半数近くが小中学生の時から介護を担っていることが明らかに。これまでヤングケアラーに関する調査は、小中学校などの教員を対象に日本ケアラー連盟が実施していましたが、濱島先生等の今回の調査は当事者である若者に直接アンケートを行ったという点で、国内初の本格的な調査と認められ、大いに社会の耳目を集めることになったのです。

医療保健学部口腔保健学科の准教授として、本学では主に社会福祉士を目指す学生の講義を担当している濱島先生。自身の研究については、今後さらにヤングケアラーという言葉の普及や認知度を高め、彼らが抱える問題の周知拡大を図りたいとの抱負を持っています。先生の研究活動や本学での取



り組み等について、さらにお知りになりたい方はどうぞこちら
https://www.osaka-dent.ac.jp/why/odu_magazine/A110.html
をご覧ください。



濱島先生のヤングケアラーに関する活動を紹介した主なメディアは次のとおり。

- ・NHK「おはよう関西」(1月9日)
- ・NHK「京いちにち」(1月9日)
- ・『毎日新聞』(1月18日夕刊1面トップ)

- ・『クロワッサン 6/25特大号』
- ・TBS「報道特集」(12月15日)



3月9日、第66回大学卒業式並びに第54回大学院学位認証式を楠葉キャンパス講堂で行いました。卒業生一人ひとりに川添理事長・学長から卒業証書・学位記が手渡され、大学院修了者には指導教授から博士(歯学)の学位記が授与されました。新学士、新博士は希望を胸に晴れやかな表情で大阪歯科大学を後にしました。

理事長・学長式辞

理事長・学長 川添 堯彬



1300年前の奈良時代から、東大寺二月堂のお水取りの行事が終われば春が来るといわれてきました。この行事は3月1日から始まり、来週15日木曜日に満行日の修仁会を迎えます。周辺の梅林も今、満開で、春の到来がすぐそこに感じられるこの頃でございます。

本日、まさにこの春の近い良き日に、第66回大阪歯科大学卒業式を迎えられます90名の新歯学士諸君、並びに第54回大学院学位認証式を迎えられる19名の新博士の皆さん、本日は誠にありがとうございます。同時に、本席にご臨席いただきました保護者・ご家族の皆様におかれましても、ひとしおの感慨に胸を膨らませておられることと拝察いたします。

さて、新歯学士の皆さんに申したいと思います。皆さんは間もなく難関の国家試験に見事に合格されて歯科医師になれるわけですが、それからさらに1年間の臨床研修で研鑽する義務があります。その後は大学院博士課程への進学

や、社会人歯科医師として、各分野に分かれて活躍していくことになります。それぞれに使命感ややりがいを見つけてくれるものと思います。

本日ここに卒業式を迎えられた新歯学士の皆さんは、6学年の最終課程を精一杯勉強に励み、目覚ましい成績を挙げられた精鋭揃いの方々であることを担当教員共々と私たちはよく知っています。そのような卒業生の方々へ贈りたいと思います。これからの人生に立ち向かう心がまえについて、明治維新の立て役者となる多くの人材を育成された吉田松陰先生の教えは「まずころざし立てることを最優先事項とせよ」、105歳まで現役医師を勤められた日野原重明先生は「常に創(はじ)めることを考え、実行せよ」、iPS細胞でノーベル賞をとられた山中伸弥先生は「Vision & Work hard」、107年前に本学を創立された藤原市太郎先生は「博愛と公益に努めよ」という言葉を残されました。私はこれらの言葉に「希望、そして努力を」という言葉を加えて、皆さんに贈りたいと思います。

次に、めでたく大学院を修了された新博士の皆さんへ申したいと思います。歯学部を卒業後、さらに上級のコースへ進まれ、勉強意欲、研究意欲に燃えて、ここまでの苦労や努力に耐えてこられ、このたび見事に「博士」の学位を授与されました。このご苦労の成果を、皆さんのこれからの各自の職業人生や、あるいは研究人生においてさらに磨いていただき、歯科界の各分野のリーダーになっていただきたい、存分に活躍していただきたいと祈念します。

そしてさらに期待したいことは、皆さん方は恵まれて、また幾多の努力を経てここまで進んでこられた、まさに国の宝となるエリート人材だということでもあります。今後の方向として、できましたらお一人でも多くの方が大学に帰ってきて、



将来、教育研究機関の「教授」になっていただき、次世代の教員人材を多く育ててもらう道を期待します。あるいは別の道として、直接に患者さんに喜んでもらえる「イノベーション治療法」を開発することも大学院卒の重要な役割であると思います。そして将来、いつの日か、「博愛」と「公益」と

いう究極の目標へ一歩でも近づいてほしいのであります。同時にこの大学の力を一段と高めていただきたいと願っています。

以上、新歯学士と新歯学博士の皆さんへの理事長・学長式辞といたします。

同窓会会長祝辞

大阪歯科大学同窓会 会長 生駒 等

平成 29 年度・大阪歯科大学卒業式並びに大学院学位認証式に際し、九千余名の同窓会会員を代表してお祝いを申し上げます。

大学 66 回卒業生の皆様・大学院博士課程を修了された新進気鋭の先生方並びに今日、晴れの舞台を待ち望まれ、ご参列のご父兄の皆様にご心から祝福とお喜びを申し上げます。

現在、歴史上類を見ない速度で進行する超少子、超高齢社会を迎え、将来の社会保障をどのように支えてゆくかが、大きな課題となっており、国による社会保障制度改革もいよいよ本格化してまいりました。

「時々入院、ほぼ在宅」という言葉で代表されるように「治す医療から治し支える医療」への転換が求められて「医療機能の分化と連携の強化」による地域医療構想策定という名の地域医療再編が迫られ、かつ住み慣れた地域で自分らしい暮らしを生涯可能にする「地域包括ケアシステム」の構築がはかられています。

時代の潮流が一気に押し寄せてくる変化の時代に皆様は巣立っていくのです。しかし、逆にこれらを「好機」と捉えることも可能です。

皆様の将来には洋々たる人生が開かれていることも、まぎれもない事実です。是非、大きな夢をもっていただきたいと思います。

20 代、30 代は人生の基盤となる時代です。



夢をもち、その夢を仲間と語りあってください。

情熱をもち、その情熱を仲間と語りあってください。

生きる姿勢が、これからの人生に大きく関わってきます。

皆様が今日まで大阪歯科大学で学んだことは、これから歩まれるキャリアの基盤になることは間違いありません。しかし、全面的にそれにのみ依存しては、今後のキャリアを形成していくことは出来ません。一人ひとりが、みずからの意志によってキャリアアップしてゆくことに刻んでください。

結びに、皆様、大阪歯科大学の卒業生であることを誇りにしていただきたいと思います。しかし同時に、今ある大阪歯科大学の名声は本学のために骨身を惜しまず尽くし、時には、いばらの道を踏み分けてくださった先人の方々が担い手となって、築き上げたことを忘れてはなりません。この誇りを胸に皆様、リーダーとなり歯学、医療の向上、発展に大きく寄与されることを心から期待しております。

本日は、誠にありがとうございました。





学位・博士(歯学)授与

藤尾 美穂 甲第813号 平成30年3月9日

Biocompatibility of titanium surface nanostructures following chemical processing and heat treatment (化学合成法と加熱処理を施したナノ構造析出純チタン金属表面の生体適合性)

松瀬 和也 甲第814号 平成30年3月9日

Periodontal regeneration induced by porous alpha-tricalcium phosphate with immobilized basic fibroblast growth factor in a canine model of 2-wall periodontal defects (イヌ下顎骨二壁性骨欠損モデルにおける塩基性線維芽細胞増殖因子を固定化した α -リン酸三カルシウムの歯周組織再生)

藤田 敦子 甲第815号 平成30年3月9日

Increased Expression of 11 β -Hydroxysteroid Dehydrogenase Type 1 in Experimental Periodontitis Induced by Lipopolysaccharide from Porphyromonas gingivalis (Porphyromonas gingivalis 由来の LPS を用いた歯周炎モデルラットにおける 11 β -HSD1 発現の増加)

山内 伸浩 甲第816号 平成30年3月9日

High-Power, Red Light-Emitting Diode Irradiation Enhances Proliferation, Osteogenic Differentiation and Mineralization of Human Periodontal Ligament Stem Cells via ERK Signaling Pathway (高出力、赤色 light-emitting diode 照射は、ERK signaling 経路を介してヒト歯根膜幹細胞の増殖、骨分化および石灰化を増大する)

永久 景那 甲第817号 平成30年3月9日

An examination of the cumulative survival rate of narrow-diameter dental implants in the mandibular molar region: a retrospective cohort study (下顎大臼歯部における細径インプラント累積残存率の検討: 後ろ向きコホート研究)

武田 吉裕 甲第818号 平成30年3月9日

Surface modification of porous alpha-tricalcium phosphate granules with heparin enhanced their early osteogenic capability in a rat calvarial defect model (ヘパリンによる表面修飾は α 型リン酸三カルシウム多孔質顆粒の初期骨形成能を増強する)

中山 雄司 甲第819号 平成30年3月9日

Induction of Mesenchymal Stem Cells-like Cells Derived from Human Gingival iPS Cells into Osteoblast-like Cells (歯肉 iPS 細胞に由来する間葉系幹細胞様細胞からの骨芽細胞様細胞への誘導)

東 仁 甲第820号 平成30年3月9日

The Effects of Minimally Invasive Periodontal Surgery on Bone Resorption and Angiogenesis (低侵襲で行う歯周外科が骨吸収および血管新生に及ぼす影響)

森岡 裕貴 甲第821号 平成30年3月9日

Bactericidal effect of performic acid on salivary bacteria (過ギ酸による唾液細菌に対する殺菌効果)

覺道 知樹 甲第822号 平成30年3月9日

Functional recovery by application of human dedifferentiated fat cells on cerebral infarction mice model (マウス脳梗塞モデルにおけるヒト脱分化脂肪細胞による機能回復)

田代 悠一郎 甲第823号 平成30年3月9日

Analysis of Titania Nanosheet Adsorption Behavior Using a Quartz Crystal Microbalance Sensor (QCM センサを利用したチタニアナノシートの吸着挙動の解析)

三木 晴加 甲第824号 平成30年3月9日

Comparison of the Influence of the Newly Synthetic Peptide and Enamel Matrix Derivative in Early Wound Healing Process of the Artificial Periodontal Tissue Defects in Rats (ラット人工的歯周組織欠損部の早期創傷治療過程における新規合成ペプチドとエナメルマトリックスデリバティブの影響の比較検討)

石川 敬彬 甲第825号 平成30年3月9日

Study on Photodynamic Therapy with 8-MOP for Oral Mucosal Disease (口腔粘膜疾患への8-MOP使用によるフォトダイナミックセラピーの検討)

野口 正皓 甲第826号 平成30年3月9日

Effects of α -tocopherol on bone marrow mesenchymal cells derived from type II diabetes mellitus rats (α -トコフェロールがII型糖尿病ラット由来骨髄間葉系細胞に及ぼす影響)

中井 健一郎 甲第827号 平成30年3月9日

Effects of herbal medicine components on the physical properties of trial denture adhesives (生薬成分の配合が試作義歯安定剤の物性に及ぼす影響)

中井 啓介 甲第828号 平成30年3月9日

Simple and rapid detection of Rothia mucilaginosa by loop-mediated isothermal amplification method (LAMP 法を応用した Rothia mucilaginosa の迅速・簡易検出法の確立)

岩佐 一弘 甲第829号 平成30年3月9日

Effects of NOD1 in Human Dental Pulp Fibroblast Like cells (ヒト歯髄由来線維芽細胞における NOD1 の影響)

原 弓加里 甲第830号 平成30年3月29日

Effect of nano modified titanium surface on adsorption of rat periodontal ligament cells (純チタン金属表面上のナノ構造がラット歯根膜細胞の挙動に与える影響)

西崎 真理子 甲第831号 平成30年3月9日

Bioactivity of NANOZR Induced by Alkali Treatment (アルカリ処理したナノジルコニアの生体活性)

張 泓瀨 甲第832号 平成30年3月9日

Effect of ultraviolet treatment on bacterial attachment and osteogenic activity to alkali-treated titanium with nanonetwork structures (アルカリ処理によりナノ構造制御された純チタン金属表面への UV 処理が細菌の接着および硬組織分化誘導に与える影響について)

足立 哲也 乙第1609号 平成30年3月29日

Inhibitory mechanisms of NK92 cell cytotoxicity by IL-17 stimulation(IL-17 による NK92 細胞の細胞傷害能抑制機構について)

大島 隆志 乙第1610号 平成30年3月29日

Effect of IL-12 family cytokines on NK92 cells (IL-12 ファミリーサイトカインの NK92 細胞に対する影響について)

前田 羊一 乙第1611号 平成30年6月27日

No inflow of impression material into the oropharynx during full mouth bite impression taking confirmed with dental CBCT (歯科用 CBCT を用いた全顎咬合印象採得時の咽頭の様相)

吳 和達 乙第1612号 平成30年6月27日

Time series analysis of occlusal force during maximum intercuspation -Comparison of healthy and TMD subjects- (咬頭嵌合に伴う咬合力の時系列解析-健康者と顎機能障害者との比較-)

植埜 修司 乙第1613号 平成30年9月26日

Image-based differentiation of osteomyelitis, especially between osteoradionecrosis and medication-related osteonecrosis of the jaw (放射線照射および骨吸収抑制薬による顎骨への影響に関する画像的研究)

古城 美佳 乙第1614号 平成30年9月26日

Changes in soft tissue structures around the lips associated with sagittal split ramus osteotomy in skeletal Class III female patients - Differences in mandibular plane angle - (下顎枝矢状分割術を併用した女性骨格性下顎前突症患者的の口唇の変化-下顎下縁平面角の違いによる考察-)

桑原 明彦 乙第1615号 平成30年9月26日

Microvascular architecture of the buccal periosteum of the mandibular body in the dog (イヌ下顎骨下顎体における頬側骨膜の微細血管構築)

大和 麻琴 乙第1616号 平成30年9月26日

Effectiveness of 3D-CT imaging in frontal cephalometric diagnosis (顎顔面部の正面形態診断における正面 3D-CT 規格画像の有用性について)

2017年度

大阪歯科大学 歯科技工士専門学校・ 歯科衛生士専門学校卒業式

春の空が広がった3月13日、大阪歯科大学歯科技工士専門学校・歯科衛生士専門学校の2017年度卒業式を行い、歯科技工士学科（第53期生）10人、歯科技工士専攻科（第37期生）1人、歯科衛生士学科（専門41期生）42人が、歯科保健医療の世界へと新たな一歩を踏み出しました。

歯科技工士専門学校53年の歴史に幕を下ろすこととなったこの日の卒業式。小正裕学校長は告辞の中で次のように述べ、最後の卒業生たちを送りました。「日本で就業されている歯科技工士は高齢化に伴い、だんだんと少なくなってくると思う。そうすると、あなた方は歯科医療の危機に遭遇することになる。しかし私は、歯科医療の未来を暗いものとは思っていない。あなた方、若者の力があるから。今後の歯科医療はきょう、卒業される皆さんにかかっている。歯科技工士の誇りを持って、地域の人々の健康長寿のために力を尽くしていけることを祈っております」



2017年度

定年退職者

2018年3月31日をもって下記の皆さまが定年退職されました。

定年を迎えるにあたり、3人の方からお寄せいただいた挨拶文を掲載します。

薬理学講座	主任教授	大浦 清
生理学講座	主任教授	西川 泰央
口腔外科学第一講座	主任教授	森田 章介
内科学講座	主任教授	大久保 直
歯科理工学講座	講師	大島 浩
欠損歯列補綴咬合学講座	講師	兼平 治和

歯科技工士専門学校	教務主任	森川 良一
歯科技工士専門学校	教員	中西 正泰
附属病院	歯科衛生士主任	藤林由利安
附属病院	歯科衛生士	松本千多香

大阪歯科大学における49年間

（人間万事塞翁が馬、人との出会いを大切に）

薬理学講座 主任教授 大浦 清



1969（昭和44）年4月に大阪歯科大学に入学以来、49年間お世話になりましたが、2018（平成30）年3月末日をもって定年退職いたしました。この間、多くの皆様方からご支援とご厚情を賜り、おかげさまで無事に定年を迎えることができましたことに深く感謝申し上げます。良き恩師、先輩、同僚、後輩に囲まれ、幸せな教育、研究生生活を送ることができました。

1969年入学といいますと東京大学の入学試験が紛争等で中止になった時期で、競争の厳しい時でもありました。同級生は256名で、A、B、C、Dと四つ

のクラスに分かれていました。入学後はドイツ語研究会に入部し、大野敬一郎教授のご指導により、病院実習の際の口腔外科のカルテはドイツ語で書けるようになり、までになりました。

入学2年後の三年生の夏にライオンズクラブの交換学生として6週間シアトルの一般家庭にホームステイいたしました。この際の経験により海外の人々との対話に気後れすることがなくなり、後の海外留学に非常に役立ちました。

1975（昭和50）年に大学卒業とともに、大学院（薬理学専攻）に入学いたしました。森政和先生のもと、炎症薬理学、



免疫薬理学に関する研究を行いました。最初の研究発表は JADR (IADR: 国際歯科研究学会の日本部会) でした。4 年後の 1979 年に大学院を無事修了し、歯学博士の学位を頂きました。英語での学位論文を出すことができ、これが後の海外留学の応募の際、役立つこととなりました。

大学院卒業後、助手に採用され、2 年後に講師に就任いたしました。1982 年には、多くの海外の大学、研究所に応募書類を出し、1983 年 5 月から 1985 年 6 月までアメリカの国立歯学研究所 (NIDR; 現 NIDCR: National Institute of Dental and Craniofacial Research, NIH) の Dr. Mergenhagen のラボの Cellular Immunology Section Chief、Dr. Sharon Wahl と共同研究を行いました。このラボでは白血球の機能に関連した創傷治癒の研究を従来行っていたのですが、当時アメリカでエイズが出始めた頃で、エイズ患者の単球を用いた研究も行いました。それらの成果で 9 編ものインパクトファクターの高い論文等を発表することができました。(留学していた 2 年間では 9 編もの論文は当然できませんので、帰国後、毎年春休みや夏休み等に 1 ~ 2 カ月共同研究に単身で出張させていただきました。) できればもう 1 年研究を続けたかったのですが、森政和先生が学長に就任され、できるだけ早く日本に帰国するようにとのことで断念いたしました。

帰国後の 1989 年に助教授に就任し、2 年後の 1991 年に 40 歳で教授に就任いたしました。就任時は定年まで 26 年 8 カ月もあると思ったのですが、あっという間に過ぎ去ってしまいました。

教授就任後は 5 年ごとの研究計画を立て、教室員はすべて国内外を問わず公募で採用いたしました (総数 19 名)。

学会活動は、最初に研究発表をしました JADR に縁があるのか、IADR の六つの委員会を通算 18 年間務めることになりました。現在も 2019 年まで Annual Session Committee の委員を務めております。国内の学会長は 1999 年第 47 回 JADR 総会をはじめ六つの大会長をさせていただき、いろんなジャンルの先生方

との人脈も作ることができ幅広く勉強させていただきました。

2011 年 3 月にアメリカ・サンディエゴで開催された第 89 回 IADR 総会において Distinguished Scientist Award - Pharmacology / Therapeutics / Toxicology Research Award を受賞いたしました。授賞理由は「1975 年より一貫して薬理学研究者として、局所麻酔薬、抗炎症薬、化学療法薬などの薬物およびウニ毒と白血球の遊走能 (Chemotaxis)、貪食能 (Phagocytosis) および活性酸素産生能 (H_2O_2 、 O_2^- 、NO) など白血球機能を中心とした生体防御機構との関連性に関する研究を進めてきている。また、AIDS、慢性関節リウマチ (RA)、歯周疾患、口腔がんなどの各種疾患とサイトカインとの関連性を調べ、有効な治療方法を検討するとともに、歯周疾患およびインプラント治療における遺伝子診断の可能性を検討し、個人個人に合ったオーダーメイド治療の確立に貢献してきている。」であります。国際的な賞の受賞は、研究者として非常に光栄であるとともに、教授就任 20 周年の良い記念にもなりました。後輩の若い研究者は、積極的に英語で論文を発表し、自信をもって、もっと国際舞台で大いに自分をアピールしていただきたいと願っております。

2012 年には全国 29 歯科大学・歯学部の基礎系 7 講座が集まった歯科基礎医学会の理事長を 4 年間務めさせていただきました。その間、法人化も行うことができました。基礎系教授 200 名以上を引っ張っていくトップはかなり緊張感があり、非常に勉強になりました。

大学では長年、教務部委員会に所属し、1995 年より 6 年間教務部副部長をさせていただきました。さらに 1995 年から 2 年間国際交流委員会の委員長も仰せつかりました。上海、北京、西安、華西、広州の五つの大学とも学術交流締結することができました。

その後、1997 年には当時の佐川寛典学長より 21 世紀に向けての新しいカリキュラムを作成するようにのご下命を受け、2 期 4 年間カリキュラム委員長を引き受けました。当時、文部科学省にお

いてコアカリキュラムの作成が始まり (これが後の CBT や OSCE のもとになりました)、東京医科歯科大学歯学部長の江藤一洋先生が座長で、歯学における教育プログラム研究・開発の委員会が作られ、北海道大学、東京医科歯科大学、東京歯科大学、日本歯科大学、日本大学、大阪歯科大学、大阪大学、九州歯科大学、九州大学の 9 大学から委員が各 1 名参加し、1 年目はアメリカ・ハーバード大学、ペンシルベニア大学、カリフォルニア大学サンフランシスコ校 (UCSF) 等 3 校の医学部・歯学部、2 年目はヨーロッパに行きスウェーデンの Karolinska Institute をはじめ、デンマーク、イギリス、オランダ 4 カ国 6 大学の視察を行い、コアカリキュラムの作成の参考にいたしました。その後、歯学教育プログラムワークショップが開催され、29 歯科大学・歯学部の教育責任者 200 名近くが大阪歯科大学楠葉学舎の講堂に集まり、熱心な議論が行われました。そのシンポジウムの座長も務めさせていただきました。大阪歯科大学ではそれらを参考にし、講師以上の教員を委員に入れ、各講座単位の従来の教育ではない全統合型のカリキュラムを作成いたしました。本カリキュラムは、日本歯科医学教育学会でのシンポジウム、教育講演等で全国に披露させていただきました。当時は、全国的に統合型の教育に移行し始めた時期でもありました。

2003 年から 5 年間は中央歯学研究所の所長を務め、国内外の著名な先生方をお招きし、懇親会では学内の若い先生方に直接有益なお話もさせていただきました。

2008 年から 4 年間は大学院歯学研究科科長を務め、大学院 1 学年 30 名の定員も充足するとともに、外国人留学生の入学も達成することができました。さらに、大学院生の学位論文はすべて英語とすることもできました。これも大学院教員の先生方のご指導の賜物と感謝申し上げます。ありがとうございました。

2011 年には大学創立 100 周年とともに、大学院設立 50 周年を迎えることができました。大学院設立 50 周年を記念して 2011 年 9 月から 10 月まで樋田京子先生、中島美砂子先生、坪田一男先生、

岩田健太郎先生、満屋裕明先生の5名のアグレッシブに研究されている著名な先生方をお願いして、再生医療、新型インフルエンザ、エイズに関する記念講演会を開催いたしました。若い先生方に大きな刺激を与えていただけたと思っています。

最後になりましたが、今日まで何事にも積極的に取り組むことができ、多くの事項を達成できましたのも、母校の大先輩で恩師でもあります、白数美輝雄、森政和、稗田豊治、佐川寛典、古跡養之真、今井久夫、川添堯彬学長の7名の先生方に、その折々においてご指導、ご助言、

ご支援いただきましたおかげとありがとうございました。感謝申し上げます。

わが母校、大阪歯科大学の今後益々のご発展と皆様のご健勝を祈念いたします。

定年退職のご挨拶

生理学講座 主任教授 西川 泰央



卒業後、直ちに母校に籍を置き、学生時代も含めて48年もの長きにわたりお世話になりました。私は今年、平成30年3月に定年を迎えました。

聖書の言葉に、「何事においても最もふさわしい時期があり、この世の中のすべてのことには時がある。すべての物事には、その始めとその終わりにふさわしい時期がある」と記されています。私にとりましては大学教員を終わりとするに、今がその時であると実感しております。

昭和51年卒業と同時に、何もわからないまま、生理学講座に助手としての職を得ました。当時講座を主宰されていた覚道幸男教授と私の父親がお付き合いしていたことが生理学講座に在籍した理由の一つであると思います。さらに言えば、学生時代の臨床実習や模型実習が苦手、模型実習では同級生の力添えでどうにかやっと合格印をもらえるといった有様でした。そうしたことが、基礎講座に残った一因というよりも、これが最大の理由であると思います。

生理学講座に入室してほどなく、覚道教授から痛覚生理学を学んでこいの命

をうけ、何もわからないままに、津市内にアパートを借り、滋賀医科大学生理学第一講座・横田敏勝教授の下に参りました。横田教授は北海道大学医学部出身で長く海外で痛覚生理学の研究活動をされており、その分野の第一人者でありました。3年のちに、本学に戻ってからも、50歳まで毎週2日ほどは、奈良の自宅から滋賀医大に実験に通わせてもらいました。また、昭和54年から33年間非常勤講師を拝命し、医大生の生理学実習のお手伝いをしてまいりました。今現在の本学の服務規程では、許される行為ではありません。

横田教授は「なあ、ヤスオ君（先生は、常にファーストネームで呼称されました）、人が見ておろうが、見ていなかろうが、そんなことは関係なく、仕事に励め。しかし、どこかで誰かがきっと見ている」とおっしゃっていました。また、万人全て「人生山あり谷あり」、人の一生の内にはいろいろな辛い局面があるが、決して「世を拗（す）ねることのないように」、常に「得意淡然、失意泰然」であれと、骨身に沁みる言葉を教えられました。

研究は常に、情報収集、データ解析、仮説の構築、検証、成果の普遍化といったサイクルの繰り返しであると思います。研究のイロハを教えていただいたおかげで、今まで顎顔面の痛みの生理、特に歯痛の中樞投射に関する研究を進めることができ、本当に充実した日々を過ごすことができました。

本学での恩師、覚道教授と吉田教授は、教育・研究に熱心であるだけでなく、お二人とも文章表現が大変上手でありました。

覚道教授は20数年にわたり本学学会

の機関誌である『歯科医学』や『JODU』の編集長をされていたので、文章の組み立てやその内容表現には大変厳格な注文を付けられました。文章作成の難しさ、またその大切さを、対面で、手を取って教えていただきました。大変気難しい先生でしたが、仕事を離れると愉快な一面もお持ちであり、お酒もよく飲まれました。「西川君、人間、すこしくらい品行は悪くてもよいが、品性は良くなければいけない」との言葉も頂戴しました。「粗にして野だが卑ではない」とのことでありましょう。

吉田教授は覚道教授を長きにわたりサポートされ、覚道教授の薫陶を受けられた大先輩であります。助手・講師時代の私の愚痴や悩み事をよく聞いていただき、また、励ましてもいただきました。「叱られたり、人前で失敗したり、恥をかいたりする事は誰しもある。いつまでもそれを引きずることなく、すぐに忘れなさい。そして、前へ進みなさい」と諭された記憶があります。どれもこれも、私には重たい言葉でありました。

今日まで、横田教授、覚道教授、吉田教授をはじめ多くの先生や同僚に教を乞い、何とかやってこられました。本当に有り難いことと思っております。

教育面では歯学部は、プレ国家試験に相当する共用試験CBT・OSCEの将来的合否判定や、平成30年からは社会情勢の変化に合わせた、国家試験制度の改善等の大きな転換期を迎えました。これを機会に新制度での歯学教育の在り方、さらに歯学部の新しいアイデンティティーの確立のきっかけになれば素晴らしい改善策である、と考えております。多職種連携の下、多様な、流行り言葉でいえばダイバーシティ（Diversity）なニーズに



対応できる歯科医師の養成、卒前から卒業後のシームレスな教育の重要性が叫ばれています。研究だけではなく、大学がもつ本来の機能である教育の重要性を再認識するいい機会が得られたものと考えています。

教えを乞うた先生は皆、よく本を読まれました。昔から学生とは「読書する人であり、その上で、社会的モラトリアムが許される若者」と申します。この考え

の下、生理学講座員は、すべての学生が立派な歯科医師として活躍できるように、知識・技能教育に精力的に取り組んでおり、また態度教育では、いわば当たり前のことを学生たちが素直に聞いてくれる環境づくりにも注力してきました。

卒業後、いろんな場所で多くの研究仲間を得ることができました。多くの師、先輩、友人・仲間にも恵まれたことは、私にとって大変幸せなことであり、終生の

宝物になりました。仕事を続けるうえで大切なことは、人との繋がりであることも経験しました。すなわち、ヒューマンネットワークを大切にすることで、自身の視野を広げることができるようになったと思います。素晴らしい出会いに、唯々感謝あるのみです。

最後に、大阪歯科大学のますますの発展と皆様のご健勝を祈願申し上げます。長い間、本当に有り難うございました。

定年退職のご挨拶

口腔外科学第一講座

主任教授 森田 章介



私は2018（平成30）年3月31日をもって大阪歯科大学を定年退職いたしました。研修生時代を含め42年の長きにわたり大学で仕事をさせていただき、無事にこの日を迎えられましたことは、皆様方のお蔭と心から感謝申し上げます。

高知市で生を受けて、地元の高知県立高知追手前高等学校を卒業後、大阪歯科大学に入学したのは1970（昭和45）年4月のことでした。学生生活は牧野での教養課程2年、天満橋での専門課程4年からなり、牧野では約240名の同級生が4クラスに分かれ、授業を受けていました。また、クラブ活動は中学校時代からの柔道部に所属し、歯学体での優勝など華やかな時代を経験いたしました。当時は部員も25名以上在籍し、にぎやかな練習風景でした。臨床実習は5年生の1月から6年生の12月までの1年間で、年末から国家試験の勉強に精を出し、試験は卒業後の4月初めに筆記試験とカービング、インレーの窩洞形

成、チャンパーオープン、総義歯の陶歯排列等の実技試験が行われていました。筆記試験は私たちの試験から多肢選択問題にかわり、問題集がないのに困っていたのを思い出します。

1976（昭和51）年3月に本学を卒業と同時に、口腔外科学第二講座に入局しました。これについては、所属していた柔道部部長の口腔外科学第二講座の岡野博郎教授（現名誉教授）に、「数年間口腔外科の勉強をしておくが高知に帰っても困らないぞ」と言われていましたし、柔道部の先輩が口腔外科学第二講座に数人在籍していたことや、自分自身が口腔外科に興味を持っていたこと等から、自然と口腔外科学第二講座に入局してしまったというのが本音です。

第二講座時代は副手制度の廃止に伴い、研修生としてスタートしました。臨床では埋伏歯の抜歯や消炎治療、顎骨骨折の治療などに追われる一方、専攻生の実験や論文作成の手伝いをし、アクリリクレジジン注入法、組織標本とくに脱灰組織標本の作製法、軟エックス線写真撮影法、さらにこれらの観察法につき岡野先生をはじめ解剖学講座、口腔病理学講座、歯科放射線学講座の先生方にたくさんの方の事を教えていただき、その後の口腔外科医として歩いていく大きな力となりました。とくに顎骨標本の作製は根気と時間が必要でしたが、腫瘍の発育や浸潤状態を検索するのに極めて有用で、研究室が楠葉に移るまで標本を作り続けていました。そして、歯肉癌に対する同時化学放射線療法の有効性や、歯源性腫瘍とくにエナメル上皮腫の発生から増殖

様式に関して多くの知見を得ることができ、治療法の選択基準についての提言を行ってきました。

岡野先生が講座員にいつも言われていたことは、「直視直達」「組織の色の違いを判別せよ」「速さではなく丁寧な手術をせよ」ということでした。「直視直達」は四文字熟語には出てきませんが、言わんとすることはよくわかると思います。術野をきちっと出して、器械器具を自在に使えるようにして手術せよということだと理解しています。今でも若手の先生方にはこの言葉を教えています。私は外科医ですが、血は大嫌いですし、恐怖を覚えます。出血は手術の筋道をわかりにくくしますし、組織の本来もつ色を隠してしまい、大きなミスにつながります。血管収縮薬を十分効かせること、切開していく組織の色を知ること、組織の層を見分けること、そしてきちんと助手がリトラクトできることが、丁寧で的確な手術の基本だと思っています。解剖学、放射線学そして病理学の知識が手術を行う上での大きなよりどころです。

1981（昭和56）年4月に口腔外科学第二講座助手として任用されました。日本口腔外科学会の専門医、指導医、そして学位を取得し、1995（平成7）年8月に講師、1997（平成9）年4月に助教授に昇任しました。口腔外科学第二講座で26年8カ月お世話になった後、2002（平成14）年12月1日付で白数力也前教授の後任として口腔外科学第一講座の教授に就任しました。講座運営の基本を、臨床ではこれまでのスキルをさらに磨いていくこと、教育では学生と身

近な関係を持って丁寧に教えること、そして研究では臨床での疑問を解明できるようなテーマをやっていくことを目標にしていきました。

講座の研究テーマとして、口腔腫瘍の発生や発癌に関する研究、口腔腫瘍とくに歯源性腫瘍の臨床病理学的研究、歯性感染症における起炎菌の薬剤耐性に関する研究、歯槽骨・顎骨再建や骨代謝に関する研究、唾液腺再生に関する基礎的研究、顎関節疾患に関する研究、口腔乾燥症やいわゆる舌痛症への精神面からのアプローチ、口腔癌の新規免疫療法に関する研究、柔道競技のスポーツ歯科医学的研究などについて大学院生を中心に行ってきました。これらの研究は多くの基礎講座の各主任教授ならびに講座の先生方にご指導いただいた賜物だと思います。この場を借りて御礼申し上げますとともに、今後も共同研究を続けられるようにお願いいたします。

教授就任直後、最も大変だったのは学生講義等の教育に関することでした。講義は口腔外科学第二講座と疾患別に担当しており、口腔外科学第一講座では、炎症、口腔粘膜疾患、外傷、嚢胞、唾液腺疾患、口腔外科小手術などが範囲でした。幸い「口腔外科学第一講座講義録」というテキストがあり助かりましたが、スライド作りをはじめ、自分の知識の不十分な所や確認しなければいけない所がたくさんあり、教えることの大変さを痛感しました。この講義録は3年前にB5版からA4版に変更し、図・表も追加するとともに見やすく、わかりやすく、覚えやすいように工夫しました。FDや授業改革が叫ばれるようになってきたときで、いかに学生に効率よく理解してもらうかに心を砕いた時代でした。また、学内のFD委員会委員長、共用試験実施機構歯学系 CBT 試験実施小委員会委員や事後評価小委員会委員や歯科医師試験委員（正幹事）を長年務めたことも教育上の大きな力となりました。

臨床では病態の診方や診断の進め方、また実際の手術手技等で新しい出会いがたくさんあり、自分の未熟さをまだまだ感じている毎日です。しかし、症例は宝物で、色々な方面から見直してみること

や、多数例を集めて検討することもスキルアップの一方法だと思いますし、前向き研究も大切です。そのためには個々の症例の詳細な記録を作成することが必須であり、日々の地道な努力と精進、そして適切な仮説を立てる思考力が必要です。また、患者さんとは笑顔で気さくに話ができるような関係を構築し、患者さんの信頼のうえに診断や治療を行えるよう心掛けることも極めて重要です。

年を重ねると学会等の仕事も急激に増えてきました。各種委員会委員や委員長を歴任し、また第69回日本口腔科学会学術集会をはじめ第34回日本歯科薬物療法学会、第20回日本口腔粘膜学会（現日本口腔内科学会）、第24回日本顎頭蓋機能学会（現日本口腔リハビリテーション学会）等の総会や日本口腔外科学会近畿支部学術集会、日本口腔科学会近畿地方部会、さらに2度の日本口腔外科学会教育研修会担当等があり、井関富雄准教授（現在主任教授）にはいつも準備委員長を務めていただき、医局の先生方にも多大の迷惑をかけてきました。本当にありがとうございました。

附属病院に関して少し述べたいと思います。私は覚道健治病院長時代に副病院長を8年務めた後、2016（平成28）年4月から病院長として安全、安心の医療に取り組むとともに、歯科大学病院としての特色ある医療の確立、そして何より患者増、収入増を目標に過ごしてきました。しかし、楠葉学舎竣工から約20年、また歯科医師臨床研修の必修化からも10年以上が経過し、各診療科ともにいわゆる中堅どころが少なくなっており、若手医員の育成が滞っていると思います。個人のスキルアップは当然ですが、自分が病院を支えている、医療チームの一員だといった認識をもち、診療することが病院の向上のためには最も重要と考えられ、病院医員から教授までの更なる意識改革が必要です。

クラブ活動について、柔道に関しては監督を経て、岡野先生の定年退職に伴い部長に就任しました。最大の思い出は2008（平成20）年の歯学体で35年ぶりに後輩たちが優勝してくれ、さらに連続優勝も達成してくれたことです。現在

は部員不足に悩んでいますが、何とか頑張りたいというのがOBの一致した願いです。岡本学柔道部後援会長はじめOBの先生方には、入学時から公私ともに大変お世話になり、お陰様で2013（平成25）年には全日本学生柔道連盟功労者顕彰を受け、現在も関西学生柔道連盟の監事として連盟運営に携わっております。なお、定年前には卓球部と写真部の部長も兼任していましたが、充分お役に立てず申し訳ありませんでした。

高知県人会については、故佐川寛典先生が長く会長を務められていましたが、私が後を引き継ぎました。当時は故毛利学名誉教授、福島久典名誉教授もおられ、毎年5月ころの新入生歓迎コンパでは皆さん酒豪で大変でした。最近は高知からの入学者が極めて少なくOB会の様相を呈していますが、有田憲司小児歯科学講座教授を中心に大阪歯科大学に高知県人有の意気込みを示してほしいものです。どうぞよろしくお願いします。また、同窓会高知県支部の先生方にはいつもよくしていただきました。本当にありがとうございました。今後もお付き合いください。

現在までたくさんの方々に支えられ大学生活を過ごすことができました。本学理事長・学長の川添堯彬先生はじめ学内の教職員の方々、さらに平素からいろいろな方面でお付き合いいただいている方々に感謝申し上げますとともに、皆様方のご健勝を心から祈念申し上げます。最後に大阪歯科大学のますますのご発展を祈念申し上げます。

2018年度

大学・大学院 入学式



穏やかな春の一日となった4月4日、午前10時から歯学部・歯学研究科の、午後2時から医療保健学部・医療保健学研究科の入学式を楠葉キャンパス講堂で行いました。一昨昨日に開設した大学院医療保健学研究科には、栄えある第一期生14人が入学しました。

歯学部・歯学研究科

理事長・学長式辞

理事長・学長 川添 堯彬

今年の春の到来は、昨年に比べてさらに早いようであります。すでに桜の花は方々で満開になり入学生の皆さんを一層祝福しているようであります。

本日、大学入学生・大学院入学生にとって、ともにこの日が新しい環境へ入るとき、社会へ向けての決意と誓いのときであり、新たなスタート地点であります。先ほど来、点呼におきまして、呼ばれた時に「はい」という元気のよい声をした人、これはきょう1日の一つの決意を立派に済ませたということで、本人の態度に敬意を表します。(また、元気のよい返事をした人が、例年よりも今年は多いような気がいたします。)

また、入学生のご父兄・保護者の方々、ご家族の方々にとりましても、今日の日が、期待と願いを込めた始まりの時であると胸に刻んでおられることと拝察いたします。

本日、歯学部大学並びに大学院に入学されたそれぞれ130名と28名の方々、両方の皆さんにこの式辞を贈りたいと思います。

本学は、1911年、明治44年に創立され今年で107年目になります。2011年11月には、その100周年記念のいろいろな行事をとり行いました。一万数千の卒業生を輩出しております。本学は、そういった長い伝統に支えられた大学であります。あなた方も、きょうから我々とともに諸先輩の築かれた大学愛、母校愛、そして同窓としてのきずなを汚すことなく受け継いでいくわけでございます。

本学の創設者であります藤原市太郎先生は、明治44年12月12日にある思いを抱いてこの学校を創立されました。その当時、日露戦争が終結して間もないころで、まだ世の中は騒然とし、社会は経済的にも緊縮状態であったと思われます。その中であって、藤原市太郎先生は、この大学を現在の大阪市福島区野田4丁目に創立されたわけであります。

その思いとは、「学校経営事業は営利に非ず、博愛公益のために努力するものなること」。この言葉が、2代目の理事長でありました古川賢治先生に申し伝えられ、この言葉だけはぜひとも将来に受け継いでいってほしいとの願いをもってバトンを渡された、大変尊い、また貴重で崇高な本学の建学の精神であります。

そして私は、この100周年の記念事業の中で発見したのは、100年たってもこの言葉はこれほど輝いて、またこれほど有益で私たち学ぶ者の心を勇気づけてくれる言葉はないのではないか。この言葉は、世界の国々、欧米先進国やアジア諸国のみならず、全世界のどの国へ行っても胸を張っ



て通じるスピリットではないか、と誇りに思います。

マザー・テレサの象徴ともなっております博愛の精神を思い出すまでもなく、これは本学に脈々と続いていることを実感するわけであります。どうか皆さんも、この精神を少しでも実践に向けて活動するとともに、究極の目標として胸に刻印され、また後輩にもこのスピリットを引き継いでいっていただきたいと思っております。

この言葉は、まさに学部学生諸君にとりまして、大学院生諸氏にとりまして、時や国を越えて通じるものであると思います。これほど崇高で誇れる言葉はほかにありませんか。私たちは、これをとてもすぐには達成できないかもしれませんが、少しでもその方向へ進む志を持ちたいと願っているわけであります。この我が校の誇れる建学の精神を、今私も大切に守り続けたいと強く肝に銘じているところであります。皆さん方もどうかお忘れのないように進んでいっていただきたいと思います。

以上、理事長・学長の式辞といたします。



医療保健学部・ 医療保健学研究科

理事長・学長式辞

理事長・学長 川添 堯彬

今、まさに桜花爛漫、春の到来の真ただ中になりましたが、本日この佳き日に大阪歯科大学医療保健学部並びに大阪歯科大学大学院医療保健学研究科の入学式を挙行了いたしましたところ、このとおり、大勢の来賓並びにご父兄・保護者・ご家族の皆さまのご臨席を賜り、誠にありがたく存じる次第でございます。只今の、入学生・大学並びに大学院の入学生からの点呼に際しまして、特に大きな声で返事をされた人は、将来の希望に向かって極めて大きな熱意を胸に秘めた、大変期待される学生であると、私は判断しました。少し弱々しい



声の方もございましたけれども、今後、医療を目指す皆さんといたしましては、将来に向かって、この尊い職域であります医療を目指す心構えを大いにこれから決意していただきたいと思います。医療は、弱者、苦しんでいる人を助けるこの上なく尊い領域であり、まさに、各人にとって最大の生きがいを感じるものであり、さらに国境・時代を越えて、どの時にあっても皆から尊敬され、求められる職業を目指しているわけでございます。

本学の医療保健学部は、国並びに時代の要請と期待を受けて、昨年4月1日に新たに開学した4年制大学でありまして、口腔保健学士の学位又は口腔工学士の学位、社会福祉士の資格を取得できる課程の4年制大学でございます。近く将来、地域包括ケアや他職種連携、他職種協同の医療形態の流れの中に日本国は必ず突入するわけでございます。そして今、そのような日本国の医療を担う人材を養成することが喫緊の課題とされています。そうした国の要請に答えて、我々は4年制大学を開学しました。特に私立大学におきまして、両学部、両学科を持っているところは、日本で初めてでございます。加えて、大学院をこの4月から開学し、第1期生としてこのように大勢の方を迎えることができました。私はこの大学院の開学に当たりまして、これほど大勢の応募者がいるということに、驚きと、喜びと、将来の日本国の医療の中に非常に大きな希望を見出すわけでございます。

2025年には後期高齢者が爆発的に増え、さらに2040年を超えますとそれがピークになってまいりまして、今の医療人材では、日本国だけでは決定的に不足すると推定されております。その中でも従来、専門学校までで教育されてこれた領域でございますけれども、これは、グローバルに求めら



れる範囲が拡大しまして、レベルもグローバルに基準をそろえなければ対応できないということになり、それが4年制大学の求められる所以であります。さらに大学院はそのような方向への指導者を育成・指導していかなければならない、本日入学の皆さんはそのリーダーになられる方々ばかりでございます。

本学は従来歯学部で107年の歴史をもって、営々と社会へ一万数千名の卒業生を出してきたわけでございますけれども、一つの職業単位で終結するという医療形態はもはや終わろうとしております。例えば歯科の医療機関で、「はい、それで治療が終わります」ということが言えなくなるわけでございます。歯科の診療が終わる頃には、他職種の方と協同して、その後のケアを継続して診る、あるいはかかりつけ医として継続する時代、しかもそれは地域完了型と言いますか、地域で終えなければならないということでございます。そういう意味で日本国の単科大学はいろいろ連携先を考えていかなければ医療は成立しないのであります。そういう医療形態が必須になるにおいて、皆さんが卒業された時にはその連携の真ただ中へ入って行って、そして引っ張りだこで求められる職業を、皆さんは国家試験さえ通れば得られるわけでございます。どうかそのことをよく心されてください。皆さん

は、これからの未来思考型の医療形態という中で、自分は活躍してみるんだ、という志を持たれた方であると思います。そのことは大阪歯科大学の、107年前に創立者が建学の精神として遺された博愛の精神、さらに公益活動に努力するということとぴたり一致するわけであります。

一つの国だけで苦しんでいる人を助ける時代はもはや去るかもわかりません。言葉の通じないところへさえも出向いて行って、あるいはそこから呼んで、医療の一員となってケアとキュアに参入しなければならない立場でございます。本学の期待というよりも、本当にこれは人類の求める方向であります。医療に際限はございません。人類が存在する限り、医療は国とか時代とか宗教とか、そういったものはまったく選びません。困っている人、苦しんでいる人を助けるのが博愛でございます。それに加えて、医療が博愛と連結されなければならないという考えでございます。

どうか本日、決意されてこの道に入られたからには、従来になかった領域を担わないといけない、そのリーダーシップ、あるいは旗手となって進んでいていただきたいと思えます。

以上をもって、本学の理事長・学長としての式辞とさせていただきます。



教授就任挨拶

2018年に次の8人の先生が大阪歯科大学教授に就任されました。

歯学部	細菌学講座	主任教授	沖永 敏則（6月1日付）
歯学部	薬理学講座	主任教授	野崎 中成（11月1日付）
歯学部	口腔外科学第一講座	主任教授	井関 富雄（11月1日付）
歯学部	内科学講座	主任教授	志水 秀郎（11月1日付）
歯学部	口腔解剖学講座	専任教授	隈部 俊二（4月1日付）
附属病院	障がい者歯科	専任教授	小野 圭昭（4月1日付）
医療保健学部	口腔保健学科	教授	元根 正晴（4月1日付）
医療保健学部	口腔工学科	教授	西崎 宏（4月1日付）

以下7人の先生の略歴とご挨拶を掲載します。



歯学部細菌学講座 主任教授

沖永 敏則 おきなが としのり

博士（歯学）/1977年生まれ

- ＜学歴＞ 2002年3月 九州歯科大学卒業
 2002年5月 第96回歯科医師国家試験合格
 2007年3月 九州歯科大学大学院歯学研究科博士課程修了
 博士（歯学）の学位を受領
- ＜職歴＞ 2007年4月 アメリカ・オクラホマ大学歯学部 Health Sciences Center
 Postdoctoral Fellow（2009年5月迄）
 2010年4月 九州歯科大学助教（感染分子生物学分野）
 2015年1月 九州歯科大学講師（感染分子生物学分野）

大阪歯科大学主任教授会のご選出及び大阪歯科大学法人理事会のご承認をいただき、2018年6月1日付で大阪歯科大学細菌学講座の主任教授を拝命いたしました。よろしくお願い申し上げます。

2002年に九州歯科大学を卒業後、九州歯科大学第1口腔外科での臨床研修医を経て、九州歯科大学大学院歯学研究科に入学しました。諸先輩の先生方より、歯科臨床家を目指すのであれば、口腔疾患の治療法だけでなく発生メカニズムや病因論について、大学院でしか学ぶことができない基礎歯学研究に従事し研鑽を積みなさいという助言をいただき、感染分子生物学（旧・口腔微生物学）を専攻しました。博士論文として、歯周病細菌感染マクロファージにおいて誘導されるアポトーシス（細胞死）のシグナル解析について国際誌に投稿し、博士（歯学）を取得しました。もともと臨床家としてひた走ることを考えていましたが、大学院4年生も終わるころ、諸先輩の先生方からアメリカ留学の機会をいただき、2年間人生経験しようと発起し留学することにしました。アメリカでは、オクラホマ州にあるオクラホマ大学歯学部 Health Sciences Center で Postdoctoral fellow として2年間研究に従事し、Justin Merritt 博士の研究室で、齲蝕原性細菌、歯周病細菌について遺伝子（バイオフィーム関連遺伝子）レベルでの解析を行いました。大学院で研究の楽しさ、Postdoctoral fellow で研究の厳しさを知ることができ、6年間基礎研究に従事したことで、基礎研究生活にどっぷりと漬かることができました。そのため、ポスドクの2年間が終わるころ、次のポスドクとしてヒューストンでのポジションの打診があり異動しようかと考えてしまいました。しかし、諸先輩方から、大学院及び留学経験を後輩たちに伝え未来の

歯科医師を教育してみないかとお誘いを受け、一方で、同僚のポスドクからは今帰国しないとアメリカに漬かってしまうぞ！と警告（？）を受けました。色々思案した結果、卒業後の目標とは大きく変わることになりましたが、大学人として教育並びに基礎研究に従事していくことを決意しました。帰国後は、九州歯科大学感染分子生物学講座にて助教・講師として、未来の歯科医師を育てる教育に励み、そして歯周病細菌を軸にした研究を続けてきました。本当に、多くの先生方との人のつながりに助けられ、そして導いていただいたと思います。

大阪歯科大学では、最低修業年限での国家試験合格を目標に掲げ、一人ひとりのレベルにあったきめ細かい教育、寄り添い・育み指導を展開しています。細菌学講座では、この目標に邁進すべく、学生が苦手とする基礎系知識について、各学年のニーズに合わせた丁寧な講義を行い、大学ポリシーに沿った教育を行っていきます。また、研究においては、先進的な口腔科学研究に従事しグローバルに活躍できる研究者を育てるべく大学院教育に励みながら、宿主・寄生体関係の観点から研究を行っていきます。口腔細菌叢の解析を軸に、健康長寿に役立つ口腔常在細菌の探求をすべく研究を展開し、また、細菌感染に応答する免疫細胞を主体に、その応答メカニズムについて分子生物学的解析を行っていきます。加えて、大学人として社会に貢献・発信できる研究展開を目指すため、企業や他大学、他分野との共同研究も積極的に行っていきたいと考えています。

まだ、着任早々で、若輩者ではありますが、講座員一同で探求心豊かな研究室作りを行ってまいります。今後とも、ご指導ご鞭撻の程、よろしくお願い申し上げます。



歯学部薬理学講座 主任教授

野崎 中成 のざき ただしげ

博士（医学）/1964 年生まれ

- ＜学歴＞ 1990 年 3 月 長崎大学歯学部卒業
 1990 年 5 月 第 83 回歯科医師国家試験合格
 1995 年 3 月 東京大学大学院医学系研究科博士課程修了
 博士（医学）の学位を受領
- ＜職歴＞ 1995 年 5 月 厚生省技官、国立がん研究センター研究所研究員
 1998 年 7 月 厚生省（厚生労働省）技官、国立がん研究センター研究所室長
 2002 年 12 月 大阪歯科大学講師（薬理学講座）



大阪歯科大学主任教授会の選出及び法人理事会の承認をいただきまして、2018 年 11 月 1 日付で大阪歯科大学主任教授（薬理学講座担当）を拝命いたしました。私は、2002 年に大阪歯科大学に着任し、これまでに 1,000 名を超える卒業生が歯科医師となり社会へ巣立っていきました。その学生と共に歩んだ経験は、私の貴重な財産となっております。大阪歯科大学は 1911 年に創立され、1 世紀を超えて歯科医師養成機関の雄として発展してきました。本学の長い歴史の中で、これから私がその職責を果たすことができるのは、ほんのわずかな時間ではありますが、本学のさらなる発展のため、次世代へ確実にバトンを繋いでいき、社会に誇れる大阪歯科大ブランドの歯科医師を世に輩出していくため、尽力したいと考えています。皆様、どうぞよろしくお願い申し上げます。

私は歯学部を卒業後、医学部附属病院において臨床研修を行いました。大学院医学博士課程においては外科学を専攻し、教授指導のもと、外来診療、手術助手などの臨床実地、BSL（ポリクリ）などの臨床教育を経験しました。これらの経験は、臨床前教育として位置づけられる基礎医学教育の礎となっています。薬理学は、基礎と臨床の境界領域の分野であります。薬理学教育を通じて、基礎から臨床へ橋渡し役を担い、生涯の診療に役立つ歯科医師養成教育を行っていききたいと考えています。また、大学院修了後、厚生省職員として勤務した国立がん研究センターでは、国内や海外の大学から学生を受け入れ、博士論文やポスドクの指導を行ってきました。その間に、海外の研究者と国際交流をする機会を得て、ドイツ・エッセン大学医学部、カナダ・トロント大学医学部 Mount Sinai 病院、アメリカ・ハワイ大学医学部の各研究室に公務滞在しました。がんや再生医学に関する国際共同研究を行い、国際

学術誌に発表するなど、その成果を国際社会に発信してきました。私のさまざまな経験、すなわち、大学における教育の経験、病院における診療の経験、研究所における研究者としての経験、国家公務員としての経験、それらすべての経験を本学の教育・研究に生かしていきたいと考えています。

私は大阪歯科大学に着任してからは、教育に最大の関心を持ち、学生教育に重心を置いて、最優先で取り組んできました。これまで、薬理学の講義・実習を担当するとともに、CBT 対策、国試対策講義など全学年での教育を経験してきました。また、特別アドバイザーとして、学生に寄り添い、育む教育やオフィスアワーを活用し学生一人ひとりの顔が見える少人数体制での指導を実践してきました。今後も、建学の精神を念頭に置き、本学の教育理念を誠実に実行していきたいと考えています。

就任して数カ月が経ち、学生が研究室に集うようになりました。新しい風が流れ、研究室は少しずつ変化しています。学生がたての糸、教員がよこの糸となって、一枚の布が形となり広がっていくことで、教育の成果を実感できると考えます。色彩豊かな、広がりのある大きな布を学生と共に織り成していきたいと思います。今後とも皆様のご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



歯学部口腔外科学第一講座 主任教授

井関 富雄 いせき とみお

歯学博士 / 1957 年生まれ

- | | |
|-------------------|---|
| <p><学歴></p> | <p>1981 年 3 月 大阪歯科大学卒業</p> <p>1981 年 5 月 第 69 回歯科医師国家試験合格</p> <p>1985 年 3 月 大阪歯科大学大学院歯学研究科博士課程修了
歯学博士の学位を受領</p> |
| <p><職歴></p> | <p>1985 年 4 月 大阪歯科大学助手（口腔外科学第一講座）</p> <p>1999 年 5 月 大阪歯科大学講師（口腔外科学第一講座）</p> <p>2008 年 4 月 大阪歯科大学准教授（口腔外科学第一講座）</p> |

大阪歯科大学主任教授会の選出及び法人理事会のご承認を頂き、2018 年 11 月 1 日付で大阪歯科大学口腔外科学第一講座の主任教授を拝命いたしました。今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。

私は父方の祖父、母方の祖父と両親が歯科医という家庭に生まれ、流されるままに 1975 年大阪歯科大学に入学しました。いずれは両親の後を継ぐのかなと考えていましたが、5 年生の手術見学で私の知らなかった歯科医の姿を見て興味を持ち、父に口腔外科学の大学院進学を相談したところ快く応援してくれることとなり、1981 年本学を卒業後、口腔外科学第一講座の大学院に入学しました。以後、故高須淳教授、白数力也教授、森田章介教授にご指導頂き、現在に至っています。偉大な先生方の後任として講座を運営していくのはまさに身の引き締まる思いですが、臨床、研究及び教育について簡単に抱負を述べさせていただきます。

臨床に関し大学病院の口腔外科は地域歯科医療の最後の砦として、かかりつけ歯科医の先生方のニーズにこたえていかねばなりません。現在ドライアイ・ドライマウス外来、顎変形症外来、顎関節外来、口腔腫瘍外来などの専門外来を設けていますが、それぞれの更なる充実をはかり、新たな分野の開拓も進めていくとともに、幼小児や有病者の方々の日帰り手術や短期入院治療も充実させたいと考えています。また、講座員のスキルを向上させるために、各種学会の認定医、専門医及び指導医の育成プログラムも充実させていきたいと思っています。

次いで研究についてですが、口腔癌の術後には重大な機能障害が発現しますが、積極的な検討はあまり行われてきませんでした。しかし近年 QOL の向上が重要であることが認識

され、保険診療に摂食機能療法や口腔機能管理が取り入れられるようになり、今後注目される分野になっています。現在まで術後の発語機能や頸部の諸筋群の機能について検討してきましたが、咀嚼、嚥下等口腔領域の諸機能について検索を深め、臨床に直結した研究を進めていきたいと考えています。

教育に関しては私立歯科大学の宿命である国家試験合格率の向上が最重要課題となります。そのためには日々の講義や試験も重要ですが、学生自身の学習意欲の向上が何より大切ではないかと思います。早期臨床体験や 5 年の臨床実習で実際の臨床に接している時の学生の目は輝いています。clinical exposure は学生の学習意欲向上と態度教育に極めて効果があるので、各学年に応じた臨床体験を体系的に構築することで将来医療人になる自覚と自主的に学習する意欲を養うことができるのではないかと考えています。

以上、臨床、研究及び教育について抱負を述べさせていただきましたが、実現に向けてがんばる所存です。今後とも何卒ご支援の程、よろしくお願い申し上げます。



歯学部内科学講座 主任教授

志水 秀郎 しみず ひでお

歯学博士、博士（医学）/1959年生まれ

- <学歴> 1983年3月 大阪歯科大学卒業
 1983年6月 第73回歯科医師国家試験合格
 1990年3月 大阪歯科大学大学院歯学研究科博士課程修了
 歯学博士の学位を受領
 1999年3月 大阪大学医学部卒業、第94回医師国家試験合格
 2006年2月 大阪大学大学院医学系研究科博士課程修了
 博士（医学）の学位を受領
- <職歴> 2010年4月 大阪大学医学部特任助教（老年腎臓内科）
 2011年11月 大阪大学医学部特任准教授（臨床遺伝子治療）
 2012年4月 関西福祉科学大学教授



2018年11月1日をもって内科学講座主任教授に就任しました志水秀郎です。よろしくお願い申し上げます。

私は元々本学の出身であり、祖父の代から歯科医の一家の長男であった私は何の疑問もなく本学に入学して歯科医になるべく勉強に励みました。教養課程が牧野にあり、臨床実習を今の附属病院西館G棟に学んだ時代です。今でいう携帯電話もインターネットもない時代でしたから、分からないことは図書館にゆき、下宿に遠く鋳造機やファーンスを買っては、日夜、技工や実習に追われていました。グローバルな世界観を持つ機会もなく日々の生活や実習に邁進して、それで十分に充実した生活を送っていました。

しかし、口腔外科の大学院に進んで自分の研究テーマを求める段になって初めて自分が何をしたいのかが分からず、友人と夜な夜な飲みに出ては人生を語り合ったのを覚えています。医局では骨をテーマとした一連の研究をしていましたので、この機会に世界を見ておきたいと考え、諸先生方のご協力を得て米国に留学して破骨細胞の培養を学び、一連の研究で学位をとることができました。そこで経験した異国異文化体験は教科書には載らない素晴らしいものでした。その後も研究心が抑えきれずに34歳で医学部を再受験し、新たに6年間の医学教育を受ける運びとなりました。

その後、さらに大学院で研究をしながら臨床を続けてきましたが、常に心の底にあったのは歯科大での学生、教員（講師（非常勤））生活であったと思います。自分のキャリアとして歯科医師であることを内科医で生かせないか、また医科での学びを歯科にフィードバックはできないかを考え続けてきました。私立の単科大学と国立の総合大学という背景の違いはありましたが、歯科が医科に求めているもの、医科が歯

科に協力できることが実務として身体に浸み込んできたように思えます。そして、昨今の全人的医療を遂行するために、医療連携により、歯科と医科がいかに協力してゆくべきかの橋渡しができるのではないかとという新たな理想を胸に、講座を立ち上げて参りたいという決意に至りました。

25年分ぶりに歯科大に戻って来て、懐かしいお顔を拝見して安堵する一方で、諸先生方の期待に応えるべく緊張感を持って出勤している日々であります。馴れ合いでは無く柔軟性をもって新しい世代の歯科大を担う一員として内科学講座を運営してゆく所存ですので、ご指導ご鞭撻をお願い申し上げます。どうぞこれからよろしくお願い申し上げます。



附属病院障がい者歯科 専任教授

小野 圭昭 おの よしあき

歯学博士 / 1959 年生まれ

- <学歴> 1984 年 3 月 大阪歯科大学卒業
 1984 年 5 月 第 75 回歯科医師国家試験合格
 1989 年 3 月 大阪歯科大学大学院歯学研究科博士課程修了
 歯学博士の学位を受領
- <職歴> 1989 年 10 月 大阪歯科大学助手（歯科補綴学第一講座）
 2010 年 4 月 大阪歯科大学講師（高齢者歯科学講座）

大阪歯科大学主任教授会の選出及び法人理事会のご承認をいただき、2018 年 4 月 1 日付で大阪歯科大学障がい者歯科の専任教授を拝命いたしました。これまで支えていただきました多くの方々に心より感謝申し上げますとともに、就任にあたり皆様へのご挨拶と今後の抱負を述べさせていただきます。

私は、1984 年に大阪歯科大学を卒業後、故西浦恂教授のもと、補綴学第一講座に入局し、1 年間の研修後、大学院歯学研究科博士課程（歯科補綴学専攻）に入学いたしました。以来、欠損補綴を専門として臨床、教育、研究を行ってまいりました。2000 年の介護保険の施行と時を同じくして、権田悦通教授のもと、高齢者歯科学講座への名称変更に伴い、臨床、教育の対象は歯科疾患から人へと変わり、試行錯誤しながらも研鑽を積んでまいりました。障がい者歯科では、従来対象としていた Parkinson 病、脳血管障害後遺症、認知症、摂食嚥下障害を持つ人に加え、発達障害、脳性まひ、精神障害、歯科恐怖症、異常絞扼反射を持つ人などその対象がより拡大したことから、今後さらなる研鑽を積み、診療科をより発展させていきたいと考えています。

障がい者歯科は、附属病院の診療科ではありますが、歯学部学生教育並びに大学院歯学研究科において障害者歯科学を担当し、診療だけでなく教育、研究においてもその役割を果たしています。

現在、歯科医師には従来の歯科治療の範囲を超えた役割が求められ、官民挙げて取り組まれている地域包括支援事業の中では、障がい者歯科においても地域と障害者福祉との連携が求められるなど、他職種と連携でき地域連携に対処できる歯科医師を育成しなければなりません。そこで、学生教育では、従来の障害者歯科学に加え、障害者医療の概念や知識を

実践的な内容を教示して理解させた上で、診療時に使用する手技などについては問題発見・問題解決型の講義を導入するなど、バランスの取れた教育を行いたいと考えています。現在、基礎実習は行っていないが、将来、臨床現場で実際に求められる手技などの実習を行いたいと考えています。臨床実習には 2019 年度より参加させていただき、病院実習生に障がい者歯科治療を体験させる予定です。

障がい者歯科医療の発展に伴い、近年、歯科保健やう蝕処置への対応に加え、障がい者歯科においても口腔機能へのアプローチが求められています。私は、顎口腔機能をテーマに研究を行ってきましたので、今後、口腔機能の生理的メカニズムの解明、客観的機能評価法の確立、さらに現在用いられている手技のエビデンスの解明をテーマとして研究を進めたいと考えています。

診療においては、診療環境を社会の変革に対応させ、障害のある人への歯科治療を充実させるとともに、麻酔科との連携をさらに密にして、障害者歯科三次医療機関としての役割を果たしていきたいと考えています。また、対象とする患者の範囲を拡げ、発達障害や中途障害により必然的に起こる摂食嚥下障害や味覚障害及び音声言語障害の治療も行い、附属病院として特徴のある診療を実践していきたいと考えています。さらに、今後、障がい者施設などの訪問診療も積極的に展開していきたいと考えています。

以上、教育、研究、診療に関して私の抱負を述べさせていただきました。今後とも、大阪歯科大学の発展と次世代の歯科医師育成のため、精一杯努力する所存でありますので、さらなるご指導とご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



医療保健学部口腔保健学科 教授

元根 正晴 もとね まさはる

博士（医学）、工学修士 / 1956 年生まれ



- ＜学歴＞ 1980 年 3 月 京都大学工学部化学工学科卒業
 1982 年 3 月 東京大学大学院工学系研究科修士課程修了
 工学修士の学位を受領
 2000 年 3 月 大阪大学医学部医学科卒業
 2004 年 3 月 大阪大学大学院医学系研究科博士課程修了
 博士（医学）の学位を受領
- ＜職歴＞ 1982 年 4 月 住友化学工業入社
 1987 年 4 月 通産省工業技術院大阪工業技術試験所入所
 2006 年 4 月 国立病院機構刀根山病院呼吸器内科医員
 2010 年 4 月 大阪府立急性期・総合医療センター呼吸器内科診療主任
 2014 年 4 月 阪和第二泉北病院内科医長

2018 年 4 月より大阪歯科大学医療保健学部口腔保健学科及び大学院医療保健研究科の教授を拝命いたしました。本学は、歯学部単科大学であった当大学の歯科衛生士専門学校と歯科技工士専門学校を発展的に解消し 2017 年 4 月に 4 年制大学として誕生したものです。

4 年制大学の歯科衛生士科及び歯科技工士科は日本でも大変珍しく、他大学に先駆けて本学部を設置された本学の学長・理事長の慧眼に敬意を表しますとともに、はえある新学部の教授に就任できたことを大変光栄に思います。

私はもともと環境問題に関心を持ち、公害問題の解決に寄与したく、高校卒業後に京都大学工学部化学工学科に入学し、卒業後は東京大学大学院に進学いたしました。東京大学大学院修了後に、企業や通産省傘下の研究所で、クリーンエネルギー（水素）の研究などに従事しておりました。高効率水電解や燃料電池の研究に携わっておりました。国家プロジェクト・サンシャイン計画の終了に伴い、公害被害者などの健康問題に取り組みたいと考え、1994 年に大阪大学医学部に再入学し、卒業後は直ちに大阪大学大学院に進学いたしました。荻原俊男教授の主宰される老年内科に入局し、高血圧の遺伝的研究というテーマで 2004 年に博士（医学）を受領いたしました。その後は、主として臨床病院で呼吸器内科の分野で、肺がん、肺結核、肺炎、喘息、COPD（慢性閉塞性肺疾患）などの臨床に従事しておりました。

とくにここ数年は、誤嚥性肺炎の臨床に携わっておりました。前勤務先（阪和第二泉北病院）では、大阪府堺市をフィールドとして、誤嚥性肺炎患者の地域連携・多職種連携の立ち上げに関わっておりました。肺炎は日本人の死因第三位に挙げられる重要な疾患ですが、肺炎の中でも特に高齢者の誤嚥

性肺炎の致死率は高く、治療そのもの（抗生剤治療）よりも治癒後の経口摂取再開や再発予防が難しく、急性期病院のみでの治療・ケアの完結は困難であり、療養型病院や在宅を含んだ地域での長期間のケアが重要であります。嚥下訓練と並んで口腔ケアが重視されるゆえんです。前勤務先でも、ST（言語聴覚士）と並んで歯科衛生士が病棟で活躍しておりました。現在は、堺市でも地域連携・多職種連携の考え方は、誤嚥性肺炎のみならず、慢性心不全や慢性腎不全などの慢性疾患にまで対象が広がっております。

当学部の卒業生は、歯科衛生士や歯科技工士として病院・診療所・地域で活躍する人材になることが期待され、その教育・研究に従事できることは大変な喜びです。また当大学では、私は医療保健学部の医務室管理医及び学生支援委員会も任されております。学生の心身の健康の維持と学生生活の不安を解消できるよう微力をつくす所存です。皆様のご指導・ご鞭撻をよろしくお願いする次第です。



医療保健学部口腔工学科 教授

西崎 宏 にしざき ひろし

歯学博士 / 1954 年生まれ

- ＜学歴＞ 1979 年 3 月 大阪歯科大学卒業
 1979 年 5 月 第 65 回歯科医師国家試験合格
 1983 年 3 月 大阪歯科大学大学院歯学研究科博士課程修了
 歯学博士の学位を受領
- ＜職歴＞ 1983 年 4 月 大阪歯科大学助手（歯科補綴学第三講座）
 1997 年 7 月 大阪歯科大学講師（歯科補綴学第三講座）
 2010 年 4 月 大阪歯科大学准教授（欠損歯列補綴咬合学講座）

2018 年 4 月 1 日付で、大阪歯科大学医療保健学部の口腔工学科教授と新設された大阪歯科大学大学院医療保健学研究科口腔科学専攻（修士課程）の先進口腔工学分野の教授を拝命いたしました。今後ともよろしく願いいたします。これまでご指導いただいた先生方やお世話になりました多くの方々に深甚なる謝意を表します。

私は、1979 年に大阪歯科大学を卒業し、歯科補綴学第三講座の大学院に入学し 1983 年大学院修了後、助手として採用されました。以来、歯科補綴学第三講座、欠損歯列補綴咬合学講座で、三谷春保教授、井上宏教授、岡崎定司教授のご指導のもと、局部床義歯学の教育、臨床、研究に 35 年間取り組んでまいりました。欠損歯列補綴咬合学講座では、近年、総義歯を含めた有床義歯教育全般も担当させていただきました。この度、医療保健学部では、局部床義歯学や顎口腔機能学などの実習や臨床実習を担当させていただきます。歯学部での模型実習を長年担当してきた経験を口腔工学科の実習に活かしていきたいと考えています。口腔工学の臨床実習や訪問診療の実習で歯学部の学生とコミュニケーションをとりやすくなるように、歯学部の学生の模型実習と同様な義歯をまず製作するようにしました。歯科医師が行う臨床ステップを実際に見せることや可能なものは体験させて、補綴装置製作時に生じる問題点を理解し解決する能力の向上を図るような実習を行います。多職種連携のチーム医療に技工士も参画することは重要ですので、法的な規制はありますが、歯科技工士も多職種連携の中でより一層活躍できるように早く環境整備をしていきます。他職種の方々とコミュニケーションをとれるような能力を学生が十分身につけて医療現場に出られるように教育するとともに、私の担当の有床義歯分野では、義

歯修理等の技工を的確にできるように局部床義歯実習や臨床実習を通じて教育していきたいと考えています。

大学院生の時は、顎関節患者の治療や咀嚼筋 EMG や顎運動を中心に研究を行っていましたが、その後、局部床義歯の研究として科研費で 1988 年ごろに「パーシャルデンチャーの維持領域の画像解析に関する研究」を行いました。維持領域を画像処理して識別表示するには、その頃のパソコンでは処理時間がかかりましたが、現在では、模型の 3 次元形状を短時間でスキャンして取り込むこともでき、装着方向を変化させた維持領域の変化をほぼリアルタイムで観察でき、アンダーカット量の分布も表示されます。また、デザインソフト上でパーシャルデンチャーのフレームワークを短時間に設計し、それを 3D プリンターで出力できるようになりました。局部床義歯領域でも、デジタル技術を使いこなせる歯科技工士が必要になってきていると思いますので、従来の製作法を十分教育した上でデジタル加工技術を身につけさせたいと考えています。

口腔工学の教育、研究を通じて、新設された大阪歯科大学医療保健学部と大学院医療保健学研究科の礎を築くのに寄与し、今後も大阪歯科大学の発展に貢献できるよう努めてまいりますので、ご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

国際交流

中国昆明医科大学と学生交流協定締結

2018年5月4日、川添堯彬理事長・学長と歯科東洋医学室の方一如教授が昆明医科大学を訪問し、学生交流協定書の調印式が執り行われ、学生交流協定を締結しました。

この調印式では、川添理事長・学長と昆明医科大学の李松校長が「両大学間の文化・教育・学術交流を深め、国際交流の輪を一層広めること」を誓い、双方が調印し、本学にとって16校目の海外協定校が誕生しました。

協定締結までの軌跡は、2017年7月14日に本学・方教授の昆明医科大学への視察に始まり、続いて同年11月13日に昆明医科大学・李校長を含む6名が川添理事長・学長を表敬訪問、学生交流に関する活発な意見交換を行いました。その際、「これから学術交流を深め、特に学生の交流を盛り上げ、輝かしい成果を収められることをとても期待しております」との理事長・学長からの締め括りの言葉があり、この訪問を受けて本学と昆明医科大学の双方は、より一層理解を深め、このたびの協定締結に至りました。

この締結は、本学と昆明医科大学の学生交流の単なるスタート地点ですが、すでに本学は例年7月にアジアの海外協定校の学生を受け入れて、「アジア大学による大阪歯科大



学研修」を実施しています。本協定締結により、2018年7月22日から28日までの上記研修に昆明医科大学から2名の学生が参加し、さらに現在、共同研究員として本学に在籍しており、両大学の歴史的な学生交流のスタートを切りました。

大阪歯科大学は、より一層学生の交流を盛り上げ、輝かしい成果を収められるよう、邁進していきます。

学生短期海外研修報告

●コロンビア大学歯学部

期 間：2018年3月10日～20日

参加者：歯学部5年生6人

引率者：秋山広徳（歯科放射線学講座 講師）

3/10（土）

大阪発⇒ニューヨーク着

3/11（日）

研修準備（予習等）

3/12（月）

オープニングセレモニー、学部生との打合せ

3/13～16（火～金）

講義（特別講義又は学部生の講義に参加）、臨床見学（shadowing）、一般開業医見学、修了証授与式、さよならパーティー等

3/17・18（土・日）

自由

3/19・20（月・火）

ニューヨーク発⇒（機内泊）大阪着



以下、学生の感想を要約して掲載します。

・コロンビア大学では二人1組の班に分かれ、午前と午後で矯正歯科、歯内治療科、補綴科、歯周治療科、学生診療のフロアの見学が主なスケジュールでした。まず驚いたのは、学生一人ひとりに広いチェアがあり、そのそれぞれに監視カメラがあることです。これにより診療の手順の振り返りができるため良いシステムだと思いました。次に診療チェアにデンタル撮影装置が備え付けられていることです。チェアを移動する時間が短縮できるのでとても便利だと感じました。診療内容は日本とあまり変わらないと思いましたが、使用している器具が日本で使用するそれと異なっていること、清潔域と不潔域の区別、感染防護などは見習うべきだと思いました。普段入ることのできない診療室を見学でき、マイクロスコープを使って根尖切除後の根管を見ることができ、とても良い経験をさせていただきました。おかげで将来の視野が広がり、他の大学での歯科医療をもっと見てみたいと思うようになりました。

・海外研修に参加するのは今回で2度目です。前は四川大学のサマーキャンプに参加させていただきました。今回の目標は、自分から英語でコミュニケーションを積極的にとることでした。私は英語がまだまだ未熟ですが、誰よりも積極的に話しかける姿勢を持つことはできたと思います。四川大学の時とは違い現地の学生と関わる機会は少なかったですが、矯正、歯内、歯周、補綴などの専門医の先生方と関わることができ、私も今後歯科医師になって一つは自信を持って治療ができる分野を持ちたいと思いました。アメリカと日本で一番違うと思ったのはチェアタイムでした。日本では保険診療なのでアメリカのようにチェアタイムをとることはできません。私はアメリカほど一人の患者さんに時間をかけるのがいいとは思いませんし、日本の補助者、歯科衛生士の存在は本当にありがたいものだと思感しました。しかしアメリカでは、歯科医師が一人で診療しているのを見て尊敬しました。将来はアメリカでの経験を通して発見したことを忘れずに、今後も世界から見た日本を知ることができるよう日々勉強しようと思いました。

・今回のコロンビア大学での短期海外研修はとても意味のあるものになったと思いました。学んだことは大きく二つです。まず歯科に関しては、アメリカの方々は仕事をとても楽しんでいるように見えました。診療中の患者や同僚との会話、質問がとても楽しそうに見えました。また自費診療が主なので日本では見たことのない器具や一つの治療にかけている時間がとても長く、驚きました。教授のスタイルも日本とは違い、若手の歯科医師に対する診療の助言を主に行っており、研究面だけではなく技術面でも高い知識を持っていることが分かりました。もう一つは仲間との絆です。英語力の乏しい自分を助け、積極的にアメリカの治療を学ぼうとする姿勢に自分も引っ張られ、外国の方々にも質問をすることができ、いろいろなことを学ぶことができました。

・コロンビア大学歯学部は想像していたような緊張した雰囲気はなく、むしろ見学に来ている私たちをどの診療科も温かく受け入れてくださいました。教科書などでしか見たことのない治療法などをたくさん見ることもでき、気になったところがあればその場ですぐに質問できたのでとても有意義な時間を過ごせました。4回生のときよりも知識が増え、たとえ英語が分からなかったとしても理解できる部分が多くはなりましたが、更に知識を深めたいと感じさせてくれる研修になりました。





・今回の海外研修では、多くのことを学びました。まず初めに、日本の保険診療とは異なりアメリカは自費診療であるため、使っている器具や材料が異なりました。しかし根本的な治療目的は日本で学んだことと同じだったので、日本でしっかり学んだことに自信を持って今回の研修に臨むことができました。二つ目は感染対策を徹底していたことです。治療の際、術者は使い捨てのデンタルチェアーに必ずビニールの袋を掛けていました。また手袋は必ず1回の使用にとどめ、パソコンを使う際は必ず外していました。当然日本の診療でも行われていますが、更に徹底されていました。三つ目は、コロンビア大学歯学部生の姿勢です。沢山の人種の方が出て、なかには国から奨学金を得て来ている人もいました。アメリカの歯学部は他の学部を卒業してから入学する制度なので、自分より年上の学生がほとんどでした。そのためモチベーションが高く、その姿勢から大変刺激を受けました。

・研修は5日間二人組のグループに分かれ、インプラント、エンド、ペリオ、補綴、矯正科をそれぞれ見学させていただきました。まず診療しているところを見て、感染予防にとっても気を使っていると感じました。印象用トレーは使い捨てで、バキューム、3wayの先、排唾管にはビニールが被せられていて、使うときにはそのビニールを突き破って使います。つまりドクターやアシスタントが持つところがビニールで覆われているため、次の患者さんに使うときも清潔です。さらにドクターが何かを取りに行くときは、必ず手袋を外して取りに行くということが徹底されていました。このようなところはしっかりと見習いたいと思いました。ドクター以外にコロンビア大学の学生が診療している所もたくさん見学でき、患者さんとのコミュニケーションのとり方が上手だと感じました。治療の前、途中、後のどの段階でも患者さんと向き合って治療の説明をしていました。訴訟大国のアメリカだからこれほど丁寧に説明しているのかもしれませんが、説明しすぎて悪いことはないと思います。またアメリカの国民性かもしれませんが、患者さんがプライベートの話をよくしていました。学生と患者さんの間で信頼関係がしっかり築けているのを感じました。学生なので教授から指示を受ける立場にあり、患者さんからしたら不安な気持ちもあると思いますが、そのような不安を感じさせないためにしっかりと説明し、自分の行っている治療に自信を持てるほどの勉強と準備をしているのだと思いました。コロンビア大学の学生と昼食を一緒に食べてお話しする会を設けていただいた時に、大学ではサークル活動や部活動をする暇がないほど勉強が大変と聞きました。やはり患者さんの治療をほぼメインで行うためにはそれほどの勉強量が必要なのだと思います。自分より少し年上の学生が患者さんの前で堂々と診療している姿は刺激的で、学ぶべきことがたくさんありました。

そのほか、短期海外研修として2018年には次のとおり学生を海外協定校に派遣しました。

●四川大學華西口腔医学院	期 間：2018年7月8日～20日 引率者：陳宇（本学客員教授、四川大學華西口腔医学院 教授）	参加者：歯学部5年生1人、3年生2人
●シドニー大学歯学部	期 間：2018年8月18日～27日 引率者：百田義弘（歯科麻酔学講座 主任教授）	参加者：歯学部4年生3人、3年生3人
●南方医科大学口腔医学院	期 間：2018年8月18日～24日 引率者：本田義知（中央歯学研究所 准教授）	参加者：歯学部4年生1人、3年生2人、2年生2人
●台北医学大学口腔医学院	期 間：2018年8月18日～24日 引率者：吉川一志（歯科保存学講座 准教授）	参加者：歯学部1年生6人
●山西医科大学口腔医学院	期 間：2018年8月18日～24日 引率者：西浦亜紀（歯科矯正学講座 准教授）	参加者：歯学部2年生2人、1年生1人

協定校からの 学生受入

本学は2018年に中国6大学とシドニー大学から計34人の学生を受け入れました。キャンパスや附属病院内の見学、特別講義の聴講、ウェルカムパーティー、歯科関連企業や本学同窓生が開業する歯科医院への視察、さらに臨床ゲノム医療学会大阪学術大会への参加など。海外の学生たちは滞在中、精力的に行動し、大阪歯科大学について、日本の歯科医療について理解を深めた様子でした。

以下に、受入事業のメインプログラム・The 2nd Forum for International Students の模様をお伝えします。

● The 2nd Forum for International Students

7月24日、大阪歯科大学では昨年に続いて2回目となる「Forum for International Students」(以下「FIS」)を楠葉キャンパス講堂で開催しました。FISは、国際的に学生間の学術交流の発展を図ることを目的に、本学歯学部生、大学院生、歯科衛生士専門学校生とアジアの大学生が自身の研究や大学生活、自学に関してプレゼンテーションするというもの。ALL ENGLISHで行われます。

今年のFISは、川添堯彬理事長・学長が大会長を、松本尚之国際交流部長が実行委員長を務め、国際交流部が運営。学部生2人が司会を担当し、中国留学生学友会10人・歯学部生9人・医療保健学部生3人がボランティアスタッフとして関わるなど、昨年以上に多くの学生がFISの運営を支えました。

海外の大学からは、7月22日から28日の日程で本学を訪問した、提携校の上海交通大学、南方医科大学、四川大学、北京大学、山西医科大学及び昆明医科大学の学生27人と引率教員5人が参加。うち5人の学生が講演しました。(この学生受入事業の一部は、国立研究開発法人科学技術振興機構の平成30年度「日本・アジア青少年サイエンス交流事業(さくらサイ

エンスプラン)」に採択されています。)

FISは13時から、大会長の挨拶で始まりしました。その中で、川添理事長・学長は、今回参加いただいた中国6大学の関係各位の協力に謝辞を述べた上で、「学生間交流のさらなる発展を期して開かれるこのFISを通して、日中両国の学生は活発に意見や情報を交換し、国際レベルで他大学のことを学んでほしい。FISを機に、皆さんの将来的なキャリア選択の幅が広がることを確信しています」と期待を示しました。

講演のトップバッターは本学歯学部5年の寺本朱里さん。3・4年時に取り組んだ自らの研究について、力強い英語で発表しました。続いて、上海交通大学の邱澈さんから最終演者の本学大学院3年の陳路沅さんまで、中国5大学の学生5人と、本学の歯学部生2人、大学院生4人(うち2人は留学生)、歯科衛生士専門学校生1人の計12人全員が流暢な英語で、堂々と講演を行いました。

本学歯学部1年生、医療保健学部生、大学院生、歯科衛生士専門学校生、教職員等と中国6大学一行の合わせて425人が聴講した今年のFIS。講演を聴いた歯学部1年生は「ハイレベルな内容だっ

た。国際交流の大切さを学んだので、これからは自分も国際交流をしていこうと思った。数年後には舞台上で発表できるようになりたい」「今日紹介のあった海外の大学へも行ってみたい」などと話していました。中国の発表者の学生は「大勢の聴衆を前にしての発表で緊張したけれど、いい経験になった」「大学院生の研究発表から学ぶことが多かった」と感想を語ってくれました。全体に本学学生からは、中国の学生の英語力を賞賛する声が多く聞かれました。

最後に、川添理事長・学長が講演者一人ひとりに表彰状を授与し、FISは幕を閉じました。

この後、学内食堂で交流会が開かれ、邦楽部学生による生演奏で、あらためて中国6大学一行を歓迎。両国の学生はすぐに打ち解け、日中の歯科大学の教育内容や歯科医療制度から日常生活のことまで、話はいつまでも尽きないようでした。



▼ 第2回 FIS の講演者は次のとおり (講演順)。

- ◆大阪歯科大学歯学部5年・寺本朱里
- ◆上海交通大学口腔医学院・邱澈
- ◆大阪歯科大学大学院歯学研究科歯周病学専攻2年・阮亜茹
- ◆南方医科大学口腔医学院・王超
- ◆大阪歯科大学大学院歯学研究科歯科矯正学専攻4年・原瑛紀
- ◆四川大学华西口腔医学院・管浩

- ◆大阪歯科大学歯学部4年・若田陽
- ◆北京大学口腔医学院・王玥
- ◆大阪歯科大学大学院歯学研究科歯科保存学専攻4年・井村和希
- ◆山西医科大学口腔医学院・李涓伯
- ◆大阪歯科大学歯科衛生士専門学校3年・阿部みさき
- ◆大阪歯科大学大学院歯学研究科欠損歯列補綴咬合学専攻3年・陳路沅





2018(平成30)年の主な行事 (オレンジ太字は記事を掲載しています)

大学

2月25日	教授退職記念講演会	
2月27日	2017年度共用試験歯学系CBT	
3月18日	2017年度共用試験歯学系OSCE	
3月18日、5月27日、7月15日		
7月22日、8月14日・26日	医療保健学部オープンキャンパス	P31
9月24日		
4月～6月	歯学部2018年度「学長と語ろう」	P31
4月25日	学生研究発表会	P32
5月～12月	ファカルティ・ディベロップメント(FD)セミナー(第1回～第7回)	P33
5月18日	解剖体慰霊祭	
6月30日	父兄会・共済会総会	
7月16日、8月13日、9月17日	歯学部オープンキャンパス	P35
7月18日	研究チャレンジ発表会	P35
7月31日～8月9日	第50回全日本歯科学生総合体育大会 ※本学は総合4位	
7月31日	歯科大わくわくキッズセミナー@まきの	P36
8月29日	人権啓発講演会	P37
9月1日	第1回医療保健学部生涯学習セミナー	P37
9月8日・15日	第26回大阪歯科大学公開講座(天満橋講座)	P38
10月4日	高大連携 一香里ヌヴェール学院高校生来学、細菌学実習を体験	P39
10月20日	第50回大学祭 一体育祭	
10月27日・28日	第50回大学祭 一楠葉祭 ※テーマ「TRY ～50steps～」	
10月27日	こども大学探検隊 / ひらかた市民大学	
11月1日	解剖体遺骨返還式	
11月16日	実験動物慰霊祭	
12月15日	ODU緊急セミナー「歯科技工士に新たな歯科医療の役割を！」	
12月21日・22日	共用試験2018歯学系診療参加型臨床実習後客観的臨床能力試験トライアル	
12月28日	全学教職員忘年慰労会	P40

病院

毎月1回	健康セミナー(第6回～第17回)	
1月18日	臨床研修管理運営委員会(全体会議)	P40
1月20日・21日、12月15日・16日	歯科医師臨床研修指導歯科医講習会	P40
2月16日	2017年度医療機器講習会	P41
2月24日	第15回病診連携講演会・懇談会	P41
4月2日	医療機器安全管理講習会	
3月1日・2日、4月2日	医薬品安全管理講習会	P41
3月23日	2018年歯科医師臨床研修情報交換会	P42
3月29日	2017年度医療安全講習会	P42
4月2日・4日・16日、 5月30日		
6月26日、7月12日、10月17日	2018年度医療安全講習会	P42
12月18日・20日		
4月4日・12日・16日、5月17日	院内感染対策講習会	P43
10月2日		

医療保健学部オープンキャンパス2018

医療保健学部では2018年、オープンキャンパスを7回実施しました。前年に比べ回数は1回減ったものの、参加者は100人近く増加（延べ646人、うち高校生357人）。開設以来、学生募集・入試広報に地道に取り組んできた関係者の努力が徐々に実を結びつつあります。

オープンキャンパスでは大阪歯科大学や医療保健学部の紹介はもとより、体験実習や体験講義、附属病院見学、入試対策講座、学食体験、個別相談など毎回さまざまなメニューを用意。口腔保健学科の体験実習は、正しいブラッシングからはじまり、回を追って実践向きの内容になる趣向で、最終的には歯科医院で使用するスリーウェイシリンジとバキュームを手にしてマネキンの口の中に空気をかけたり、水を出して吸う方法を学びました。口腔工学科では、実際に実習で使う石膏棒を手前に前歯を彫刻したり、歯科材料で自分の指型ボールペンをつくったり。参加した高校生たちは、在学生のアドバイスを受けながら、真剣な表情で一所懸命に取り組んでいました。

8月の附属病院でのオープンキャンパスには約120人が来場。義歯等を製作する中央技工室や各診療科の様子など、普段見ることのできない院内を見学しました。終了後は「設備がそろっていてすごかった」「ここで絶対実習したい」と、満足の声が多数聞かれました。



4月～6月

歯学部2018年度「学長と語ろう」

本学歯学部では4月～6月にかけて、2018年度『学長と語ろう』を実施しました。新入生128人と編入生2人が、川添堯彬理事長・学長や学年指導教授に、6年間の目標、意気込みなどを話しました。

『学長と語ろう』は1年生の授業科目『コミュニケーションI』の中の一つで、2012年の新カリキュラム導入時に始まり、毎年、新入生全員が参加しています。今年度は第1～10回の日程で班ごとに分かれて実施し、川添学長のほか、学年指導教授の藤原眞一教授（化学教室）と富永和也教授（口腔病理学講座）が同席しました。

新入生は、卒業までの6年間で一番力を入れることを一人ずつ発表。「6年間で卒業し、国家試験にストレートで合格する」「無遅刻無欠席で、皆勤賞を目指す」などのほか、「文武両道（学業と部活の両立）を目指す」「海外研修やボランティア活動に参加する」「コミュニケーション能力の向上」「語学

力を磨く」「研究に取り組む」「人間力を身につける」「特待生になる」「音楽CDを作りたい」などさまざまな抱負を述べました。緊張した様子ではありましたが、川添学長の目をしっかりと見て大きな声で話す学生が多く、皆さんの大学生活への期待や意気込みを感じることができました。

川添学長は「まずは最低修業年限での卒業及び国家試験合格が必須」だとした上で、「言うは易しいが実行するのはなかなか難しい。とにかく休まず出席し、皆勤、精勤してほしい。何事も続けることが大事」と話しました。また、コミュニケーション力の向上を挙げた学生たちに向け、「知らない人にも話しかけられるように」と自身の体験談を交えて述べ、「コミュニケーションというものは、まず自分から始めなければならない。自分から挨拶し、もし相手が返してくれなかったとしても腐らず、また何度でもこちらから挨拶することが大切だ」と話したほか、「患者さんとコミュニケーションをと





大学

るためには勉強だけではなく、趣味や部活、音楽や文学など芸術にも興味を持つこと。1回しかないやり直しのきかない人生なのだから、歯科医師になってからも続けられるような趣味を探してほしい。それは人生を2倍生きるほどの豊かさをもたらしてくれる」とアドバイスしました。さらに「苦しいときにどうするか、自分なりの克服法、ストレス解消法を見つけてほしい。苦しいとき人に頼るのではなく、自分自身で克服できるようになってほしい」と語りかけ、最後に「きょう誓ったことを守れているか、1年後もう一度『学長と語ろう』をしてみたい」とことばを結びました。

藤原先生は「明日や明後日、一週間先、一か月先、一年先の計画を立て、常に自分がしなければならないことを把握し、実行することが大切。クラブに入る人は、いろいろなことがあるだろうけれども、ぜひ続けてほしい。また、海外研修に行きたいという人は、ぜひ今から積極的に取り組んでほ

しい」と期待を寄せました。富永先生は「ストレートでの国試合格を目標にする人が多いが、国試に通ればいいという気持ちではなく、国試の合格点よりもさらに上を目指すつもりで勉強すること。ただじっと講義を受けているだけではつまらなくなってくる。なぜこの先生はこの科目を面白いと思ったのか、考えながら受けてみて。そして周囲への配慮ができる人になってください」と述べました。

出席した学生たちは、「あんなに近い距離で学長と話ができるなんて思わなかった。貴重な経験ができたと思います」「川添学長がこれまでたくさんの学生を見てきた経験からアドバイスをくださったので、参考になりました」「みんな6年間で卒業して国試に合格することを目標にして、さらに部活動や海外研修にも参加したいと話していたので、勉強以外にも頑張ることを見つけてすごいなと思いました。自分も負けなようにいろんなことを頑張りたい」と感想を話していました。

4/25
(水)

2018年度学生研究発表会

4月25日、楠葉キャンパスで今年度の歯学部学生研究発表会を行いました。本学では、学生に研究マインドを涵養することを目的に、一昨年度から歯学部第3学年のカリキュラムに『研究チャレンジ』という科目を開講。研究に興味関心を持つ学生を積極的にサポートしています。学生研究発表会は学生たちがこれまで取り組んできた研究の中間発表の場として開催しており、今回は2017年度（本学）学生研究助成金に採択された5グループが発表しました。研究テーマ及び発表者は下記のとおりです。

発表はOral形式でスライドを使って行い、①研究テーマの独創性（学生らしさ）②研究内容の独創性（画期性・斬新さ）③研究方法の的確性④研究結果の科学的整合性⑤研究発表の論理性（一貫性があるか）⑥プレゼンテーション能力⑦語学力⑧研究テーマのストーリー性⑨研究内容の将来性⑩基礎部門では学術的価値、臨床部門では研究内容の臨床的価値——の10項目を評価。発表時間は日本語での発表を10分、英語での要約説明を1分、質疑応答を10分とし、制限時間を超えると減点対象になります。評価は学生部長の田中昌博教授をはじめ、学生部委員の教員が行いました。

質疑応答の時間では、「曲げ強さが増加したのは、セルロー

スが入ったからと解釈してよいのか？」「コストメリットで劣るということだが、大体どれくらいで買えるのか、一般ユーザーが買える価格に落ち着くのか教えてください」と等と、発表のさらに細かな点や疑問点について、教員や学生から次々と質問が飛びました。発表者は、緊張した表情ながらも一つひとつの質問に丁寧に答えていました。さらに「極めて有効であることが認められたという表現はちょっと強すぎるのでは」「研磨すると細菌が付着しないので実験が成り立たないというのはおかしい」といった指摘もあり、考え込む学生や、予想していたのか、的確に答える学生もいました。

発表会は午後6時半開始にもかかわらず、教員はもちろん新入生も参加し、最後まで熱心に聴講していました。最後に、田中学生部長が「4年生・5年生になったばかりの皆さんがこんなに立派なプレゼンができることに驚き、感動しました」と述べ、発表者に大きな拍手が送られました。

また、この発表をもとに、8月24日に東京の歯科医師会館で行われるSCR（Student Clinician Research Program：全国の歯学生による研究発表の大会）日本代表選抜大会に出場する本学代表として、4年生の城山佳洋さんが選ばれました。



◆研究テーマ及び発表者

「セルロースナノファイバーはガラスアイオノマーセメントの強化に応用できるか」4年・城山佳洋

「シクロデキストリンによる歯の着色予防効果の検討」4年・廣瀬昶司

「唾液由来メッセンジャー RNA を用いた肺癌リスク調査 Lung cancer risk in smokers using salivary derived mRNA」5年・杉井良成

「T-Scan を用いた咬合発育各期における咬合安定性の評価」4年・阿江公規、明石裕生

「ブラーク付着抑制を目的としたコーティング剤の開発」4年・三代敦子、柳瀬敏子、山尾寿利

2018年度FDセミナー

※開催場所はいずれも創立100周年記念館大講義室

第1回

日時：5月1日（火）17:00～18:00

演題：「2018年度（H30年度）歯学系 CBT 問題公募要領と問題作成のポイント」

講師：前田博史 先生（口腔治療学講座 主任教授）
梅田誠 先生（歯周病学講座 主任教授）

出席者：（天満橋）166人

内容：2018年度版 CBT 問題作成の注意事項についての説明。各講座へ問題作成の依頼。



第2回

日時：6月14日（木）18:00～19:00

演題：「成人教育学に基づいた授業（教授方法）の実践」

講師：藤本真一 先生（奈良県立医科大学教育開発センター 教授）

出席者：（天満橋）113人 / （楠葉）40人

内容：はじめに、1900年代から現代までの教育理論変遷過程について、産業主義（効率主義）から実証主義を経て、それらの問題点、批判を解決するため、ポスト実証主義（構成主義）へと変遷してきたとの説明があった。近年は、科学技術の急速な発展に伴い、学ぶべき知識量は急速に増大しており、今後もさらなる増加が見込まれている。そのため、学生自ら学習をデザインし自覚的に方向性を選択するように導くことが必要で、それがすなわち成人教育学に基づく指導である。続いて、成人教育学に基づく授業の実践方法（TBL等）について具体的な説明があり、医療人として生涯、学習し続ける人材を輩出するためには、大学教育の早い段階で成人教育学に基づいたカリキュラムの実践が望ましいと締めくくられた。



第3回

日時：10月12日（金）17:00～18:30

演題：「シラバス作成について」

講師：齊尾恭子 先生（大阪電気通信大学教育開発推進センター 准教授）

出席者：（天満橋）117人 / （楠葉）40人

内容：「授業デザイン」とは、学習の内容だけでなく、学習の目標、学習の方法、評価の方法の四つの全体像を設計するもの。シラバス作成は授業デザインのための良い機会ととらえ、自身の授業を振り返ってほしい。シラバスの役割の一つとして「学習効果を高める」ということが強く期待されている。「授業を通して学生は何ができるようになるのか」（＝到達目標）を示し、学生の学習意欲を引き出すシラバスにすることが必要。授業デザインには自分自身の授業への思いや信念が非常に重要となる。

質疑応答では、全授業が必修の本学では学生のシラバス確認頻度が低いという意見に対し、「シラバスの重要な点は授業内で積極的に説明し、各授業で配付して説明してもよいのではないか」とのアドバイスがあった。



第4回

日時：10月15日（月）17:00～18:30

演題：「アウトカム基盤型教育とアクティブラーニングの実践」

講師：泉美貴 先生（昭和大学医学部医学教育学講座 教授）

出席者：（天満橋）124人 / （楠葉）46人

内 容:「医・歯学教育の国際動向と認証」「学修成果基盤型教育」「アクティブラーニングとは」の三つの軸に沿って解説があった。国際動向としては、医学において2023年問題等世界基準(グローバルスタンダード)での認証が今後必要のため国内でも評価機構が充足しており、歯学部でも今後は認証評価が正式に導入される。続いて、従来のプロセス基盤型教育から学習成果(アウトカム)基盤型教育へと変える必要が指摘され、最後に受講者全員でアクティブラーニングを体験した。



第5回

日 時:10月18日(木) 17:10~18:30

演 題:「厚生労働行政と地域包括ケアの推進」

講 師:護邦英俊 先生、吉森茂文 先生、
河本慶子 先生(厚生労働省近畿厚生局)

出席者:(天満橋)146人/(楠葉)53人

内 容:高齢化が進行している日本において、可能な限り最期まで住み慣れた地域で自分らしい暮らしをできるよう「地域包括ケアシステム」の構築が必要である。そのため、厚生労働省では地域に根ざした生活支援・介護予防のためのサービスやわが国の重要課題である認知症に対する取り組み(「認知症サポーター」養成や「認知症カフェ」設置など)を行っている。また、医療と介護の連携のため、関係機関の連携体制の構築に努めている。歯科についても、高齢化社会という背景を踏まえ、従来のう蝕処置や補綴治療など歯の形態回復を主体としたものから、各ライフステージや身体状況に応じたものに転換する必要性が生じている。今後は地域完結型の医療提供体制構築が求められる。



第6回

日 時:11月6日(火) 17:00~18:30

演 題:「大学の生き残り戦略~ブランド化・社会連携・グローバル化~」

講 師:肥塚浩 先生(立命館大学専門職大学院研究科 研究科長・教授)

出席者:(天満橋)141人/(楠葉)44人

内 容:第四次産業革命(IOT、AIの発展)をもとに、仮想空間と現実空間の高度な融合システムである「Society5.0」という基本方針がある。この社会においては、従来とは違う学びの在り方(アクティブラーニング等)や人材(グローバル人材)、高等教育(文理横断教育、学修者本意の教育、18歳以外への教育=多様性)が求められる。また、大学間の連携も非常に重要となる。立命館では上記内容に取り組んでおり、研究の高度化やグローバル化も含めてこれらはブランディング化にもつながっている。今後は地域完結型の医療提供体制構築が求められる。



第7回

日 時:12月5日(水) 17:00~18:30

演 題:「コミュニケーションの心理学」

講 師:吉川左紀子 先生(京都大学こころの未来研究センター 教授)

出席者:(天満橋)140人/(楠葉)45人

内 容:心理学の仕事は2種類に分かれる。一つは人のこころの働きを明らかにする基礎科学。もう一つは社会の問題解決を図る実践科学(カウンセリング等)である。心理学を学ぶ上で重要なことは「思い込み」に気付くことである。医療現場において、マスクがコミュニケーションに及ぼす影響を検証したところ、マスクは少なからず影響を及ぼすものの、心を込めた対応自体は評価されることがわかった。また、カウンセリング専門家の聴き方は沈黙の時間が長く、少し遅れて身体動作を行うことで身体同調も生じ、聴くことに徹底している。万人に対応できるケアの技法として、「ユマニチュード」というものがある。これは、知覚・感情・言語を用いた包括的なコミュニケーションによるケア方法である。人との出会いから関係が生まれ、その中で自分の価値を認識してもらうことがよいケアへの第一歩となる。

参加者からは特に「ユマニチュード」というケア技法について勉強になったという声が多くあった。



歯学部2018年度オープンキャンパス

歯学部の2018年度オープンキャンパスは、この3年間より1回少ない3回の実施でしたが、総来場者は延べ539人（うち、高校生等268人）で過去最高を記録。当日は入試概要の説明、在学生や卒業生の講演、体験実習、入試対策講座、キャンパスツアー、個別相談などを行いました。

第1回は人気の体験実習があり、事前申込された30人が参加しました。白衣にマスク、グローブ、アイプロテクションを着け、二人一組、交代で術者役とアシスタント役になって「下顎第一大臼歯1級窩洞のコンポジットレジン充填」に挑戦します。手順は、①ミラーとピンセットで虫歯を確認②足元のペダルを踏んで虫歯を削る③虫歯除去を確認し歯を乾燥④歯に接着剤（ボンディング）を塗る⑤歯に樹脂（レジン）を詰める⑥歯を磨く——ぎこちない手つきで真剣に擬似虫歯を治す姿を、保護者の多くがスマートフォンに収めていました。実習後は、「楽しかった」「肩に力がいって疲れた」「もうちょっとやりたい」と、参加した高校生たちは一気に緊張が解けた様子で話していました。

第2回は天満橋の附属病院で開催。駿台教育研究所の石原賢一氏による講演後、グループに分かれて院内を見学しました。歯科医療の現場を肌で感じることでできる病院見学は、オープンキャンパスでは年1回のみ。「見学枠を増やしてほしい」という要望が多数出されました。

本年度も学部生がボランティアスタッフとしてキャンパス内を案内したり、個別相談に対応したりと活躍し、参加者からは「学生の雰囲気がとても良かった」との声が多く寄せられました。



7/18
(水)

研究チャレンジ発表会

7月18日、2018年度研究チャレンジ発表会が楠葉キャンパスで催されました。

本学歯学部では毎年、3年生による研究チャレンジ発表会と、学生研究助成金を受けている学生による学生研究発表会を開催しています。研究チャレンジは、2年生時に成績上位の学生の希望者が参加することのできる3年の授業科目。国内外の文献から新しい歯科医療情報を得て、生涯を通じて「なぜ」「どうして」という研究マインドを涵養することを目的に、2015年度からカリキュラムに採り入れられています。

本年度の研究チャレンジには昨年度より8人多い、36人の3年生が参加。この4月から、1人～4人のグループに分かれて、興味のある研究テーマに関連する研究室を訪問し、

ファカルティアドバイザー（FA）の教員の指導のもと研究計画を立案、検討を重ねてきました。そして授業最終日となる18日、14グループ34人の学生が自らの研究テーマ・計画をプレゼンテーションしました（短期海外留学のため2人・1グループ欠席）。

会の冒頭、学生部長の田中昌博教授は、「皆さんの研究（実験）はスタート地点に立ったばかり。今日の発表で終わりではなく、今後も是非研究を継続して、学生研究発表会につなげてほしい。今年度から新たに、学会発表を行う学生の学会参加費、旅費を補助する『スチューデント・トラベル грант』制度が創設され、本学も可能な限り皆さんの研究を支援していく。皆さんは大学の宝。次は学生研究助成金（研究に



かかる消耗品費等を助成)に応募してほしい」と挨拶。

発表は、インドで使われている「歯木ニーム(木の歯ブラシ)の口腔内細菌への影響」という研究テーマから始まり、オーラルフレイル関連まで基礎、臨床研究に多彩な研究計画が披露されました。

緊張の面持ちで真剣に自分たちの研究を説明する学生に対して、先生方からさまざまな質問やアドバイス、励ましのことが寄せられました。「ニームという木の歯ブラシはどんな味がするのか」「(地域相関の研究に関して)他の要因も挙げて綿密に研究していけば、有益なデータが出てくるのでは」「今までの歯内治療の考え方とは違う治療法を目指している。チャレンジングな研究」「カンジダは現在高齢施設で非常に増えている。ぜひ研究を進めてほしい」「骨再生に血流は関係ないか」「被験者が自宅等で実際に口腔リハビリを行っているか確認する方法(毎晩電話するなど)を考えてみて」「骨芽細胞を数えるのは大変。頑張って」などなど。

各グループの発表時間は、質疑応答を含め約10分を予定していましたが、テーマごとに活発な議論が交わされ、終了

時間は大幅に延長。発表会は4時間にわたりました。

全発表終了後には、先生方が一言ずつコメント。「時間を忘れるほど今日の発表は面白く楽しかった」と田中中学生部長。「3か月あるかないかという短期間で、大学院生と同等といってもよい発表を皆さんがするので驚いた」「学生が能動的に楽しみながら研究していることが分かり、頼もしく思った」「基礎研究に目を向けてくれる学生がいることは希望の光」「若い学生ならではの突飛なアイデアが出てきて楽しかった」などの声が聞かれました。

発表者の学生は「みんなの研究が素晴らしかった」「先生方に意見をもらえて良かった」「発表が終わって安心した」「発表することで研究を深められるのではないかなと思っていただけたけど、想像以上だった」「これからにつながる」などと話していたほか、「大学院進学を見据えています」と将来を語ってくれる人もいました。

Science is fun! 学生、教員共に、あらためて研究の楽しさを味わった一日でした。

7/31
(火)

第1回歯科大わくわくキッズセミナー@まきの

第1回歯科大わくわくキッズセミナー@まきのが7月31日、牧野キャンパスで開かれ、夏休み中の枚方市内の小学生22人が参加しました。このキッズセミナーは、早い時期に口腔ケアに関心をもってもらおうと、医療保健学部が企画したものです。歯に関するクイズに答えたり、歯の汚れを染色液で

確認してから丁寧に歯磨きをしたり、ガラスアートや指ボールペンを作ったり、指導役の医療保健学部学生と小学生が、歯とお口について楽しく学びました。

なおセミナーの様子は、日本経済新聞(2018/8/25 夕刊)の連載「キャンパス新景」で紹介されました。



8/29
(水)

2018年度人権啓発講演会

8月29日午後4時半から、2018年度人権啓発講演会を天満橋キャンパス創立100周年記念館で開催しました。今回のテーマは「大学教育における障害のある学生の支援事例について」。人権教育室の李嘉永講師が前回に引き続き講師を務めました。

「障害学生支援の動向」を取り上げた前年度の講演会では終了後、もっと事例を紹介してほしいとの要望が多数出されました。今年度はこれに応えるかたちで、李先生から、教育現場における多くの事例が具体的に紹介され、さまざまな障害のある学生が円滑に学業に励める教育環境づくりを重点に話がありました。

講演後、参加者からは「障害のある学生の苦痛がよく理解でき、その支援対応を学ぶ貴重な機会となった」「今回学習した知識をさらに深め、本学での支援対応に生かしたい」などの感想が寄せられました。なお講演は楠葉キャンパスに同時中継され、合わせて148人が聴講しました。

また、12月5日には楠葉キャンパスで2018年度人権標語表彰式を行いました。今年度は学生、教職員から計35件の応募があり、人権啓発推進委員会による選考の結果、最優秀賞は河出直哉さんの「SNS #つぶやく前に読み返そう」に決定。川添堯彬学長（委員長）から賞状と記念品が手渡されました。入選作品は次のとおりです。

- ◆最優秀賞 「SNS #つぶやく前に読み返そう」（中央歯学研究所・河出直哉さん）
- ◆優秀賞 「なにげない その一言が 傷つける」（歯学部4年・津守佑典さん）
- ◆佳作 「思うなら 言葉にしよう その感謝」（歯学部4年・利森溪さん）
- ◆佳作 「お互いに 認め合えば 広がる世界」（化学教室・津田進 助教）



9/1
(土)

第1回医療保健学部生涯学習セミナー

9月1日、第1回医療保健学部生涯学習セミナー『これからの歯科保健医療と医療人像を考える』が本学創立100周年記念館で開催されました。このセミナーは、医療保健学部や歯学部の在学生・卒業生、専門学校卒業生等、主に歯科医療関係者を対象に、今の歯科医療に必要な知識を学ぶために、医療保健学部生涯学習委員会が企画したもの。記念すべき第1回は、地域包括ケアシステムの推進が叫ばれている現状に鑑み、これからの地域医療の一端を担う歯科医療のあり方について、現状に詳しい二人の講師が講演を行いました。



要田洋江 委員長



医療保健学部 糸田昌隆 教授

セミナーは田中昭男副学長の開会挨拶、要田洋江委員長による趣旨説明の後、医療保健学部の糸田昌隆教授が「戦後日本の医療政策と歯科医療～地域包括ケアシステムに至るまで～」と題して講演。高齢化と共に整備され、充実してきた日本の医療政策の流れを振り返った上で、人口構造の変化→疾病構造の変化→医療需要の変化が起こり、需要に合った医療提供体制の整備が必要となきに来ていると話しました。さらに、歯科では70歳を超えると受診率が急激に低下することを指摘。高齢者の医療現場の多くは、病院や施設であるにもかかわらず、そうした所の高齢者には歯科医療が十分に提供されていないと問題を提示し、社会の診療ニーズの変化に対応していくためにも「本学附属病院に地域口腔支援センターのようなものができれば」と希望を示しました。

続いての講演では、京都市南口腔ケアセンターの徳地正純センター長が「地域に求められる在宅歯科医療とは～南口腔ケア

センターの活動より～」をテーマにお話ししました。同センターは、地域連携の窓口となるべく、1998年に京都府歯科医師会南支部（現京都市南歯科医師会）の下部組織として設立。現在は南歯科医師会の協力歯科医師と訪問歯科衛生士、計30名ほどで構成されています。地域完結型の在宅歯科医療を目指し、南口腔ケアセンターは如何にして連携づくりをしてきたか。徳地先生からは、デイサービスへのボランティア訪問事業に始まる、20年にわたる連携の歴史が紹介されました。ネットワーク力をキーワードに、仲間をつくり、「頼まれたらノーと言わない」で多職種との垣根をなくす、医師会等他の組織と連携し、地区行政へアプローチするなどなど。社会ニーズに目をそむけず、真摯に歯科医療に取り組む関係者の姿が髣髴とするお話の数々でした。「地域包括ケアシステムの中に入っていかなければ歯科医療は取り残される」。結びの一言が重く響いた徳地先生の講演でした。



京都市南口腔ケアセンター長 徳地正純 先生

講演後、要田委員長は、本日の講演を通して「歯科医療は、地域医療において、福祉の面からも重要な役割を持っていることが理解できた。歯科衛生士、歯科技工士ともに大いに領域を拡大し、地域医療の役割を担う人材として社会に出て行ってほしい」と挨拶。最後に、柿本和俊口腔工学科長が閉会のことを述べ、セミナーは終了しました。

参加した医療保健学研究科の大学院生は、「徳地先生が話された、歯科衛生士の歯科医師からの自立というのは、保険制度的に難しい点もあると思うが、これからは自分で考え、歯科衛生士のスキルを発揮できるような仕事をしていかなければ」と話していました。

9/8
(土)

9/15
(土)

第26回大阪歯科大学公開講座(天満橋講座)

9月8日と15日の2日間、『歯科からの全身健康へのアプローチ - 認知症予防、よい睡眠 -』と題して、第26回大阪歯科大学公開講座(天満橋講座)を本学創立100周年記念館で行いました。



初日の8日は松本診療所ものわすれクリニック理事長・院長の松本一生先生を講師にお招きし、「歯科領域から認知症を考える～予防・対応・口腔ケアのポイント～」というテーマで講演いただきました。



マで講演いただきました。認知症と、年を取るとだれにも現れる「ものわすれ」について、日常生活の中でどのように関わっていけばよいか、またどのように対応すればよいか。これまで実際に診てこられた患者さんやご自身の経験をもとにお話いただきました。松本先生の気持ちのこもった話しぶりは2時間、聴衆を引きつけて離さず、講演後は盛大な拍手が送られました。

15日は本学歯学部高齢者歯科学講座の奥野健太郎助教が「そのいびき zzz 睡眠時無呼吸症かもしれません！～歯科ができる いびき・無呼吸の治療～」をテーマに講演しました。人生の3分の1を占める睡眠の仕組みについて、公開講座初の“落語”で解説するなど、奥野先生のユーモア溢れる語り口は「睡眠の大切さが楽しく面白く理解できた」と大好評を博しました。

第一日は172人、第二日は112人の方が受講されましたが、受講者の数以上に満足度の高さが印象的な公開講座でした。



10/4
(木)

高大連携 ―香里ヌヴェール学院高校生来学、細菌学実習を体験



10月4日、香里ヌヴェール学院高校スーパーサイエンスコースの1年生24人が本学楠葉キャンパスに来学、細菌学の実習を体験しました。これは2016年に同校と大阪歯科大学が締結した高大連携協定の一環として実施されるもので、本学での講義・実習体験は昨年に続いて2回目。

実習は、高校生が持参の白衣を着用して午後1時半から始まりました。担当は、歯学部細菌学講座の沖永敏則教授と南部隆之講師。最初に沖永教授が、ヒトのカラダには何千兆という細菌(2kg程度)が棲みついて、健康に重要な役割を果たしており、そのような細菌をすべて駆逐すると病気にかかること、口の中には約100億の菌が常在し、その中には虫歯・歯周病という病気を引き起こす菌があることなどを説明しました。

続いて『あなたの虫歯菌、歯周病菌を観察しよう』という実習テーマに沿って、二人一組になり、歯学部2年生が実際に行っている「虫歯菌、歯周病菌のグラム染色」実験に着手。3種類の菌—食中毒を起こす黄色ブドウ球菌、虫歯菌(ミュータンス菌)、歯周病菌(ジンジバリス菌)—を染色し、100倍の油浸レンズを取り付けた顕微鏡で観察します。焦点を合わせるのが難しい顕微鏡ですが、1回でピタリと合わせる生徒も。サイズ1ミクロン(1ミリの千分の1)の細菌が映し出されると、あちこちで「見えた!」「スゴイ」と驚きの声があがりました。真剣に顕微鏡を覗きながら、色・形・集合(の仕方)・大きさの違いに注意し、iPad等に丹念にスケッチしました。

実習では、自分の手指に付着している菌(微生物)も観察。事前に高校で片手をスタンプしたハンドシャーレが、本学で培養後(37℃・24時間後に室温で6日間)どのように変化したかを確認します。培養後のシャーレを目にした生徒は口々に「マジで臭い」「お父さんの靴下より臭い」。自分の手に沢山の菌がいることを知りショックを受けている生徒に、沖永教授から、手洗いだけでは菌は残りやすく、手洗い後に

ウエルパスを使用することで菌が少なくなるとの説明がありました。

実習のハイライトは「歯周病菌の臭いを調べよう」。生徒全員が教卓に集合し、最も強烈な、血液を摂取した歯周病菌の臭いを試します。一人ひとり勇気を出して臭いをかいだ途端「ウワッパイ」「鼻がつぶれた」と多くの生徒が悲鳴をあげました。臭いの原因は硫化水素。実習が最高潮に盛り上がった瞬間でした。

実験後、生徒たちは学習した“ウエルパスでの丁寧な手洗い”を早速実践。中には、沖永、南部両先生に熱心に質問する生徒もいました。

「近年、個人の食べ物の嗜好、性格なども口の中の細菌が左右しているのではないかといわれるようになってきた。腸内細菌の研究は盛んに行われているが、口の中の細菌はまだ未開拓の分野。大阪歯科大学の細菌学講座では、そんな未開拓な部分を開拓しようと日々研究しています。そして、そんな魅力あふれる細菌学の世界を歯科学生に教育しているのです」。沖永教授が締めめの言葉を述べると、一同そろって沖永、南部両先生に「ありがとうございました」と挨拶。高大連携の特別実習は無事終了しました。

実習後のアンケートでは、20人の生徒が本日の講義内容は「とても良かった」と回答。18人が歯学について「とても興味を持った」「興味を持った」と、また半数が、高校でのこれからの学習のモチベーションについて「とても高くなった」「高くなった」と答えていました。菌の色や臭いに関心を持った生徒も多くいたほか、「自分は菌に生かされていると感じた」「思っていたより身の周りには菌が多くあり、潔癖症の人の気持ちが分かった」「自分で新しい菌を見つきたい」「今日の講義を通じてより歯学部で学びたいと感じた」などと感想を寄せてくれました。生徒たちにとって長く記憶に残る学びとなったようでした。



大学

12/28
(金)

2018年全学教職員忘年慰労会

仕事納めの12月28日、恒例の教職員忘年慰労会を附属病院のプラザフォーティーンで開催しました。はじめに川添堯彬理事長・学長が挨拶し、「今年は、各部門の皆さんの精励・精勤のお蔭で、2学部3学科で歩み出した本学に対する外部からの評価が高まってきたように感じた」とこの一年を振り返りました。その上で、何事も成功するには第一にビジョンが必要であるが、「本学では博愛と公益という建学の精神がまさにそのビジョンにあたる。来年も教職員一丸となってこのビジョンのもと進んでいこう」と呼びかけました。

下村錢三郎常務理事による乾杯の発声後、歓談の時間となり、美味しい料理とくつろいだ会話で互いに一年の疲れを癒しました。後半にはお楽しみ抽選会があり、医療保健学部の柿本和俊教授が「理事長賞」（旅行券）を、解剖学講座の戸田伊紀准教授が「学長賞」（ギフトカード）をそれぞれ射止めました。



附属病院

1/18
(木)

臨床研修管理運営委員会(全体会議)

日時：1月18日(木) 18:30～19:35

場所：附属病院臨床講義室

本院の協力型施設141施設のうち、57施設が出席し、79施設より委任状の提出がありました。

各責任者より、協力型施設の指定基準の遵守、プログラムCの特徴、群内マッチングに係るスケジュール等の説明を行いました。また、臨床研修費等補助金分配金、2018年度プログラムに係る変更事項と研修手帳の改訂等について協議し、全て承認されました。



附属病院

1/20(土)・21(日)
12/15(土)・16(日)

歯科医師臨床研修指導歯科医講習会

1月20日と21日、第12回歯科医師臨床研修指導歯科医講習会を行い、本学から17人、一般から7人の合計24人が受講しました。受講者は4グループに分かれて作業を行い、タスクフォースによる助言のもと活発な意見が交わされました。全体会場では各グループ発表が行われ、質疑応答があり、プロダクト記録の修正をするなどの作業を限られた時間で行いました。

閉講式では受講者から、タスクフォースと事務局に大きな拍手が送られ、川添堯彬理事長・学長が受講者全員に修了証を授与しました。

12月15日と16日には前回同様、本学主催、一般財団法人歯科医療振興財団と共催で第13回歯科医師臨床研修指導歯科医講習会を開催しました。受講者27人のうち、13人は本学教員で、一般は全国から67人の受講希望があり抽選となりました。2日間の全ての課程を修了した27人に川添理事長・学長から修了証が交付されました。



2/16
(金)

2017年度医療機器講習会

日 時：2月16日（金）16：00
場 所：創立100周年記念館大講義室
出席者：73人

演 題：AEDを使用した一次救命について
講 師：花岡和貴氏
(株式会社 エム・イー・サイエンス本社営業部 ME 営業課主任)

「JRC 蘇生ガイドライン 2015」に準拠した一次救命処置について解説がありました。突然心停止した人を救命するためには「救命の連鎖」といわれる「①心停止の予防、②早期認識と通報、③一次救命処置（心肺蘇生とAED）、④二次救命処置と心拍再開後の集中治療」の四つを連続して行うことが必要で、このうちどれか一つでも途切れてしまうと救命効果は低下します。特に心停止の現場に居合わせた一般市民は、この連鎖のうち最も重要な最初の3ステップを担っています。その現場が本院であったならば、全教職員が一次救命処置を確実に実施できることが、本院の基本方針である「安全・安心な医療に努める」ことにもつながります。



2/24
(土)

第15回病診連携講演会・懇談会

日 時：2月24日（土）15：30
場 所：附属病院臨床講義室

2017年1年間の患者紹介医療機関：2,429 施設
施設の出席者：講演会 71 人、懇親会 46 人

森田章介病院長挨拶、当院の初診患者・総合受付等の案内、院内診療科等の紹介後、「難治性根尖性歯周炎の診断と治療」をテーマにして、歯内治療科の前田博史科長は「歯内治療科の立場から」、歯科放射線科の四井資隆主任は「歯科放射線科の立場から」を講演しました。当院より難症例の報告を行い、「歯科用 X 線 CT（3DX）撮影」「歯科遠隔画像診断サービス」の案内などをし、病診連携の強化を図りました。

懇談会はプラザフォーティーンで開催し、病院長や診療科長が各テーブルにてコミュニケーションをとり情報交換するなどして交流を深めました。



3/1(木)
2(金)

2017年度医薬品安全管理講習会

日 時：3月1日（木）、2日（金）16：15～17：00
場 所：創立100周年記念館大講義室
出席者：（3月1日）163人 / （2日）81名

演 題：「最近の医薬品情報よりー医薬品の適正な使用に関してー」
講 師：上中清隆氏（附属病院 薬剤師長、医薬品安全管理責任者）

医薬品安全管理講習会は医療法の規定により「年間1回以上受講が必要」のため、同じ内容で2回開催しました。抗インフルエンザウイルス薬投与後の異常行動発現に係る報告や具体的な安全対策、抗微生物薬の薬剤耐性の問題とその対応策等について報告や説明が行われ、医薬品の適正使用について学べた有意義な講習会でした。





附属病院

3/23
(金)

2018年歯科医師臨床研修情報交換会

日 時：3月23日（金）16：30
場 所：附属病院プラザフォーティーン
主 催：大阪歯科大学学生部

出席者：大阪歯科大学附属病院歯科医師臨床研修プログラムC（複合型）
の研修予定者 86 人 / 現研修歯科医 71 人

田中昌博学生部長、森田章介病院長が挨拶を行い、研修予定者が現研修歯科医より直に管理型及び協力型での研修状況等の情報を収集しました。活発な情報交換が行われ、研修場所を決定するための一助となりました。



3/29
(木)

2017年度医療安全講習会

日 時：3月29日（木）16：00～17：00
場 所：創立100周年記念館大講義室、
楠葉学舎プレゼンルーム

演 題：「医療に求められる患者に寄り添うためのコミュニケーションスキル」
講 師：藤崎和彦 先生（岐阜大学医学教育開発研究センター 教授）
出席者：（天満橋）61 人

患者さんとのコミュニケーション不足が原因でトラブルとなるケースが散見しています。患者目線の医療のため、接遇改善のため、この分野のパイオニアである藤崎教授をお迎えし、ご講演いただきました。

コミュニケーションスキルはある種の身体化された技能であり、頭で分かっているでもパフォーマンスできなければ意味がなく、体験学習・実技評価が非常に重要です。患者コミュニケーションの基本は、患者側の思いや事情をしっかりと傾聴し、そのこと自体を否定せずに受容、共感したうえで、医療者の思いを伝えることが重要です。医療者に求められているのは「共にあること」「共に悩みを考えること」であると結ばれました。深く考えさせられる内容で話術の巧みに引き込まれ、受講時間を忘れる講習会でした。



5/30
(水)

6/26
(火)

2018年度医療安全講習会

日 時：5月30日（水）16：00～17：00
場 所：創立100周年記念館大講義室
出席者：142 人

演 題：「医療現場のコミュニケーション 一人一人が医院の顔」
講 師：小島龍哉氏（株式会社ヨシダ学術渉外部 シニア・ディレクター）

患者さんと適切なコミュニケーションを図るために、患者さんの心理をはじめ、医療従事者の言葉遣いや身だしなみ、クレーム対応等について講演いただきました。

患者さんの第一印象で、その病院のイメージが60%以上決まってしまうと言われています。それゆえ「言葉遣い」や「身だしなみ」がとても大切であること、また、病院の良い評判に比べ、悪い評判は口コミで大きく広く伝わるとも述べられました。たった一人の身だしなみのなさや対応の違いが多くの人々の全ての努力を無にしていまいます。一人一人が医院の顔という気持ちで業務に励むことを強調されました。



日 時：6月26日(火) 16:15～17:00
場 所：創立100周年記念館大講義室
出席者：168人

演 題：「最近の医療安全のトピックス」
講 師：佐久間泰司 先生
(歯科麻酔学講座 准教授、医療安全管理室 室長)

「種で増える植物」を教える時に個々の植物名を教えるのが楽だが、全部は教えきれません。「被子植物」について丁寧に教えた上で、「被子植物には花が咲く。花が咲いたら種ができる」というルールを教えれば、チューリップやジャガイモが種で増えることも簡単に理解させられます。同様に患者さんに歯磨きのテクニックを見よう見まねで教えるのではなく、時間がかかっても「手首を固定して回外(運動)」というルールを教えるのがよいのです。

トイレの洗口コーナーが充実している玉川大は、「モデルになる人の行動を観察させる」という教育手法を用いて効果をあげています。

患者さんの持つ誤ルールを正す方略として、じわじわ型方略とドヒャー型方略があります。ドヒャーだけで終わらず、根拠を教えて誤ルールを正す。

医療現場で「あごマスク」はだらしく見えます。頭髪はヘアカラートーン7までが一般的、他大学では歯学生はトーン5のところもあります。看護学校、歯科衛生士学校には大きな鏡があり、患者からどう見られているか常に考える教育がなされています。

「安全」と「安心」のどちらを重要視するか(先に掲げるか)は医療機関により異なります。東大病院の理念・目標は「安全な医療の提供」、京大病院の基本理念は「患者中心の開かれた病院として、安全で質の高い医療を提供する」です。本院病院理念の基本方針も、もちろん最初に「安全」を掲げています。



4/12
(木)

5/17
(木)

10/2
(火)

2018年度院内感染対策講習会

日 時：4月12日(木) 16:00～16:50
場 所：創立100周年記念館大講義室
出席者：教職員209人 / 歯学部5年生133人 /
歯科衛生士専門学校3年生41人

演 題：「歯科領域で行われるべき環境整備とは？
～清掃事業者の視点から～」
講 師：小野勤子氏
(イオンディライト株式会社 病院・介護営業推進部)

大型商業施設をはじめとしたさまざまな施設で「設備管理」「清掃」「警備」といったサービスを提供しているイオンディライト株式会社の小野勤子氏に、清掃事業者の視点で安全・安心な病院清掃についてお話いただきました。

2000年頃からICD(Infection Control Doctor)及びICN(Infection Control Nurse)制度が発足してから、医療スタッフの感染制御に関する知識や意識付けは右肩上がりでアップしています。一方、清掃スタッフの知識や意識付けは置き去りになっているのが現状です。その理由として、清掃スタッフは3割を占める高齢者・高い離職率・外国人労働者の増加により、感染対策の意識定着が難しいからです。しかし、感染対策において清掃の役割が重要であるという教育研修を受け、理解できたときから行動に移ることが調査の結果分かっています。定期的な感染対策の勉強会が大切であり、当院でも毎年清掃スタッフに対して講習会を開催し、正しい手袋の着脱などを実際にしていただき、指導をしています。

今回の講習会は清掃事業者の視点ではありましたが、医療スタッフである私たちにも感染対策の徹底に非常に参考になる講習会でした。



附属病院

日時：5月17日（木）16：00～17：00

場所：創立100周年記念館大講義室

演題：「楽しく学ぶ細菌学 ～細菌楽～」

講師：金子幸弘 先生（大阪市立大学大学院医学研究所 教授）

出席者：教職員 205 人 / 歯学部 5 年生 126 人 / 歯科衛生士専門学校 3 年生 40 人

1980 年代以降、抗菌薬の不適切な使用等が原因で薬剤耐性菌が世界的に増加しています。しかし、抗菌薬の開発は減少しており国際社会で課題となっています。そのため、薬剤耐性（AMR）対策アクションプランに基づいて関係省庁及び関係機関等が連携し、適切に抗菌薬を使用することが求められています。

そこで、今回の講習会では楽しく非常に分かりやすくバイキングカードのキャラクターを用いて「薬剤耐性菌がなぜ蔓延しているのか」「なぜ抗菌薬が効かないのか」をご説明いただきました。また、薬剤耐性菌に感染しないために院内感染対策の三本柱である、①徹底した感染制御、②適正な抗菌薬使用、③院内環境整備を実施することが重要であると強調されました。

さらなる院内感染対策の向上を目指す当院にとって、薬剤耐性菌に対しての意識を高める講習会となりました。



日時：10月2日（火）16：20～17：00

場所：創立100周年記念館大講義室

演題：「冬の感染症 - インフルエンザ - 対策」「今年度インフルエンザ予防接種の日程について」

講師：宮永史子 先生（内科学講座 講師、ICT）

出席者：126 人

今回の講習会では昨年度に引き続き、宮永史子先生がインフルエンザの歴史、メカニズム及びインフルエンザ予防接種の重要性について解説しました。

インフルエンザの主な感染経路は咳やくしゃみの際に口から発生される小さな飛沫による飛沫感染です。インフルエンザ流行後は、飛沫を浴びないようにすればインフルエンザに感染する機会は大きく減少します。したがって、インフルエンザ対策の基本としてマスク着用、アルコールでの手指消毒が大切です。流行前にインフルエンザ予防接種をすることが重要であり、発症したとしても重症化を予防する効果があると話しました。

また、今年度の本学でのインフルエンザ予防接種の日程が案内され、積極的に接種するよう要請がありました。



2018年新年互礼会

1月5日、楠葉キャンパス講堂で新年互礼会を行い、教職員はじめ多数の関係者が川添堯彬理事長・学長の年頭所感に耳を傾けました。川添理事長・学長は、逆境の中にあっても未来は私たちの手で変えられることを信じ、前向きに、少しでも明るい未来をつくっていきたいと抱負を述べるとともに、本学をさらに発展させるための重点計画とその具体策を示しました。

年頭所感

理事長・学長 川添堯彬



昨年暮れからいろいろなメディアとか情報に関しましては、一応今年は明治維新から数えて150年という節目でありますけれども、近未来においても、あるいはもう少し未来においても、未来はそんなに明るくない、暗い、苦しいという逆境のような予測が非常に多いのであります。そんな中で正月を迎えまして、今現在、二つの言葉に大きく心を動かされております。

その一つは、「明けまして」という言葉であります。これを教えてもらったのは、幸田露伴のひ孫にあたる青木奈緒という作家がいますけれども、その人がおっしゃっていることでございます。「明けまして」という言葉を必ずこのときに使わないといけないう。「新年おめでとうございます」では、これはあまり良い挨拶にはならない。「明けましておめでとう」の頭に「新年」は省略しても、それは構わないという趣旨のことをおっしゃっています。それは、日本国の昔からということでもありますけれども、「明けまして」という言葉には、今までの苦労、あるいは逆境、そういったことがこの一つの節目、必ずしもこれは年頭でな

くてもいいようでありまして、年度末から年度初めにかけてでもいいですけれども、その一つの節目にあたり「明けまして」という言葉を使うことが、どんなに大切といいますか、これを日本国の正月の場合、お互いに、日本国中どこへ行っても松の内は、皆さん、「新年明けましておめでとうございます」とか、「明けましておめでとうございます」とか言い合っていますね。これは非常に良い習慣といいますか、良い願いを皆さん胸に持っている言葉だそうであります。すなわち「明けまして」という言葉を受けた人も聞いた人も使った人も、苦しかった昨年までと違って、今度は必ず希望が見えているんだ、どんなにどん底にあったとしても、希望がこの言葉の中に見えているんだという意味があるようでございます。そういう意味で、「新年」は忘れても「明けましておめでとうございます」という言葉にしたらいということを青木奈緒氏から教わったわけでありまして。

もう一つは、言うまでもなく、安倍晋三総理の年頭の挨拶の中に二つか三つ、繰り返して使われている言葉がございました。それは「未来は変えられます」。もう一つは「未来は私たちの手で変えられます」という言葉であります。それは、安倍総理自身が今現在も含めて、あまり良い現世ではないという、あるいは少なくとも大きな課題、難問を抱えているということがありありとわかりますけれども、それは近未来に必ず私たちの手で変えられるということを繰り返して言われています。この二つの言葉において、私は歯科界を見回して、あるいは一番身近な大学を経営するという立場から見ても、この言葉も非常に当てはまるわけでありまして。すなわち、やはり我々の大学、あるいは歯科界にとりましては、この大きな難問といえますか苦

境といえますか、それがどの本を見ても載っております。

その一つは、2018年問題であります。2018年問題というのは、もう今年から2018年でありますけれども、これから始まるのは18歳人口の激減の時代であります。ちなみに、5年以内に立てた予測では、18歳人口の激減によって、今年の一年か来年の一年、それは定かではないのですけれども、一年間に100の大学、学部がつぶれるというか、定員割れを起こして、募集停止をしないといけない羽目になる。総合大学ですとすぐにはつぶれません。非常に競争倍率の高いところもありますし、1倍以下のところもあつての話でしょうけれども、100もの学部が閉鎖されるか定員割れになって、少なくとも経済的には破綻を来すということのようでありまして。このことに対して我々は、安倍総理の言うように、教育の無償化問題も少しは恩恵に預かれるようでありましてけれども、いろいろ考えていかないといけないと思います。

もう一つの歯科界、あるいは大学にとりましての苦境・逆境は、2025年問題であるようでありまして。2025年、あと7年先には、65歳以上の高齢者が人口の3割になるということ。あるいは我々後期高齢者、75歳以上の人が段階をもってどかっとそこへ参入してくる。すなわち、逆に言えば、戦後、たくさん集団就職で行って、頑張ってくよく働いてきた人が200万人か300万人、それが一気に75歳以上の後期高齢者に入る時代である。当然これはいろんなところに問題が起こるでしょう。年金は第一、非常にあやしくなりますし、いろいろな税務からの収入も得られなくなって、国は大変な苦境になると言われております。こういった苦境に対しまして、恐らく安倍総理は、それらも含めて「未来は私たち



の手で変えられます」と。その how to はこれからいろいろの実行の年でありますから、今年から実行してまいりますというのが、安倍総理の年頭の挨拶です。

さて、私たち大学を預かる者にとりまして、これを果たしてどのようにしたらいいのかということの後ほどのパワーポイントでお見せしたいと思うのであります。そのように、私が一番ここで申し上げたいのは、二つの言葉にありましたような、「明けまして」というところから「希望」という未来を、少しでも明るい未来をつくるための方策、これが今後の問題であって、それはどちらも可能である。私もその言葉に勇気づけられた思いでいっぱいでございますので、この、まず大学を救うために、第一、第二の逆境に対して、希望の光を、希望の how to を見出したいと思うのであります。それには、日常の生活からして少しでも前向き、もう前向きしか行きようがない。立ち止まってもいけないし、後ろを向いてもどうにもならない時代に入っていっているわけであります。従って、それならば生きている限り、これは前向きしかないというのが、私が最近感じるところでございます。何とかそれに向かって一つ、二つの提案をしながら、我々の歯科界、あるいは私立大学を救いたい思いでございます。私の年頭の挨拶で一番申し上げたかったことは、このことであります。

昨年来、いろいろ本学の教職員の全員には本当に助けていただいて、この大阪歯科大学の歴史はまだ150年にはちょっと足りませんけれども、あと2年で110周年になります。そういうところまで来ているわけであります。これを少しでも停滞、あるいは衰退することなくさらに発展させて、少しでも伝統を続けたいと。先輩からお預かりした良き伝統をさらに続けることが使命だと思っていますわけでございます。どうぞ今年もよろしくお願いいたします。

それでは例年によりまして、パワーポイントでもって過去のこと、これからのことを展望して、私どもの考えている事業計画の一端をご提案申し上げたいと思います。何卒ご清聴よろしくお願いいたします。



今年は、明治からいうと150年目ということでもありますけれども、まもなく来年の5月には平成から次の元号に変わるといわれること言われているわけでございます。

昨年は
平成29年丁酉歳でした
達成状況:
☒ 国試成績は4年連続全国平均を超えました。
☒ 現役合格91.4%は、私大17校中3位、国公私立29校中5位でした。
☒ 4年制大学「医療保健学部」が順調にスタートしました。
☒ 大学院(修士)が新たに設置認可されました。平成30年4月1日開院。
☒ 学生の国際交流活動への参加希望者がさらに増えてきました。
☒ 留年率は前年度よりもさらに減少しました(各学年5%未満)。
☒ 4年生のCBT試験学力向上のための「強化合宿(八幡市)」を始めました。
☐ 5年生(病院)時の学力は少し改善しましたが、未だ授業欠席が多い。
☐ 附属病院の各科患者数の増加は少し増えつつも20%増は未達成。
☐ 「在宅診療・訪問診療」推進が消極的と低評価を受けました(厚労省)。

まず昨年、平成29年は丁酉(ひのと)の年でございました。冒頭から細かい字で読みにくいと思いますが、これは反省といいますか、過去の出来栄を見ているわけでございます。丸がついているのは、少なくとも事業計画を立てて、何とか達成できたところであります。三角は、少し進んだけれども、まだ完遂されていないということであります。まず国家試験の成績ですけれども、これは後でグラフをお見せしますが、4年連続で全国平均を超えることができました。過去3年にわたって2年連続こうであれば、文科省からの通信簿でもってバツテンが消えるわけですから、一つは合格したということになります。そして、おまけがつけました。教授の先生方に非常に頑張っていただいたおかげで、昨年は少し出来過ぎて、予定よりも早く91.4%というのを現役で記録しました。これは、私立大学17校中3位の成績でありまして、国公私立大学29校からすると5位の成績であります。これが単なるまぐれに終わらないように、今年間もなく111回の国家試験が始まろうとしているわけであります。さて、今度の結果はどうなるか、3月の中ごろには判明いたすわけであります。

それから、三つ目の丸も一応達成した。

医療保健学部が4月に新しく開学いたしました、これは4年制大学という形で、口腔保健学科と口腔工学科の二つの学科を持つわけであります。特に、口腔工学科においては、単なる技工士の養成機関だけではなく、さらに職域を拡大した未来型の口腔工学士、すなわち歯科技工士の資格を持つ学士が4年後に生まれるということで、順調にスタートしております。

それから、これも矢継ぎ早に大学院の設置申請をしておりましたところ、新たに10月に設置認可されました。それで今年、平成30年4月1日から開学、開院するわけであります。これはもうすでに入試の受付が始まっているということで、大変順調な反応を見せております。

それから、学生の国際交流活動への参加希望者が近年非常に熱心です。一年生の時から、あるいは入る前から、本学を受けた動機のナンバーワンが、全国の歯学部の中で1、2を争うくらい国際交流に熱心だと。これも丸になっていますね。

これは少し三角になっている。留年率というのが今まで、ひどい場合には1年から2年、2年から3年それぞれが10%を超えていたんですね。ひどい場合は20何%とかいうときもありましたけれども、これこそ後になってそのツケがずっと回ってきますので、我々が苦心した教育力が失敗したということ。すなわち、6年制の大学を6年間で卒業できないというのは何かが悪いんですね。選び方、入試が悪いのか教え方が悪いのか、そういったことで、留年率をとにかく下げていかないといけない。全員を国家試験に合格させるためには、一気にそこへ行かないでしょうから、まず10%未満にしてくださいということで、各科の教授の先生方をお願いして、それぞれ達していない人はオフィスアワーとか、補修のような形をやってもらって、5%未満にまで下がってまいりました。同様に、最低修業年限で国家試験を合格する割合がだんだん増えております。まだ完璧ではありません。この留年をゼロにしたいわけですね。

それから、4年生のCBT試験で学力向上のための強化合宿を始めました。これも留年防止の一つにはなると思います

けれど、途中でやるコンピュータを使つてのテスト、これは1次の国家試験だと言われているわけです。これと、実習試験のOSCEという、CBTとOSCEというのが4年間の教育の実力を占うものであります。この合格率がだんだんと高くなって、国公立29校で一緒にやっておりますので、だんだんと60%では駄目という感じで、最近では70%くらい取らないと一回で合格しないという形になっています。近いうちにこれも義務化される予定であります。そのCBTであまり成績が上がらない人は、4年までいって、5年、6年といっても国家試験に合格しない確率が非常に高いということが統計的に分かってきましたので、この成績下位の人、約30名を選びまして、ここから一駅向こうの八幡市に研修所がありまして、そこは定員があるので、今年は30名以内しか行けなかったんですけども、強化合宿を5日間ほどやってもらいました。この結果は、おそらくこの学年の次への進級と、あるいは国家試験合格にすぐに響いてくるものと思っております。先生方も泊まり込みで、寺子屋のような、あるいは少人数教育、グループ学習をそばでやっていくという、家庭教師と一緒に泊まってもらったみたいな教育を行って、底上げをしたわけがあります。これは教授の先生方から提案して、やってもらいました。この結果には楽しみです。

それから、5年次で学力がまた一旦落ちるというのが本学の弱点でしたけれども、それが少しは改善してきましたけれども、これが弱かったら、6年生になってすぐに4月から国家試験の勉強を始めても、もう遅すぎて、やっぱり6年生で留年してしまうか国家試験に通らないか、どちらかになってしまうことが多いと、こういう欠点も見つかりました。だいぶ良くなってきましたけれども、未だ欠席が多い。この欠席ということに非常に悩んでおります。これは、全くまだ達成できなかった。

それから、附属病院の各科の患者数を増加することを1年2年と毎月でも、幹部とその増加策を考え、だいぶ増えてきましたけれども、最初からの目標であ

る20%増というのが、どの科もまだ達成し得ていないので、全ての科が20%増になるようにこの一年間は頑張らないといけない。

それから、厚生労働省から叱られていることが判明しました。在宅診療とか訪問診療とか地域包括ケアとか、この三つは新しい政策の目玉として、これが国立大学、あるいは私立大学、公立大学でどの程度やってくれるか、どうもじっと観察しているみたいなんです。それで、それが達成できなかったら、悪いマイナスの点を付けてこられる。本学は、この在宅診療、訪問診療の推進が非常に消極的な病院であるというふうなレッテルをどうやら貼られてきているようであります。そういうことが判明しましたので、今年度はぜひこの訪問診療を積極的に、軽自動車を1、2台購入しなければいけませんけれども、それをつくって、これに熱心だと、日本歯科大学のように熱心だという姿勢を見せないと、本学が政策に協力度が非常に悪いということになってお叱りを受けることになります。

以上が、昨年積み残したことも含めまして、昨年の成績を簡単に振り返ってみました。

それで、いよいよ今度は2018年、平成30年の年に突入しました。昨年の酉年から今度は戌年へバトンタッチをしたわけがあります。さて、運勢から、高島易断の教科書から占ってもらったところでは、今年は戊戌（つちのえいぬ）歳という。この字はなかなか難しい。よく似ている面もありますけれども、戊戌ということで、この字義というのは戊（ほこ）に相当する。戊というのは薙刀（なぎなた）の先に刃物が付いているようなもので、いろいろなものを刈り取ってしまうということですね。ですから、出る杭は、それも全部刈り取られてしまうということで、どちらかという非常に活発ではない。何か良くないことも起こることもあるということでございます。そうした勢いをどうも警戒しなければいけないし、いろいろなことで冒険するのを控えて保守・保全に徹することというようには書いてありますけれども、それでは戌というのはどうなのかというと、字

形は斧の形をしている。ちょっと戌と似ていますけれども、これもうかうかしていると枯渇するようなマイナスの字形でございます。この字そのものは、犬にイメージされるごとく、誠実、熱心だとか、女性は母性本能の強い人が多いと言われているので有名です。それで、忠誠だとか安産の象徴になっているようでございます。これに対する対応は、違う道へ行く人にも傷つけない態度で臨むほうがよろしいのではないかという形でございます。これをどこかの片隅に置いて、いろいろ、より少しでも前向きに進めていかなければいけないと心しております。

さて、この平成30年、2018年、戌の年というのは、どんな形での計画を作らないといけないのでしょうか。

大阪歯科大学をさらに発展させるには何を改革すればよいか。

昨年と同じようなタイトルでしたが、「大阪歯科大学をさらに発展させるには」何を達成すれば良いかということでした。今年はさらにそれらを改革することが残っていやしないかということを探して、改革することはできるだけスピーディーに改革していかないと、先ほど冒頭でも述べましたように、もうじっと待ってくれない。1年に100学部がつぶれるような時代に、どのようにして改革していくのかということになるのかと思います。それを模索したい。

平成29年度 入学状況及び国家試験結果—過去4年間

	B. 新入生	C. 充足率	D. 競争倍率	E. 国試合格率 (新卒)	F. 最低修業年限合格率
大学	2,500	92.6	107.8	108.8	92.6
学部	1,000	100.0	100.0	100.0	100.0
学科	1,000	100.0	100.0	100.0	100.0
専攻	1,000	100.0	100.0	100.0	100.0
大学院	200	100.0	100.0	100.0	100.0
院	200	100.0	100.0	100.0	100.0
専攻	200	100.0	100.0	100.0	100.0

もう一度、国家試験と教育に関する過去4年間の成績を見えます。これを通称、文科省から我々に与えられた通信簿、通知簿と称しているわけがあります。



このAというのは、まだ定員が160名あった時の定員の数をいっていますから、実質こちらでやれるのはこのB、C、D、E、F。これで我々の大学の大学力、歯学部がわかります。先ほど叱られたのは厚労省からですが、今度は文科省の成績ですね。

Bは、今のところ20%削減している。実際、政策では28%。10年間かかってどうすれば良いか。29の大学の定員を、歯科医師が多過ぎることから削減してきたのを、28%以上削減してくれたところは合格だということで星印がつきますけれども、本学はまだ20%。あと8%削減すると星印がつきます。8%といいますと、今、1年間に128名、学生を取っていますけれど、今度は115名まで落とさないといけないと、文科省から圧力がかかっております。本学は、ほかの古い大学も同じように赤い信号を渡っているところが五つ、六つありますので、まだ頑張って20%をキープしている。8%も学生数が少ないと、途端に相当教職員の数を減らさないといけませんので、財政的に何とかもう少し頑張れるだけ頑張って、ほかでこの星印をたくさんつけて、これを何とか免れないかどうかということですね。今、持ちこたえるところまで持ちこたえているわけがあります。

そして、充足率。これは定員割れのところは、このように96%とかいろいろありますけれど、本学は過去4年間、もっと前からですが、常に100%です。関西に一つしかない私立大学で、その点、地の利が非常に恵まれていると言われますけれども、これは心配いらない。

Dは入試競争倍率であります。これは1.何倍とかいうのは、全員が入れるのと同じだということでございますね。それで、2.49倍というのが平成26年度の全国平均になっておりますけれども、本学はそれ以前、1.5倍とか1.6倍、1.8倍で、一番高いところでも26年度の1.91倍だったんですね。これは実質の倍率で、最初に志願してきた数字ではありません。最終的に、欠席者を除いた受験者数と入学者数でございます。編入学は入っておりません。1.91のときは失格だっ

たんですね。これは全入大学で、競争原理が働いていないということでお叱りを受けたんですけれども、それ以降は2.95、2.91、2.70ということで、これを何とか3倍にまで上げたら安心できるわけですが、まだまだちょっと3倍には届いていない。しかし、2倍は超えているので、競争倍率は有効に働いているということで、これは文句はないということがあります。少し危ういですが、

それから、問題は、この国試合格率であります。これは、本当に教授の先生方、教務の先生方の頑張りで、見事に全部合格になりました。昨年の110回は特別良かったですが、全国平均を1%でも超えていれば、この星印がつきます。文科省の判定は、連続でなくてもいいから、過去3年間の間に2年以上、全国平均を超えているかどうか。これでもって判定するということで、一番厳しいわけで、たくさん新聞やインターネットで流されるわけです。本学は見事に大威張りで、合格率が最近良くなってきました。

それから、最低修業年限の合格率というのは、このごろこれをやかましく言われるようになって、本学は、これ以外にはずっと合格しているんですけれども、ここだけはまだです。本学は留年が多いので、どうも留年とか欠席が多いのが弱点になってこのようになる。これがやっと4年ぶりに全国平均を1%ほど超えたということで、辛うじて29年度に星がついている。昔から何年も合格していない既卒者というか、国家試験を通過していない浪人組の人がいっぱいいるものですから、それでこのパーセントを下げたわけでありまして、それがだんだん最近では改善しておりますので、徐々に良い方に向かっていますけれども、何しろこれを改善するには6年前から計画しておいて、1年から2年で留年しない、2年から3年で留年しないという、留年を1年でもするとこれから陥落してくるという厳しい状況でございますので、合格するかどうかでは許してくれなくなって、それを6年間で合格できるかどうかという、それを何%かという。これは、司法試験にちょっとなぞらえて、70%くらいまでにいかないと、どうも歯

科医師国家試験というか歯学部というか、その大学力があまり上等ではないと見られるわけでありまして、全国平均でもこのように50%台が多いですね。うちだけが悪いのではなくて、ほかでも相当悪い。これをしかし喫緊といえますか、できるだけ早くしないと、この全体の成績がよくなりません。結論的に言えば、そういうことが最大の課題であります。

＜4つの重点計画＞

平成30(2018)年度

- 1> 教育力目標
- 2> 附属病院の目標
- 3> 医療保健学部・大学院の運営
- 4> 学生の国際交流力の向上

それらを勘案しまして、教育力の目標は、今言ったように最低修業年限での合格率を高めないといけないというところに、一つに絞るとすればそういうことになります。

それから、附属病院でもちょっと叱られているところがありますので、それを改革していかないといけない。医療保健学部はスタートしたばかりですが、まだ完全に倍率2倍以上にはなっていない。まだ2年目ですので、今後、これをまず入試倍率のところから、そして国家試験は100%を狙うとか、そういった課題があります。

それから、学生の国際交流力の向上。これは割合上手くいっているほうでございます。国際交流に熱心な人のグループをずっとトレースして見てみますと、国家試験の合格率は95%ぐらい通っていますので、やはり割合よく勉強する人がこちらの方にも関心を高めているのではなかろうかということでございます。

この四つに分けて今年からまた新たにどこを改革するか。まずは教育。

＜教育力目標＞

平成30(2018)年度

- 1> 入試倍率3.0以上
- 2> 進級率-最少修業年限での合格
- 3> CBT,学士1,学士2の本試験合格
- 4> 国試合格率-新卒80%以上
- 5> 既卒者への無償教育支援・注力

先ほども少し言いましたが、もう少し具体的に言いますと、入試倍率は、文科省の評価の基準は2倍以上あれば文句は言えないんですけど、2倍ではちょっとまた全入大学になってしまうおそれがあるので、やっぱり3倍以上を狙いたいということですね。18歳人口が減る中で、国内での競争、隣の大学との競争、国立大学との競争をしないといけないということであります。それから、進級率も最低修業年限での合格を目指して留年はできるだけさせないような教育をしないと、歯科大学歯学部は張れないという感じになります。

それから、CBT、これは卒業するための大きな関門。学士1は6年生の頭にする試験。それから、実質上の卒業試験になる学士2、これを全て再試で通って、今まであっぱあっぱ合格で、何とか6年生になっていったんですけども、これを最初の本試験で通らないと、やはり国家試験の合格率は上がらないということになりますので、その底力をつけるためには、再試ばかりで通っていたのでは駄目だということですね。

それから、国試合格者を新卒でいって、まぐれではなくて、コンスタントに80%以上を取っていれば、私立大学でいうとベスト5に、あるいはベスト3に入るぐらいのところに位置決めできるということになります。ですから、それは今年のように新卒91.4%で、国立も入れた29校中で5位だということでもありますので、ほかの国立大学より本学の方がかなり上を行ったのが今年の結果でございました。

それから、約80～90、一時は100人くらいたまっていた既卒者ですね。卒業はしているけれども国家試験に合格しないという人。これは非常に大変です。あまりこちらから出席を取ると言っても、もう自由だし、かといって本学を卒業しているということはずっと永久に残りますので、一旦そこで勉強もしないでこっそり受験してしまうと合格率が下がってしまいますので、これを何とか、もう涙をのんで、ボランティアの先生が夜遅くまで、一つの7年生クラスみたいのを組んで、それで頑張ってもらって

いる。そのために、従来は200万円ほどの授業料が要ったのを、今は完全無料で、いろんな模擬テストとか新しいテスト、それから人件費も無償で教育していております。これも徐々にですけども効いてきているので、さらに合格率が総合力としてはプラスになっていくと思われます。教育は以上です。

【大学院生目標—三つの力】

- 一、大学院進学と海外留学の支援
- 一、大学院生への患者診療の支援
- 一、研究・論文業績の量的増強

平成28年度策定目標

【卒前学生目標—五つの力】

- 一、入試倍率—向上体制
- 一、確実な進級を果たす
- 一、教え方の工夫へ教員努力
- 一、初年次からの人間性教育
- 一、優れた教員人材を養成

そこで次は、もう5年以上前から五つの力(りよく)の目標というのを立てました。それから追加で、三つの力の追加目標。大学院のことにに関して、研究の目標に関して立てました。本学では従来、八つの目標をずっと言ってきたんですけども、ここでさらにブラッシュアップするために、このようにやってきました。

【大学院生目標—三つの力】

- ・留学用の英会話力、英検 TOEIC TOEFL
- ・大学院生の患者診療力
- ・研究力・論文業績の作成力

平成30年度強化目標

【卒前学生目標—五つの力】

- ・入試倍率—3.0倍以上
- ・確実な進級—授業の皆出席を指導
- ・教員努力—学生の顔と氏名覚える
- ・人間性教育—皆出席・出勤の習慣
- ・優れた教員—声かけ・寄り添い・育み指導

成績向上・患者信頼度

ここは under graduate、これは post graduate、いわゆる graduate school です。そのうちの学生の方は、やっぱり入試倍率は3倍以上欲しい。どうしてもほかのところよりも大阪歯科大学を選んで受験してほしいという願いが何回も出てくる。確実な進級、留年させないためには、皆出席。留年する人を見ていたらまず出欠が悪く、欠席から始まります。そこで、皆出席者を大勢つくりたいということで、なるべく欠席させない。本学は休講、講義を休むということは皆無、ゼロですので、親元には休講だからといってどこか遊びに行っている人は無くないといけない。特に入ってほっとすると、欠席者が多くなる。遅刻、欠席を綿密にコントロールする予備校式といい

ますか、義務教育式の教育をせざるを得なくなっているんですけども、ここからだんだんと崩れて落ちこぼれていきます。そういうことが分かっておりますので、これには特に。

それから、教員の努力の方もしてもらいたい。よく学長セミナーなどを聞いてみますと、学長以下教授は、自分の担当する、自分の大学の学生の名前を聞いたらずに顔が浮かぶ。顔を見たらすぐ名前、少なくとも名字はすぐ思い浮かべる。この努力をして欲しいと。同じように、すれ違って「おはようございます」と言っても、その「おはようございます」と学生が言ったのを、あれは何という学生だったかを思い出せないと教員は失格だと習ってきましたので、それを今年からまた先生方をお願いしたいと。自分の担当するところは、特に顔と氏名がきちんと合うように。これで、だいたい学生は、「名前まで覚えられているから逃げられんな」と思うかどうかは知らないですけど、だんだんわりあい真面目になってきます。

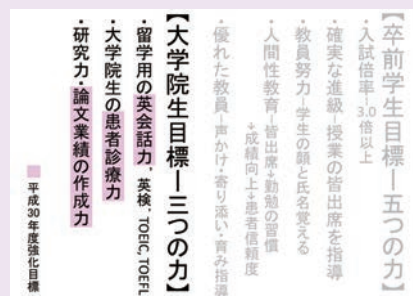
それから、人間性教育の一環として、やっぱり皆出席から、1年生からがみがみ言わないと駄目なんですね。これによって、少なくとも嫌々でもとにかく皆出席が続いていると、勤勉とか根気の習慣がつきます。勤勉の習慣、勉強の習慣をまずつけないと、5年生になっても6年生になってもこれができていないとやっぱり欠席が多くて、やっぱり成績が下がってくるということになりますので、出席、出席ということをやっても口やかましく言います。それで成績が上がってくると、やはり卒業してからでも、アポイントメントシステムにおいて、患者さんをすっぱかしたり、患者さんを30分も1時間も待たせても平気な歯科医師がおりますけれども、そういったことでは信頼が得られないですから、やっぱり人間性教育にもつながるのではないかな。初めは卒業するための要件ですけども、やはりその後は医療職、患者を扱う職をしたいという、信頼される歯科医師をつくらせてこそ大学の名前も評判が良くなっていく。

従って、この優れた教員というのは、



現在では率先して教員のほうから声をかける。声をかけるためには顔と氏名を覚えていないと、どうもかけにくい。どうも精神的に落ち込んでいる人には、よりそういう指導で、右から声かけ、左から声かけ、後ろからサポートするというような、本当に付きっきりの指導をしないといけない。今は、教務の先生にこれを全部やっていただいているので、あれだけ成績が上がってきたわけだと思っております。

それから、一回受けた講義がどうも理解できない。それをその日のうちに復習しないで、明日、あさってにまた受けるものだから、だんだんついていけなくなって落伍してくる。これを予防するために、育み指導ということで、どの程度理解しているかどうかを毎回、講義のたびに終わりに試験、小テストをしてもらえれば一番いいんですけど、それができないのは落ちこぼれてくるのはみるみる分かっていますので、それを食い止めて、留年を防止するという方法しか王道はないということが分かりました。この学生の教育に携わっている教授の先生以下、准教授、講師、助教の先生には頭が下がります。そういうことをやらないと、医療に携わるような大学の教育には、特別一人だけ優秀な人をつくっても、あとは成績が悪いような教育では学校経営は持ちこたえられない。徐々に実践的なことを申しております。



次に、大学院生の目標は三つございます。これは将来、短期にしる長期にしる、留学をするということを目指してもらって、それに役立つグローバルランゲージである英会話の力を今の間につけておく。それから英検とか TOEIC、TOEFL、どれか一つか二つを今のうちに少しでも受験して取って準備をしておく。これを4年間の間にできるだけさせよう。

それから、今までは、大学院というのは博士の学位を取るためだけに行くんだと。そういうところへ行けば、診療ができないんだというか、診療から離れるんだと。研究室ばかりに行って動物実験する人では、もう患者の顔を長いこと見たことがない。それで学位を取った人が「自分は博士です」という顔をして人間を診察する、こういう姿の学位制度というのはだんだん廃れてきています。今は、大学院に行っている人が一番臨床も上手で、患者からの信頼も強いし、患者を引きつける力、患者を呼ぶ力はやはり、こういった大学院生を育てないといけないということで、大学院1年生の時からできるだけ本学の附属病院で診療してもらうように。今年から、特に新しい目標をつくるような制度に変えてもらいたいと思っております。そして、今度は研究の成果ということで、患者さんを診る合間を縫って、研究をやって論文を書いて業績を作っていくという力、生産していくという力。この両方をやれるのが大学院の学生であるということですね。

【本学大学院(博士)へ進む主な目標】

平成30年度策定目標

- 1> 優れた医療技術を身につける。
- 2> 患者を呼べる専門医になる。
- 3> 世界に通じるD.D.S., Ph.D.になる。
- 4> 可及的早く教授キャリアを獲得する。

そうすることで、今年初めてこれを提案するわけですが、本学大学院へ進む主な目標としては、最新の優れた医療技術を、自分が専攻する科については「自分は大学院を出ているから、最新の知らない技術はない。できないことはない」というほど、そちらを身に付けてもらいたい。それから、患者を呼べる専門医になるということですから、やっぱり臨床家のような形ができないといけない。

今、文科省も、将来、開業医になろうとも、研究者になろうとも、6年間の under graduate の間に、論文が書けないような学生は卒業させないでくれと。文科大臣は今、そのように言われているんですね。そういうことをするには、国家

試験でぐずぐずしているようでは、そこまでなかなか研究して、英語で発表して論文を書いて、それで国家試験の勉強もしてというふうにはなかなかいかない。しかし、そこまでいってこそ初めて歯学部とか医学部とか、そういったところの大学を出て、国家試験の D.D.S とか Ph.D を持っているんだと。そうすれば世界に通じる。それで英語ができれば、どこの国に行ってもフランクにできるし、患者さんも診られるという感じになります。留学するのでも、こちらから日本人がアメリカに留学して、会話が上手になるに従って、向こうの附属病院での授業料がだんだん安くなってきます。途中で日本人が、英語が非常に達者になった場合には、その病院で授業料を pay back してくれるというか、給料がもらえる。アメリカではそういうシステムになっているわけでありまして。そういったところを目指していくということは、やはり法人にとって教授の資格が十分ある。これは本学でそういうふうになってもいいですけど、本学でなくても、他大学でもこういう人がいれば引っぱりだこになるという感じになろうと思います。

【本学大学院での研究方針】

平成30(2018)年度～

- 1> 附属病院にて継続的に患者を診療する。
- 2> 基礎系の院生も特定の診療科で診療する。
- 3> 「大学院医員」の職階で診療する。
- 4> 国内留学は従来通り、届け出て行う。
- 5> 大学院講義は天満橋学舎と楠葉を併用する。

そういうのをやるために、できるだけ実践的・具体的・継続的に患者を診る。たまに診たのでは患者さんはあまりついてこない、信頼しないということですから、1週間に3回以上、定期的に継続的に診るということですね。それから、基礎系の大学院生もどこか自分の専攻したい、研究に役立つような所の診療科で診療するという形。そこでの職階の身分は大学院医員とかいう形で診療することになろうかと思っています。

大学院生に入った途端に、医科大学とかほかの国立研究所とかに行く場合もあります。それを内地留学、国内留学と呼んでいますけれど、それはこちらの研究

科に届け出てから行わないと、本学の学位記は本学から渡すわけですから、向こうへ行きっぱなしでは困る。

それから、大学院講義は、やっぱり学舎がここ楠葉と天満橋に別れていたから、どうしても行き来が無駄になって成功しないので、天満橋学舎の方がいい場合と楠葉の方がいい場合とありますので、そこはカリキュラムによって、座学はもう少し天満橋学舎もよく使ってもらいたい。

＜附属病院の役割＞

- 1> 患者数が多いこと
- 2> 症例が豊富
- 3> 診療参加型臨床実習-実患者
- 4> PostCC-OSCE-実患者
- 5> 医科歯科連携、地域包括支援医療
- 6> 多職種協働
- 7> スペシャルニーズ-訪問・在宅診療

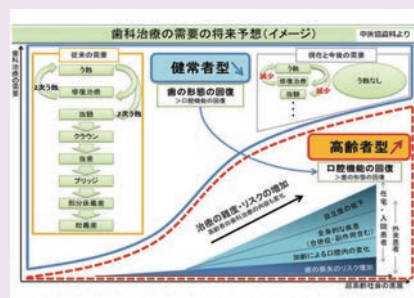
それから、附属病院の目標。これは口が酸っぱくなるほど言っていますけれども、患者数を増やさないで附属病院の役割は果たせない。症例が豊富になるということは、非常に附属病院にとって誇らしいことであるし勉強にもなるから、本学の在学生だけではなくて、他大学からでも本学の附属病院へ、昔はよくありましたけれども、臨床実習をするために、こちらへ一定期間習わせてほしいという要望がよくありました。

それから、これからは診療参加型、ペーパーだけの国家試験ではなくて、実際の患者さんを診させないといけない。学生時代、5年生からどんどん先生のいないところでもレベル1の診療はやってよるしいという感じ。そして、実習試験というか、それが終わったときにもう一度身に付いているかどうか。そうしないと、危なっかしくて外へ離せない。ペーパーだけの国家試験だけで、臨床の腕もないのに社会へ放てないということのようでもあります。そして、Post-CC クリニカルクラーク OSCE でもって、実際の患者さんを使って、ファントムばかりではない、マネキンばかりでは役に立たない、そういうのをやります。これを医学部では2020年、あと2年後、オリンピックまでに法制化しまして義務化しますので、歯学部もそれに合わせてスタートを切っています。もし万が一遅れても、2021

年、あと3年でこういう形になりますから、患者さんがいないようでしたら、実際の身内の患者さんを連れてきてでもやらないと卒業できない、そういう形の国家試験の形態になってきます。そして、実際の診療する方のウエイトがぐっと増して、ペーパーだけの国家試験問題がだんだん減ってくる、今みたいに1問解くの30秒しか考えられないという問題は減らしていくようであります。

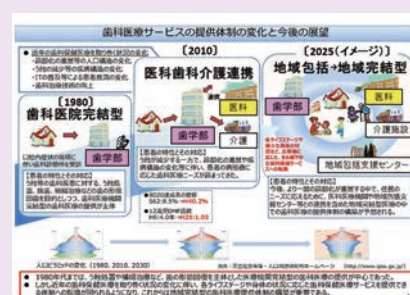
それから今、新しく厚生労働省でも言出したのは、地域包括支援医療をこれからやらないと、疾病構造がどんどん変わってきて、後期高齢者が3割近くになってくるような時代があと7年後にやってくる。それに対して、今までのような歯科医院で完結して、「はい、終了です」、リコールまで来んでよるしいという診療形態は昔のことになりつつあります。

それから多職種は、医科、歯科のドクターだけではなくて、看護師さん、衛生士さん、技工士さん、そういった人が同時に働く、あるいは連携を保ちながら働くということをやらないと能率が上がらない。そして、さらにこのスペシャルニーズとして早急に訪問在宅診療を全ての附属病院でやらないと、お叱りを受ける。



昔は、う蝕、歯周、クラウンと、こういう形でずっと保存、補綴、口腔外科を中心としての治療形態が圧倒的に多かったものですから、こういった形で治してきた。しかし、それはだんだんと数も少なくなって、そうもいかなかった。もう難しい。一本歯を抜くにしても、必ず医科的なものを参考にしないと歯も抜けないし、注射もできないし、歯を削ったりすることも、全身の状態をよくモニターしながらやるという形態。これは手間がかかるし、連携してやらないと、こちらだけ、歯科医師だけではできない領

域。全身の医科の方と同時にやっていかないといけない。こういう形態にどんどん変わっていきます。



そして、この未来図によく現れているんですが、今まで、1980年代は歯科医院完結型といって、自宅から来て、歯科医院に行って終わり。医科へ行くのはまた自宅から、全然歯科の方とは関係なしに、医者の方に診てもらっていた。それが、今やかましく言っているのは、医科、歯科、介護も連携して、この三つが連携したような、これを地域包括ケアと言いますけれども、そういう形に変えていかないといけない。附属病院も保存、補綴、口腔外科でこういうようにパターションとかフロアを仕切ってあるようなところは非常に古くなってきまして、これでは立ち行かなくなってくるんですね。ですから今、新しく建てている歯学部の附属病院は、かなりのところ、例えば保存3科と補綴3科は全部同じフロアで診療するとか、そういう形になっているところが多くなってきました。そして、将来は地域包括を途中でやって、最終的にはどこかで地域完結、ここで完結する。それを地域包括支援センターでもってコントロールしたり、あるいは歯学部でやったり、そういうことをやるというのが2025年、ちょっと遅れているんですけども、こっちはどんどんやっていかないといけないということです。

＜附属病院の目標＞

- 1> 患者数の増強-全診療科20%増
- 2> 土曜日の全科開院
- 3> 経理黒字化=医療収入↑経費↓
- 4> 学生-診療参加型臨床実習-実患者
- 5> PostCC-OSCE-臨床能力試験-実患者
- 6> 訪問診療・在宅診療の実施-臨床研修プログラム
- 7> 大学院生の学内診療参加

本学の病院の目標としては、今現在やっているところ、土曜日の全科開院、



それから経理の黒字化も図らないと、特に私立大学はもうどうしようもない、破綻して、どこからも補助金が出ないという形になってくる中で役割を果たさないといけない。そして、こういう実患者を使うところを設けないといけない。患者さんが学生さんに診られるのは嫌だと言ったら非常に困ってくる、卒業できなくなるという感じで、在宅訪問診療は、臨床研修で今やっている中で、必ずこれを経ないといけない。これを実施しないといけない。従って、その拠点となるのは歯学部附属病院でもこれを早急に、本学もこれで叱られていますので、早急にこれを作らないと立ち行かなくなる。そういうこともあって大学院生が、ただ基礎研究室だけで動物実験だけをやっていたんでは学位を取れないという形になるので、学内の診療3科、初めから診療の方もどんどんやらないと、大学院に行かなくて民間の所にいきなり勤めた人の方がどんどん腕を上げていくという結果になってくるわけですね。大きく変容が起こってきております。

医療保健学部が新しく開設しました。そして、大学院でもできました。さて、そこでアドミッションを増やして、これからどんどん外国とも交流したいし、非常に大きなキャリアといえますか、職業をどんどん開拓して、卒業後の働き口をどんどん広げていく必要があります。

<4年制大学(医療系学部)新設>

● 中教審の答申(平成28年): 背景

➢ 「専門職大学・短期大学制度」(平成29年~)

➢ 専門学校 ➡ 短大 ➡ 4年制大学 + 大学院

● 歯科衛生士、歯科技工士資格の職域拡大

● 大阪歯科大学大学院 「医療保健学研究科口腔科学専攻(修士課程)」

そういうことでございますので、今や専門学校や短大は4年制大学の方にシフトしてきました。それから、4年制大学にさらに希望があって、大学院へ行きたいという。こういう形態、本学はここを狙っているわけで、少し早目に進んでいるということでもあります。歯科衛生士さん、歯科技工士さんの資格の職域拡大を狙わないと、単なる養成機関ではないと。大阪歯科大学大学院の修士課程、間

もなく博士課程も必要となるようになっております。

<医療保健学部運営>

平成29(2017)年度策定

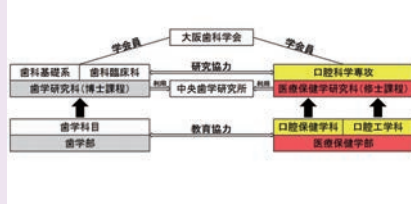
- 1> アドミッション(募集力)増強
- 2> 職域拡大、キャリアパス支援
- 3> 国試合格率100%
- 4> 国際交流の推進
- 5> 英会話力推進

そういう背景で、本学はまず倍率を高めて、就職口をその後どんどん広げて、国家試験は当然、専門学校でも同じ試験を受けるんですから、4年間も行つて、これが100%にならないのはおかしいと言われることになりますね。

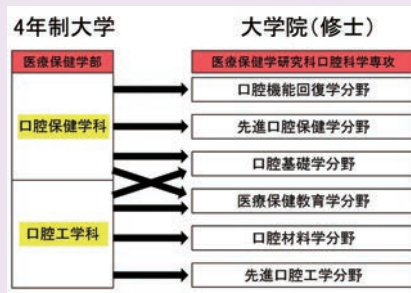
それから、国際交流。今、どんどん近隣の、特に発展途上国、東アジアだけではなくてアセアン諸国では、将来どんどんそちらの方に向かっております。これが、5年制の専門学校とか6年制の専門学校というのにもざらにあるんですね。だから、修業年限が多ければそれだけ大学になるかということ、それを目指しているために大学院に行かないといけないということになります。

これはどちらも衛生士さんです。これはCAD/CAMをやっている歯科技工士さんの方の口腔工学科の学生さんのシーンですね。

<大阪歯科大学> 医療保健学部と大学院(修士)



こういう形になります。4年制学部と大学院がこのように絡まっている。



こういうふうに習うことも、こういっ

た科目を新たにする。これで、2年間余計に行く。2年とか3年間、修士課程でも多目に行く必要が出てくるわけであり

ます。それで最後に、学生の国際交流力の向上というところがあります。



これはコロンビア大学へ数年前から行っている学生で、一番親切に、一週間ほどの行程に先生が二人ほど付いて行ってですね、これは向こうに行って実習もさせていただいている。



提携を結んでおけば、こういうところは本当は邪魔になるでしょうけれども、嫌な顔をせずにやらせてくれます。短期で行っても、モチベーションとしては、帰ってきたら、ガラッと人が変わったように勉強モードになって、早く国家試験を通して社会に出ようという意識が強くなるようであります。



これは中国の四川省。中国で一番古い歯学部で、ここもよく行ってきて、熱心な国際化をどんどん図っております。向こうでコンペティションをして、うちから行った二人の学生が1位を獲得しました。

＜国際交流力支援＞

- 1> 熱心な学生ほど国試合格率が高い
- 2> 優秀な学生人材が多く集まる
- 3> 外国大学学生も成績優秀者が多い
- 4> 学生の夢・希望を啓発できる

ということで、やっぱり国際交流をすると、国試合格率も高くなるし、優秀な学生はこちらに関心をどんどん示すようになります。外国の人もこちらへ来ますので、そういう成績優秀者が大勢希望制でやってくるということですね。モチベーションを高めるには、非常にこれは有効で、将来、国際人として活躍するのが我々医療人の世界ですね。

ということで、元旦におみくじを引いてまいりましたら、今年も同じ大吉でした。もう一つ嬉しいことがあります。



これは、本学の保存学の山本教授と吉川准教授とのお世話で、ここと研究連携協定というものを2016年2月に締結しました。締結した時はJ2で弱かったんですけど、それでも締結したからにはということで、ここの名前の桜の木一本

を寄附して締結しております。そしたら、何が良かったのか、瞬く間にJ1に昇格して、今年の天皇杯ではこのように優勝して1億5千万円の賞金を獲得したというセレッソ大阪の姿であります。このように飛躍して、頑張っって前向きに進んでいる一つの成功例を今年二つ見ることができました。二つタイトルをとったんですね。天皇杯とJリーグ杯ですね。桜という意味だそうです。

以上で、今年も頑張りたいと思っていますので、また少しでも向上した成績を披露したいものだと思います。どうもご清聴ありがとうございました。

平成29年度「私立大学等改革総合支援事業」に採択

本学は2月5日付、平成29年度「私立大学等改革総合支援事業」に採択されました。「私立大学等改革総合支援事業」は、文部科学省が平成25年度から実施しています。事業では、地域発展やグローバル化など5タイプの改革に全学的・組織的に取り組む私立大学等に対する支援を強化するため、経営費・設備費・施設費を一体として支援します。

本学はこのうち、タイプ1「教育の質的転換」を継続して申請し、今回、3年連続で採択されました（申請校数665校、選定校数342校、選定率51%）。タイプ1では全学的な体制での教育の質的転換を進めていること、高大接続改革に積

極的に取り組んでいることが評価対象となります。

本学は29年度も、教育連携協力協定校の香里ヌヴェール学院高等学校との「出前授業」「体験授業」の実施、歯学部における新たな入試方式（プラス1）の導入、医療保健学部も含めた入試地方会場（名古屋、広島）の追加、さらに、アクティブラーニングの環境整備に基づいた学生教育の改善、FDとSDの合同開催を通じた教職員の資質向上など、さまざまな改革を実行しました。今後も、教育の質の改善・改革に全学一丸となって取り組む所存です。

2017年度

事業報告

はじめに

大阪歯科大学は、1911（明治44）年12月に近代的な歯科医学教育の普及を目指し、大阪府認可の「大阪歯科医学校」として設立された。

爾来、「博愛」と「公益」の建学の精神を柱に100年を超える学園の歩みの中で、歯科医学・医療の発展に寄与してきた。

本学は、2017（平成29）年度において、教育、研究、臨床の発展充実、経営の効率化を目指した各種事業を推進した。

歯学部における学生の受け入れについて、広範な入試広報活動の結果、入学志願者の大幅な増加と実質入試倍率の前年度比増を達成した。歯学部教育において、初年次教育の充実、オナーズ教育への注力、歯学系共用試験、臨床実習の成績の向上に向けて取り組み、前年度に引き続き「文部科学省私立大学等改革総合支援事業」に採択された。そして、教育のメ

ルクマールである歯科医師国家試験については、新卒者合格率82.2%という好成績を収めることができた。また、歯科技工士・歯科衛生士国家試験においても好成績を収めた。

国際交流については、グローバル大学に相応しい教員・学生研修派遣を展開した結果、参加者にとって多くの学術研究上の知見を吸収することができた。

大学院歯学研究科においては、一般、社会人、外国人留学生の各区分で入学者を募集するとともに、大学院生の研究活動の活性化を図った。

附属病院においては、理事会傘下の病院組織改革委員会の検討を受け、医療の質の向上と経営効率化に向けて取り組んだ。

2017（平成29）年4月開設の4年制大学医療保健学部においては、学生の受け入れ活動を積極的に行い定員の充足を図った。同年8月には大学院医療保健学研究科（修士課



程2年)が設置認可となり、2018(平成30年)年4月開

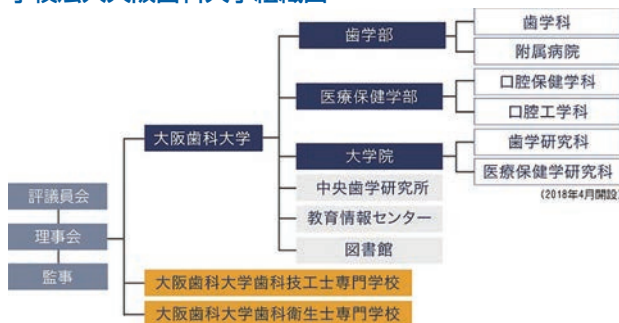
設に向けて学生の受入れ活動を行った。

沿革

1911(明治44)年12月12日 大阪歯科大学設立
 1912(明治45)年1月14日 大阪歯科大学開校式
 (創立記念日)
 1917(大正6)年9月7日 財団法人大阪歯科大学専門学
 校設立
 9月25日 大阪歯科大学専門学校開校
 1947(昭和22)年6月18日 大学令に基づく旧制大阪歯科
 (大学昇格記念日) 大学設立
 1951(昭和26)年3月2日 私立学校法に基づく学校法人
 大阪歯科大学へ組織変更認可
 1952(昭和27)年2月20日 学校教育法に基づく新制大阪
 歯科大学設置認可
 1961(昭和36)年3月31日 大阪歯科大学大学院歯学研究
 科(博士課程)設置認可
 1964(昭和39)年4月17日 大阪歯科大学付属歯科技工士
 養成所(大阪歯科大学歯科技
 工士専門学校)開設

1968(昭和43)年5月1日 大阪歯科大学付属歯科衛生士
 学校(現・大阪歯科大学歯科
 衛生士専門学校)開設
 1997(平成9)年4月1日 楠葉学舎竣工、天満橋学舎附
 属病院竣工
 牧野学舎(体育・課外活動施
 設)と合わせて3学舎体制
 となる。
 2011(平成23)年11月11日 創立100周年記念式典挙
 行
 2016(平成28)年8月31日 大阪歯科大学医療保健学部
 (口腔保健学科・口腔工学科)
 設置認可
 2017(平成29)年8月29日 大阪歯科大学大学院医療保健
 学研究科(修士課程)設置認可
 2018(平成30)年3月31日 大阪歯科大学歯科技工士専門
 学校廃止認可

学校法人大阪歯科大学組織図



I. 大学全体での取り組み

大阪歯科大学は、教育基本法の規定する教育の一般的な目的と方針に則り、歯学に関する学術を中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の領野における学理技術を教授研究し、知的、道德的及び応用的能力を展開させ、もって文化の創造と発展に貢献することを目的としている。この目的達成のため教育・研究・臨床の発展を図った。

II. 教学(歯学部教育)の改革

歯学部においては、教学支援体制の充実を図り、建学の精神である「博愛」と「公益」に合う歯科医療人育成を目指し、様々な取り組みを行った。

1. 入学志願者増加への取り組み

アドミッション・ポリシーのもと、優秀な学生の確保に取り組んだ。

アドミッションセンターは、アドミッションセンター長

(副学長・教務部長兼任)と専任職員(課長1名、主任1名、課員2名)で構成され、入試委員会による決定を受け、オープンキャンパス、高校訪問、高校生向け入試・入学説明会を積極的に展開した。

オープンキャンパスについては、楠葉学舎で7月1回、8月2回(うち1回は天満橋学舎)、9月1回、合計4回行われ、延べ参加人数は477名であった。楠葉学舎でのプログラムは、入試概要説明、本学学生による講演、入試に向けてのポイント講座、体験実習、ミニ講義、キャンパスツアー、個別受験相談会を実施した。さらに、2015年度から始まった本学附属病院での入試説明会と院内見学は3年目を迎え、前年度を上回る87名の参加で好評であった。

4月から11月の期間には、17都府県(東京、千葉、埼玉、神奈川、愛知、福井、大阪、京都、和歌山、三重、兵庫、広島、岡山、高知、福岡、鹿児島、沖縄)の特設会場で高校生対象の進学相談会を行い、入試状況最新情報とキャンパスライフ、歯科医師の将来展望などの情報提供を行った。

入試科目については、推薦・一般入試において、英語の各種資格・検定試験(注)の結果に基づいて、一定の基準を満たしている場合は、「外国語(英語)」の受験免除制度を昨年度に引き続き実施した。

(注) 受験免除基準検定試験 スコア・級

GTEC for STUDENTS 650以上、GTEC CBT 1000以上、TOEIC 550以上、TOEFL(iBT) 55以上、TOEFL(PBT) 484以上、実用英語技能検定2級以上となっている。※取得時期は問わない。

センター試験オプション方式＜プラス1＞を新たに導入した。これは、本学一般試験の得点に、センター試験受験科目の6教科（外国語、数学①・②、国語、理科②、地理歴史、公民）より高得点1(2)科目の得点を合計し、可否を判定するものである。

また、入試の試験場は、一般入試（前期日程）において、東京会場（駿台予備学校お茶の水1号館）、名古屋会場（代々木ゼミナール名古屋校：新設）、広島会場（ワークピア広島）、福岡会場（代々木ゼミナール福岡校）を設置した。

入学試験成績優秀者特待生制度については、その充実を図り、優秀な学生の確保に努めた。一般入試及び大学入試センター試験利用入学試験においての措置で、概要は以下のとおりである。

- ・A種（初年度学納金（入学金を除く）免除：515万円、2年次以降は授業料全額免除：380万円×5年、対象人数1名、2年次以降は優秀な成績を維持することを条件）
- ・B種（初年度は学納金（入学金を除く）免除：515万円、対象人数25名（2年次以降は在学中の学業成績優秀者に対し年間授業料から100万円免除）

以上のような取り組みにより、2018年度入試の志願者は昨年度を上回り、募集人員に対する実質競争倍率は3倍を超え、2018年度新入生128名を充足した。

2011（平成23）年度（2012年度入試）から実施され7回目となる編入学試験では、2名が第2学年へ編入となった。

2. インスティテューショナル・リサーチ（IR）室の活動

専任職員1名を配置して、教育、学生支援にかかわる情報の収集、分析、研究（教員業績を含む）にかかわるデータの収集、分析、データベースを利用したデータ収集及び検証並びにデータベースの整備、本学の計画策定、政策決定、意思決定業務等の支援等の活動を行った。

2017年度は、学生の生活実態調査や、授業への皆勤者調査、学業成績下位者に関するデータ集約、育み・寄り添い教育の該当者の授業出欠状況等、教務部委員会への検討資料として提示した。これらを受けて委員会では、全学生の生活実態を把握した上できめ細かな学修指導を計画し、実行した。

3. カリキュラムの展開について

歯学部では、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーを改正し、建学の精神の具現化に努めた。

態度教育科目の「コミュニケーションⅠ～Ⅳ」は、第1学年から第4学年まで横断的に開講した。

その中で、特に「ODUソーシャルコミュニティ」(1単位)は、態度教育科目の「コミュニケーション」の中で、第1学年から第4学年までの全学生が、学長及び教職員とともに枚方市の主催する環境美化活動であるアダプトプログラムに登録し、朝8時から楠葉学舎周辺の歩道での清掃及び通行する地域住民の方々に挨拶を行った。学生の皆出席を義務づけ、

欠席者には予備日に振り替えて実施し、参加態度はもちろんのこと、経済産業省・社会人基礎力診断から総合的に成績評価を行った。

従来からの第1学年次の人権論（1単位）、早期臨床体験学習（1.5単位）、社会福祉施設体験学習（2単位）は、引き続き学生の態度教育の柱として十分機能している。「現代教養」(3単位)では、マナー指導、学習態度の確立、プレゼンテーション能力などを通して、歯科医師として必要な素養と思考力、判断力、表現力など様々な状況に臨機応変に対応、解決できる能力を養うことを目的にしている。その中では、漢字検定準2級の第1学年全員受験や成績優秀者にTOEICの受験を実施した。

第2学年次では基礎系歯科医学教育を、第3学年では、情報科学教育、社会系歯科医学教育、臨床系歯科医学教育、総合医学系教育をしている。第3学年次の「ゼミナール」(2単位)、「研究チャレンジ」(2単位)は、演習科目として学生を研究室に配属して行うものである。特に「研究チャレンジ」は、研究マインドを学生に涵養することを目的にしており、リサーチリテラシーを涵養し、今年度もSCRIP（ステューデント・クリニシャン・リサーチ・プログラム）での成果発表を行った。

第4学年では、全国共用試験歯学系CBTについて、指導体制を強化し、試験成績の向上に努めた。特に成績下位者には合宿形式の重点的学習を行い弱点の補強を図った。

歯学部全学年に対してクリッカーを設置し、従来の知識伝達の学びから能動的学びアクティブラーニングを実施できる体制となった。

第5学年においては、臨床実習必修を整え学生に配付し、学修の徹底を図った。患者中心型診療システム（POS：Patient Oriented System）に基づいて検査、診断、治療計画にいたる情報収集と基本的歯科診療技術の訓練を行った。そして、臨床知識試験（年間5回実施）、臨床実習終了時試験を実施した。臨床実習の合格基準は、診療参加経験数、観察記録による評価、臨床実習終了時試験の合格、講義出席率80%以上である。また臨床知識試験の合格基準は平均得点率65%以上である。臨床実習の完了と臨床実習終了時試験、臨床知識試験の合格をもって歯科臨床教育の40単位を修得できる。これらはいずれも進級要件である。2017年12月20、21日の両日には、本学で臨床実習後能力試験トライアルが実施され、第5学年全員が対象の「臨床実地試験」と選抜された20名が対象の「一斉技能試験」を受験した。

また、2017年度より、オナーズ教育として「大阪歯科大学教育改革事業」を開始した。この事業は、教育支援に関する内容を学内公募し、選考の結果採択されれば学長裁量経費（新設）をもって費用の全額を大学が負担するものである。今年度は、選考の結果「グローバル活躍プログラム」が採択された。このプログラムは、本学大学院へ進学を希望する意欲ある学生にオンライン英会話サービスを使い、外国人との「生きた英会話レッスン」を受講することにより、近年要求



される英語での論文発表や、短期海外研修、SCRIP へのエントリーなどグローバルに活躍できる人材の育成を目指している。今回のプログラム費用は 44 万 640 円で、10 名の学生が対象となった。なお、本プログラム受講者で、本学大学院入試を受験する者については、外国語（英語）の試験が免除となる。

第 6 学年は、昨年度と同様に学士試験と本学指定の模擬試験により、成績の向上に努め、きめ細かな指導を行った結果、第 111 回歯科医師国家試験の合格率は新卒者（82.2%）、既卒者（43.6%）となり、共に全国平均を超えた。

各学年について、教員が楠葉学舎及び天満橋学舎の研究室に在室し、学生の質問や相談に応じるオフィスアワーを設けた。

教務関連の機器備品の新規設置については、楠葉学舎コンピュータ実習室及び LL 教室のパソコンの更新、天満橋学舎における第 5 学年使用のクリッカー設置、創立 100 周年記念館への無線 LAN システム（Wi-Fi 設備）の導入を行った。

学生生活指導体制

各学年の指導教授、助言教員、特別アドバイザー、教育アドバイザー、大学院生の TA により日々行われている。「学生カルテ」を活用するとともに、学生には「学習ポートフォリオ」の作成を通じて自己成長を確認させ、適切な助言を行った。

朝の挨拶運動は、2015 年度から教授を含めた全ての教員が輪番制で、楠葉学舎正門前に立ち、登学する学生に対して行っており、今年度も人間関係の基本である挨拶の重要性を認識させるとともに、学生と教員の信頼関係の構築にも役立った。

学生部委員会では、『学生生活ハンドブック』を作成し、全学年に配付した。

2017 年 5 月に「薬物乱用防止講演会」が、第 1 学年を対象に、大阪府警、枚方警察署から講師を招き開催された。

「学生相談室」は、楠葉学舎と天満橋学舎において、専門の臨床心理士（非常勤 3 名）を置き、毎週月・火・金に学生・教職員等の相談を行った。定期的に、学生部長、教務学生課長、臨床心理士及び看護師により、相談内容について共有を図り、解決に向けての協議を行った。

学生スポーツの振興

全日本歯科学学生総合体育大会は、国公立歯科大学・歯学部 29 校の体育系クラブが参加するスポーツの祭典である。この第 49 回大会（当番校：岡山大学歯学部）が 8 月 1 日から 10 日まで開催され、本学は総合で第 4 位であった。

【国際交流】

本学の今年度の国際交流は、交流協定提携校を中心に、下記の日程で実施された。

・海外協定校との交流 受 入

< 2017 年 4 月 5 日 >

山西医科大学（教員 6 名 入学式出席、病院見学、学長懇談）

< 2017 年 4 月 17 日 >

台北医学大学口腔医学院（教員 4 名 学長懇談）

< 2017 年 4 月 24 日 >

山西口腔医学会（教員 3 名 楠葉学舎見学、病院見学、学長懇談）

< 期間：2017 年 7 月 30 日～ 8 月 5 日 >

上海交通大学口腔医学院（学生 3 名、引率教員 1 名）、南方医科大学口腔医学院（学生 3 名、引率教員 1 名）、四川大学华西口腔医学院（学生 3 名、引率教員 1 名）、台北医学大学口腔医学院（学生 4 名、引率教員 1 名）、山西医科大学口腔医学院（学生 5 名、引率教員 1 名）が来学し、特別講義（英語での講義）、天満橋学舎附属病院、外部歯科診療所を見学した。

なお、期間中の 8 月 4 日には、The 1st Forum for International Students（FIS）が本学楠葉学舎において開催された。これは上記アジア 5 大学と本学歯学部学生、大学院生の研究発表を全て英語で行うフォーラムである。

< 期間：2017 年 11 月 13 日 >

中国雲南省昆明の昆明医科大学代表団が、楠葉学舎において本学歯学部学生の講義を聴講、さらに図書館に保存している数々の貴重図書を見学された。引き続き、附属病院に各診療科を視察された。

< 期間：2017 年 12 月 11 日～ 15 日 >

シドニー大学歯学部から 6 名が、本学が楠葉学舎、天満橋学舎附属病院を訪問した。さらに本学教員による特別講義の他、本学 OB の運営する歯科医院、歯科材料企業の見学が行われた。

派 遣

< 期間：2017 年 7 月 2 日～ 14 日 >

四川大学华西口腔医学院

参加学生：第 5 学年 3 名 / 引率教員 1 名

< 期間：2017 年 7 月 22 日～ 28 日 >

上海交通大学口腔医学院

参加学生：第 3 学年 5 名、第 4 学年 1 名 / 引率教員 1 名

< 期間：2017 年 7 月 22 日～ 28 日 >

台北医学大学口腔医学院

参加学生：第 1 学年 7 名、第 2 学年 1 名 / 引率教員 1 名

< 期間：2017 年 8 月 12 日～ 21 日 >

シドニー大学歯学部

参加学生：第 3 学年 5 名、第 4 学年 1 名 / 引率教員 1 名

< 期間：2018 年 3 月 10 日～ 20 日 >

コロンビア大学歯学部

参加学生：第 5 学年 6 名 / 引率教員 1 名

【社会連携・社会貢献】

・枚方市との連携事業への参画

枚方市と枚方市所在の5大学との地域連携を図るため設置されている「学園都市ひらかた推進協議会」の第17回会合が、2017年6月2日に摂南大学において開催された。協議会では「中高生を対象とした大学体験事業」、「こども大学探検隊」、「ひらかた市民大学」などの生涯学習講座について、これらを実施していくことが確認された。

本学においては、下記の連携事業が開催され、地域に開かれた大学として市民に開放した。

【中高生を対象とした大学体験事業】(2017年8月20日)

楠葉学舎において、キャンパスツアーやミニ講義、体験実習などを行い、本学の魅力をアピールした。(受験生向けオープンキャンパス2017と併催)

【こども大学探検隊】(2017年10月28日)

楠葉学舎において、本学学生有志が運営スタッフとなり、大学生によるクイズと動物の歯型による歯の勉強を行った。(本学楠葉祭(文化祭)と同時開催)

【ひらかた市民大学】(2017年10月29日)

楠葉学舎大学院講義室において、本学教員が「歯周病と全身疾患の関係」について講演を行った。

さらに、枚方市が推進するもうひとつの連携事業である「健康医療都市ひらかたコンソーシアム」については、今年度も本学公開講座を共催事業として開催した。本学附属病院医員による「健康医療キャラバン事業」に参画している(後掲)。

【枚方市への運営協力】

枚方市の審議会(環境審議会)、委員会(保健所運営委員会)等には、本学から教員を派遣、市の運営に協力している。

・第25回大阪歯科大学公開講座

本学の恒例事業となっている公開講座を「お口は健康・長寿の入口」のメインテーマで、外部機関から1名(松尾浩一郎教授・藤田保健衛生大学医学部)、本学教員1名が講師を務め開催した。天満橋(8月19日、26日)・楠葉両講座(2018年2月17日、24日)の延べ受講者は754名を得て好評であった。

また、今年度は、11月5日に本学が研究活動に注力しているゲノム研究に関して、臨床ゲノム医療学会、大阪府歯科医師会、大阪歯科大学同窓会の全面的な後援を得て、「あなたの病気のリスクをマナ(mRNA)検査で早期発見!」と題して公開講座特別講座を開催し、教員、一般市民を含め258名の受講者数を得て好評であった。なお、1993年度第1回から今回までの延べ受講者数は、26,030名である。

・朝日カルチャーセンターとの連携事業

朝日カルチャーセンターとの連携事業「大阪歯科大・朝日

カルチャー デンタル塾」を、本学教員が講師となり開講した。期間は、2017年10月から2018年3月までの原則第4日曜日であり、会場は同センターの中之島及びくずは教室で行われ受講者の好評を得た。

・セレッソ大阪スポーツクラブとの連携研究協定締結

2016年2月に一般社団法人セレッソ大阪スポーツクラブ(代表理事・宮本 功氏)と連携研究協定を締結した。協定の内容は、「スポーツと歯科医学の関係性を具体的なデータに基づき共同研究を推進し、口腔環境とフィジカルパフォーマンスとの関連を明らかにする」ことを目的にしており、2017年6月4日、セレッソ大阪アカデミー所属のU12とU13の選手約50名が歯科診断を受け、連携活動が始まった。今後、診断は継続して実施され、2017年は、185名が受診した。

・高大連携の取り組み

2016年9月に、大阪聖母女学院高等学校(現・香里ヌヴェール学院高等学校)と「教育の連携協力に関する協定」を締結した。

2017年6月30日に、同高校第1学年スーパーサイエンスコースの生徒23名を対象に、「人類を脅かす虫歯菌と歯周病菌」をテーマに出前講義を行った。7月7日、同高校の第1学年のスーパーサイエンスコースの生徒22名が楠葉学舎に来学、「虫歯菌と歯周病菌について」の実験に挑戦した。12月22日には、大阪府立槻の木高等学校の第1学年7名が、楠葉学舎に来学、歯科医療について理解を深めた。2018年2月21日、奈良市・帝塚山高等学校へ本学教員が出前講義を行った。このように本学では、高大連携の取り組みを積極的に進めた。

Ⅲ. 大学院の改革

大阪歯科大学大学院歯学研究科は、大学院生に歯学に関する学術の理論及び応用を教授研究し、その深奥を究めて文化の進展に寄与するとともに、大学院生を当該専攻分野に関する高度の研究指導者に養成することを目的としている。そして、入学者受け入れ方針(アドミッション・ポリシー)、教育課程編成・実施方針(カリキュラム・ポリシー)、学位授与方針(ディプロマ・ポリシー)を定めている。

1. 大学院生の入学者、外国人留学生の増加計画、資質向上への取組等

2018年度入試は、28名の入学者であった。このうち、外国人留学生入学者の8名をはじめ、2016年度から実施した社会人特別入試での入学者は5名であった。歯科基礎系専攻への志望者を確保する観点から、授業料の半額免除制度を継続し、この制度を利用して2名の基礎系志願者が入学した。

大学院生の海外での研究発表は、2017年度は1件あり、



これに対して研修費として助成を行った。さらに大学院生の研究 12 件に対しても学術研究奨励助成金として総額で 200 万円の助成を行った。また、今年度は大学院特別講義を 2 回開講し、大学院生の資質向上を図った。

2. 大阪歯科大学学術リポジトリの開設と 教育研究業績の公開について

文部科学省が推進する学術情報の公開については、学術リポジトリにより、学位論文内容要旨及び審査結果の要旨は学位授与後 3 カ月以内に、また、学位論文全文は、学位授与後 1 年以内に掲載した。

また、『大阪歯科大学教育研究論文目録』を刊行し、関係機関や国立国会図書館などの公的機関に配付するとともに、本学ホームページ(大学トップ>大学について>研究室紹介)に掲載した。

3. 研究不正行為防止、公的研究費の管理及び知的財産について

文部科学省の「研究活動における不正行為への対応等に関するガイドライン(平成 26 年 8 月 26 日文部科学大臣決定)」に基づき、学内規程は、「大阪歯科大学における研究活動上の不正行為の防止及び対応に関する規程」「大阪歯科大学における研究データ等の保管等に関する申し合わせ」を運用し、その徹底を図った。研究倫理教育として、「研究倫理講習会」を 2017 年 9 月 14 日開催した。また、大学院生には第 1 学年を対象に「研究倫理」の講義 3 コマ(1 コマ 90 分)を行った。

公的研究費の管理については、文部科学省の「研究機関における公的研究費の管理・監査のガイドライン(実施基準)」に基づき、毎年度チェックリストを主任教授会、監事の確認後に同省へ提出している。

医の倫理委員会関係では、「人を対象とする医学系研究に関する講習会」を同年 9 月 13 日に開催した。

知的財産に関しては、2017 年度は、発明届受付 1 件、審査請求 1 件、特許登録 2 件であった。

4. ティーチング・アシスタント、 ポスト・ドクトラルフェロー採用について

ティーチング・アシスタントは、学部学生に対する教育補助として 18 名を、また、ポスト・ドクトラルフェローは、1 名を採用した。

IV. 附置施設の活動

【図書館】

本学図書館は、楠葉学舎に本館、天満橋学舎、牧野学舎に分室を置き、利用サービスの充実を図った。教育研究活動及び学生の自学自習のために必要な図書、学術雑誌、電子媒体を備えた。なお、牧野分室は、2017 年 4 月 20 日から開館した。

- ・蔵書冊数 181,984 冊(前年度比 1.2%増)
- ・受入資料冊数 2,863 冊(前年度比 97.2%増)
- ・電子ジャーナル 5,163 冊(前年度比 6.2%増)

試験期等の期間を定めての休日特別開館、情報提供サービス(医学中央雑誌 Web 版、電子ジャーナル等)は継続実施した。設備として、ブラウジングコーナーに歯学部第 65 回卒業生から、ラーニングコモンズのため机、椅子、ホワイトボード、ブックトラックの寄贈を受けた。楠葉学舎本館において iPad 3 台の貸し出しや、牧野学舎分室において開館情報や各種お知らせを「A-portal」に掲載を開始した。

【中央歯学研究所】

口腔科学分野に必要な 10 の実験施設と中央材料室があり、単独の講座・教室で維持することがむずかしい実験機器を多数設置し、本学の研究の中核施設としての役割を担っている。教育研究用機器備品の整備(ゼータ電位・粒径・分子量測定システム ELSZ-2000、大気圧ダメージフリープラズマ PCT-DFMJ01、オスミウムコーター HPC-20 型)、『中央歯学研究所報第 9 号』を刊行し、学内配付とともに国立国会図書館に送付した。中央歯学研究所講演会を、11 月 15 日、2 月 28 日、3 月 14 日の合計 3 回開催した。

【教育情報センター】

学全体におけるネットワーク機器更新・交換、ソフトウェアのバージョンアップ、既存インフラの維持及び運営管理に努めた。マイクロソフト包括ライセンス契約の継続締結、ODUnet の運用・管理業務、コンピュータ・ウイルスへの対策を講じる等、同センター管理運営委員会が迅速に取り組んだ。機器備品としては、楠葉学舎 1 号館、2 号館のディストリビューションスイッチの更新を行った。

V. 教員人材の整備

1. 教員の資質向上への取り組み

教員の資質向上への取り組みとしてのファカルティディベロップメント(FD)セミナーについては、下記の内容で外部講師を招聘するなどし、合計 8 回開催した。

【2017 年度 FD セミナー開催状況】

・第 1 回 4 月 21 日(金)

演題：歯学系 CBT 問題公募要領と問題作成のポイント

講師：本学教員 3 名

(本学・田中昭男歯学部長、西川泰史教授、前田博史教授)

出席者数：140 名

・第 2 回 5 月 8 日(月)

演題：社会が求める医療人養成への兵庫医大の取組

講師：鈴木敬一郎教授(兵庫医科大学)

出席者数：175 名

・第 3 回 7 月 4 日(火)

演題：本学における医学教育センターの活動

講師：成瀬均教授(兵庫医科大学)

出席者数：165 名

・第4回 7月27日(木)(SD合同開催)

演題：情報セキュリティおよび個人情報保護について

- 身近に潜む情報漏洩の危険 -

講師：木村克紀氏(㈱エデュース)

出席者数：206名

・第5回 11月17日(金)

演題：多職種連携教育の意義と実践について

講師：片岡竜太教授(昭和大学歯学部)

出席者数：173名

・第6回 11月24日(金)

演題：臨床医学教育の改革と歯学系臨床能力試験トライアル

講師：本学・山本一世教授

出席者数：153名

・第7回 12月1日(金)

演題：大学に求められる障害のある学生への支援

講師：村田 淳准教授(京都大学)

出席者数：170名

・第8回 2018年2月7日(水)

演題：兵庫医大の国家試験対策

講師：鈴木敬一郎教授(兵庫医科大学)

出席者数：165名

2. 教員任用関係諸規程の改正

教員の研究業績向上を図るため「教員候補者資格審査に関する申し合わせ(2017年4月27日付改正)」、「任期制教員の再任用基準に関する申し合わせ(2019年4月1日以降適用)」、「教員の兼務、出張及び研修に関する内規(2017年5月25日付改正)」をそれぞれ改正した。

VI. 外部資金の獲得状況による教育研究の進展

平成30年度文部科学省科学研究費助成事業への申請及び採択件数の増加のための説明会を9月28日、9月29日の2回開催した。平成29年度の科学研究費を含む外部資金の獲得状況は以下のとおりであった。

○平成29年度科学研究費補助金(新規+継続)

基盤研究(B)	2件
基盤研究(C)	35件
挑戦的萌芽研究	2件
若手研究(B)	20件
研究活動スタート支援	4件
合計	63件
補助金交付額	7,460万円(間接経費2,238万円)
合計	9,698万円

○平成29年度私立大学等経常費補助金(一般補助+特別補助*)

(日本私立学校振興・共済事業団)3億7,558万5千円
(内、1,820万5千円は、私立大学等改革総合支援事業)
*特別補助の内訳
・大学等の国際交流の基盤整備

(海外からの学生の受入れ、学生の海外派遣、教員の海外派遣、大学等の教育研究環境の国際化)

- ・大学院等の機能の高度化(大学院における研究の充実(女性研究者支援)、研究施設運営支援(中央歯学研究所))
- ・授業料減免及び学生の経済的支援体制の充実(卓越した学生に対する授業料減免等(本学特待生制度))
- ・私立大学等改革総合支援事業(タイプ1 教育の質的転換)

○平成29年度学術研究振興資金

(日本私立学校振興・共済事業団)70万円

○難治性疾患実用化研究事業(分担)1件(継続)

(国立研究開発法人日本医療研究開発機構(AMED))

442万円(間接経費44万2千円)合計486万2千円

○労災疾病臨床研究補助金事業(分担)1件(継続)

(厚生労働省)50万円

○平成29年度日本・アジア青少年サイエンス交流事業実施補助金

(国立研究開発法人科学技術振興機構(JST))166万734円

VII. 附属病院の取り組み

本学附属病院では、患者の方々への診療を通じて歯科医学の教育研究を達成するとともに、地域社会に貢献することを目的としている。その達成のために、「病院理念」においては、「患者さんの病に共感し、あたたかい医療を提供する」ことを理念とし、安全・安心な医療に努めること、良質で高度な先進的医療の提供、人権を尊重し、公正な医療を行うこと、人間性豊かな、優れた医療人の育成を基本方針としている。

2017年度も引き続き、地域歯科医療の中核として、地域住民の方々に高度な歯科医療を提供するとともに、学生教育(臨床実習)、研修歯科医師の研修の場として、歯科大学附属病院に与えられた使命を果たす取り組みを行った。

医療機器の更新等については、今年度はX線一般撮影システム、人工透析用水処理装置、傾斜型安全キャビネットの設置を実施した。

天満橋学舎附属病院の建物(設備も含む)については、南館が1960年、西館が1978年、本館が1997年の建設であり、建物の補修、設備の取替を計画的に実施した。

1. 附属病院組織改革委員会の取り組み

2016年4月から、理事会のもとに、法人関係委員会である附属病院組織改革委員会(以下「改革委員会」)を設置し、患者数増加を第一の目標として取り組みを行った。

改革委員会では、検討資料として毎月の来院患者数目標達成状況を確認するとともに、附属病院全診療科長(臨床系講座主任教授、診療科責任者)が出席する病院運営委員会において、上記資料をフィードバックすることにより、診療科主体の経営改善の重要な資料とした。

さらに改革委員会では、

- (1) 全診療科の土曜開院
- (2) 附属病院の診療室再編成(本館・南館2階の診療室の再編)
- (3) 医科歯科連携の推進



(4) 歯科救急外来の設置

(5) スペシャルニーズ部門の新設

(6) 病院事務管理体制の見直し

などの提案がなされ、次年度に向けて鋭意実施に向け取り組んでいくこととなった。

また、附属病院で診療に携わる医員として、「診療系教員」を置くことを決定し、所属については臨床系講座であり、研究歴、科学研究費申請などの処遇については別途規程を定めた。

2. 診療科について

2017年度から新たな診療科として口腔リハビリテーション科を開設した。また、総合診療・診断科を分割し、南館2階診療室を総合診療科、本館2階診療室を口腔診断科とした。

3. 2017年度患者数・医療収入等

2017年度の外来患者数については、25万9,037人であり、一日平均1,054.3人であった（開院日数242日、土曜日49日）。なお土曜日診療は初診・再診を合わせ6,571人、一日平均134.1人であった。同じく、医療収入については、19億8,474万円であった。

4. 歯科医師の派遣、訪問歯科診療

沖縄県、社会福祉法人阪神福祉事業団センター診療所、日本放送協会（大阪放送局）、大阪府済生会泉尾病院へ医員派遣を行った他、訪問歯科診療としては、国家公務員共済組合大手前病院、関西電力病院において実施している。また、関西医科大学天満橋総合クリニックからMRIの特殊検査依頼を受け付けている。

5. 歯科医師臨床研修

2017年度の修了者は97名で、前年度より9名減であり、研修歯科医受入施設数は47施設であった。臨床研修費等補助金は、7,247万7千円であった。下表は、2013年度から2017年度の大学の研修歯科医受入人数の推移である。本学附属病院の受入定員は160名であるため、人件費、労力軽減を考慮し、2018年度は定員削減について検討する余地があると思われる。

▼ 本学研修歯科医受入人数の推移（人）

	2013年度	2014年度	2015年度	2016年度	2017年度
単独型	32	22	18	22	16
複合型	84	68	70	84	81
合計	116	90	88	106	97

6. 附属病院健康セミナーの開催

患者数増加施策の一環として、2017年8月から月1回、本学教員を講師として一般の方々を対象に、歯とお口の健康、さらに全身の健康について、わかりやすく講演する「大阪歯科大学附属病院 健康セミナー」を開始した。この事業は次

年度も継続することとなっている。開催日とテーマは以下のとおりである。

< 2017年 >

8月19日（土）第1回「こどものときからの口腔管理
～小児歯科と矯正歯科との連携の必要性～」

9月22日（金）第2回「口腔リハビリテーションの重要性」

10月20日（金）第3回「睡眠歯科外来

～睡眠時無呼吸症に対する歯科の取り組み～」

11月18日（土）第4回「子どもの受け口」

12月22日（金）第5回「インプラントと上手なお付き合い」

< 2018年 >

1月19日（金）第6回「歯科金属アレルギーのお話

～口の中の金属～」

2月2日（金）第7回「歯周病を治すためには！」

3月2日（金）第8回「口腔癌の早期発見を目指して」

7. 病診連携講演会・懇談会

例年行われている病診連携講演会・懇談会は、2017年度で15回目を迎え、2018年2月24日（土）に開催された。講演テーマは「難治性根尖性歯周炎の診断と治療」であった。本院へは、毎年約2,500の医療機関から患者紹介があり、今年度紹介された新患者数は1万702人であった。

8. 地域医療連携

- ・2017年度も引き続きCT、MRI、コーンビームCT及び病理組織検査を地域の歯科診療所の先生方に利用していただき、地域歯科医療を支援してきた。
- ・「大手前病院・大阪歯科大学附属病院協力医療機関定例連絡協議会」を3カ月に1回開催し、医療連携の維持強化に努めている。
- ・施設基準「感染防止対策加算1」を届出ている大手前病院と連携し、施設基準「感染防止対策加算2」を届出ている。同じ施設基準で大手前病院と連携しているコープ大阪病院と共に、施設基準の要件の1つである年4回の合同カンファレンスを開催するなど、連携して院内感染防止の向上に努めている。
- ・枚方市との連携事業である「健康医療都市ひらかたコンソーシアム」については、「健康医療キャラバン事業」として、8月23日に附属病院総合診療科医員が、大阪府立むらの高等支援学校で、さらに11月9日、16日の両日に枚方市立杉中学校で「歯磨き・口腔ケアに関する講座」を行った。

9. 院内感染対策講習会、医療安全講習会、医療機器安全管理講習会等の開催

2017年度は下記の日程で開催され、多数の教職員が受講した。

・院内感染対策講習会

4月24日「針刺し切創対策について」

6月6日「Clean Hands Safe Hands

～手指衛生がきっとできるようになる秘訣～」

6月23日「標準予防策（Standard Precaution）の重要性～当院における手指衛生徹底への取り組み～」他7回開催

・医療安全講習会

6月22日「反社会的勢力、クレーマー対応」他7回開催
その他、医薬品安全管理講習会（4回）、医療機器安全管理講習会（9回）を開催した。

10. 歯学部附属病院医療事故防止のための相互チェック

2017年12月18日に東京医科歯科大学歯学部附属病院（実施責任校）、日本歯科大学附属病院による相互チェックを受け、特段の指摘もなく終了した。一方、本学の担当者は、2017年12月22日には日本歯科大学附属病院、12月26日には鹿児島大学病院をそれぞれ訪問し、チェックを行った。

11. エコロジーガーデンの導入

2017年4月8日から、地球環境保全と患者様のアメニティの向上のために、企業の協賛を得て院内緑化エコロジーガーデンを導入した。“エコロジーガーデン”はCO₂（二酸化炭素）やVOC（揮発性有機化合物）の吸収に優れ、臭気の除去能力が高く、また、マイナスイオン発生能力にも優れた観葉植物（エコ・プラント）と、活性炭や石灰岩を特殊加工した土壌（エコ土）を用いた室内緑化である。本事業は、次年度以降も継続することとしている。

VIII. 医療保健学部の展開

1. 設置の経緯・趣旨

大阪歯科大学医療保健学部口腔保健学科・口腔工学科は、超高齢社会が必要とする優れた歯科医療人を養成し、口腔の健康を通じて国民が健康で安心して暮らせる社会づくりに貢献することを設置の趣旨とし、アドミッション・ポリシーを策定した。

医療保健学部が求める学生は、「思いやりの心を持ち、人と温かく接して協調性とコミュニケーション能力に優れ、医療と福祉に高い関心と学習意欲を持ち、社会に貢献できる医療人となるための絶え間ない学習と努力ができる者」とする。各学科においてのアドミッション・ポリシーは以下の通りである。

【口腔保健学科】

口腔の健康に寄与するためには、自己管理ができることが必要である。また、多職種連携のためには協調性が重要である。さらに、歯科医療の発展のために独創性がある発想を持つことが必要であり、口腔保健学科として次のような学生を求める。

- ・口腔保健学を学ぶに当たり、十分な基礎学力を有する者
特に「英語」、「数学」、「国語」及び「生物」について高等学校までに履修した、教科書レベルの基礎的な知識を有する者

- ・既存の概念にとらわれず、知識や技術への旺盛な探究心を持ち、向上に取り組む志を持つ者
- ・他者の話を聞き、協調して問題に取り組める者
- ・自己の健康管理ができる者
- ・人の健康の維持と増進に貢献する意欲がある者
- ・口腔の衛生管理に強い関心がある者

【口腔工学科】

口腔の健康に寄与するためには、自己管理ができることが必要である。また、多職種連携のためには協調性が重要である。さらに、口腔装置の製作技術に優れ発展させるためには科学技術への関心と開発への興味が必要であり、口腔工学科として次のような学生を求める。

- ・口腔工学を学ぶに当たり、十分な基礎学力を有する者
特に「外国語（英語）」、「数学」、「国語」、「生物」、「物理」及び「化学」について高等学校までに履修した、教科書レベルの基礎的な知識を有する者
- ・既存の概念にとらわれず、知識や技術への旺盛な探究心を持ち、向上に取り組む志を持つ者
- ・科学技術に関心がある者
- ・他者の話を聞き、協調して問題に取り組める者
- ・自己の健康管理ができる者
- ・人の健康の維持と増進に貢献する意欲がある者

2. 学生の受け入れ

上記のアドミッション・ポリシーに基づいて、2017年度のオープンキャンパスを実施した。

【2017年】

- ・第1回 4月 2日（日）楠葉学舎 53名
- ・第2回 5月14日（日）牧野学舎 64名
- ・第3回 6月18日（日）牧野学舎 65名
- ・第4回 7月23日（日）牧野学舎 136名（入試対策講座開催）
- ・第5回 8月15日（火）天満橋学舎 89名（附属病院見学）
- ・第6回 9月18日（月）牧野学舎 71名（入試対策講座開催）
- ・第7回 10月 9日（月）牧野学舎 36名
- ・第8回 12月10日（日）牧野学舎 36名

【2018年】

- ・第9回 3月18日（日）牧野学舎 91名

以上9回開催し、参加延べ人数は、高校生・保護者を含め延べ641名であった。その他、高校訪問、近畿・中四国を中心に27会場での進学説明会、大阪府・兵庫県を中心に高等学校60校の校内進学ガイダンスに参加した。

高等学校の進路指導教諭への入試説明会を開催し、京阪電車内のポスター広告を実施した。さらに受験情報検索サイトへの入試情報の掲載、広報チラシの近畿圏の1,000校を超える高等学校、大阪府歯科医師会、本学歯科技工士専門学校同窓会会員等への送付など積極的に広報活動を展開した。

そして、2018年度医療保健学部入学試験は、推薦入試、



一般入試(前期・後期)、大学センター試験利用入試、推薦入試、特別入試の区分で実施された。その結果、志願者は、口腔保健学科で106名、口腔工学科で25名であり、うち入学者は、口腔保健学科77名、口腔工学科17名であった。

3. 学修への取り組み

医療保健学部では、前記のアドミッション・ポリシーの他、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーを定め、様々な課題解決のため精力的に取り組んだ。

基礎科目として、「キャリア教育」「教養教育」「情報教育」「語学教育」、専門基礎科目として、「基礎系口腔科学」「社会系口腔科学」、専門科目として「臨床系専門科目」「総合医学教育」「臨床教育」「総括教育」の125単位が4年間の要卒単位数である。

歯学部と同様に、ODU ソーシャルコミュニティを開設しており、第1学年次学生と教職員が牧野駅周辺の清掃活動及び地域住民の方々へ朝の挨拶を行った。また、本学附属病院での早期臨床体験学習は、卒業後の歯科技工士、歯科衛生士としての役割の一つである多職種連携へのモチベーションを高めるために大いに役立った。

医療保健学部のもう一つの特色である社会福祉士コースは、第1学年次の希望者が受講し、国家試験受験資格を得るため学修に励んでいるところである。

全学生へのタブレットPCの貸与を生かし、学修支援ポータルサイト「A-portal」による最新の授業時間割、試験関係のお知らせの配信、授業用SNS「melly」を使ったタイムラインによる科目担当教員からの注意事項や、学生からの質問受付、課題提出が容易に行えるシステムを計画した。

学生生活の指導体制として学科・学年別に「指導教授」と「助言教員」が置かれ、学生の学習状況に応じたアドバイスや指導を行った。また、学生支援室を置き、学業だけでなく生活面、健康面など学生生活全般にわたったきめ細かな支援を行った。

オフィスアワーを設けて、学生からの授業に関する質問を受付ける体制を整備した。また、学生が快適に学習できるように、学生ホール、コンピュータ演習室、図書館牧野分室に自習スペースを設けた。

就職、進学に関する支援を行うキャリアセンターを設置し、専任教職員が対応できる体制を整えた。

4. 大学院医療保健学研究科の設置について

医療保健学部を基礎とする大学院医療保健学研究科(修士課程:2年)が2017年8月に設置認可となった。同研究科は、高度な専門的知識と技能を持つとともに歯科医療の変革に応じられる歯科医療人、並びに歯科衛生士や歯科技工士の専門性を生かした研究を通じて歯科医療の発展に貢献できる人材を養成して歯科医療の発展と人々の健康の増進に寄与することを目的としている。

2017年9月17日、10月9日の両日には、同研究科説明会を牧野学舎にて開催した。2018年度入試は、一般一次

を12月に、同二次を2018年1月に、同三次を3月に実施し、定員10名を超える14名の大学院1期生を確保した。

IX. 歯科技工士専門学校、歯科衛生士専門学校

歯科技工士専門学校は、特色ある歯科医療専門職教育を行い、2017年度国家試験の合格率は90%であった。また今期の歯科技工士学科及び専攻科の卒業生の就職状況は、希望者全員が歯科医院、歯科技工所への就職が決まった。また1名の進学者もあった。

同校の沿革を簡単に示すと、1964年4月大阪歯科大学付属歯科技工士養成所として開設され、その後、1967年3月同大学付属歯科技工士学校、ついで1976年4月大阪歯科大学歯科技工士専門学校に改称となり、特色あるカリキュラムにより優秀な医療人の育成を続けた。2017年4月医療保健学部口腔工学科への改組転換により、2018年3月31日をもってその54年の歴史に幕を閉じた。

歯科衛生士専門学校は、特色ある歯科医療専門職教育を行い、2017年度国家試験の合格率は100%であった。今期の求人数は945件であり、卒業生は、全員が歯科医院、本学附属病院、総合病院、歯科関係企業への就職が決まった。

X. 法人・大学の管理運営

本学は、前年度に引き続き、限られた収入の中から教育・研究・診療の各活動の活性化に努めるとともに、人材育成、施設設備の整備、業務改善を進めた。

- ・医療保健学部の設置認可に伴い、基本規程である寄附行為、大学学則、大学院学則の改正、各種委員会規程の施行と改正、事務組織の改正(医療保健学部事務室の設置)を行った。
- ・大学ホームページを充実させ、本学の特色について広報活動を活発に行なった。大学公式フェイスブック及びLINE@を更新し、ステークホルダーのニーズを的確に把握するように努めている。
- ・環境省が推進しているスーパークールビズ、ウォームビズを本学理事会決定で実施し、夏季及び冬季の省エネルギー意識の高揚に努めた。
- ・2017年度より楠葉学舎での諸会議のペーパーレス化を行う契機として、iPad ペーパーレス会議システムを導入した。
- ・人材育成について、職員のSDが大学設置基準で義務化されたことを受けて「大阪歯科大学SD実施方針」を定め、2017年には、「情報セキュリティおよび個人情報保護」(FDセミナーと合同開催)「学校の役割と高等教育業界の現状と今後」「大学職員の役割」のSDを行った。そして年度の締めくくりにSDとして「事務職員意見交換会」により各部署の業務の現状と課題等をグループ討議により深めた。
- ・教職員に対する人権意識向上の一環としての「人権講演会」は、本学人権教育室教員により「大学教育における障害学生の支援の動向」と題して開催し、多数の教職員の出席を得た。

[附属資料]

1. 2017 年度学生数 (2017 年 5 月 1 日現在) () は女子

歯学部	第 1 学年	1 3 1 (6 7)	大学院	第 1 学年	3 5 (1 2)
	第 2 学年	1 3 7 (6 1)		第 2 学年	3 0 (6)
	第 3 学年	1 3 7 (6 0)		第 3 学年	2 3 (6)
	第 4 学年	1 4 3 (7 0)		第 4 学年	1 7 (4)
	第 5 学年	1 4 8 (5 1)			1 0 5 (2 8)
	第 6 学年	1 3 4 (6 2)			
		8 3 0 (3 7 1)			

医療保健学部 第 1 学年 口腔保健学科 4 8 (4 8) 口腔工学科 1 0 (2)

歯科技工士専門学校 2 年 1 0 (4) 専攻科 2 年 1 (0)

歯科衛生士専門学校 2 年 4 2 (4 2)
3 年 4 3 (4 3)
8 5 (8 5)

2. 第 111 回歯科医師国家試験の結果 2018 年 3 月 19 日合格発表

	(総 数)			(新 卒)			(既 卒)		
	受験者数	合格者数	合格率%	受験者数	合格者数	合格率%	受験者数	合格者数	合格率%
本学	184	115	62.5	90	74	82.2	94	41	43.6
全国	3,159	2,039	64.5	1,932	1,505	77.9	1,227	534	43.5

3. 2018 年度入学試験状況

学部・研究科	選抜区分	志願者数	合格者数	入学者数
歯学部	推薦	6 6	4 4	1 2 8
	一般前期	3 0 4	6 0	
	一般後期	1 0 2	6	
	センター前期	1 0 4	3	
	センター後期	2 3	3	
	プラス 1 前期	8 6	7	
	プラス 1 後期	2 0	2	
	外国人留学生	3	3	
	編入前期	3	2	
	編入後期	3	0	2

1

学部・研究科	選抜区分	志願者数	合格者数	入学者数
口腔保健学科	推薦 A	3 8	3 8	7 7
	推薦 B	8	6	
	推薦	2 0	2 0	
	一般前期	1 9	1 4	
	一般後期	8	6	
	センター前期	8	7	
	センター後期	3	3	
	社会人特別	0	0	
	帰国生特別	0	0	
	外国人特別	2	2	
口腔工学科	推薦 A	6	6	1 7
	推薦 B	1	1	
	推薦	3	3	
	一般前期	7	4	
	一般後期	3	3	
	センター前期	3	3	
	センター後期	0	0	
	社会人特別	0	0	
	帰国生特別	0	0	
	外国人特別	2	2	
歯学研究科	一般一次	5	4	2 8
	一般二次	1 3	9	
	一般三次	3	3	
	社会人特別一次	3	3	
	社会人特別二次	2	2	
	外国人留学生特別選抜	8	8	
医療保健学研究科	一般一次	5	4	1 4
	一般二次	7	7	
	一般三次	3	3	

4. 医療保健学部開設 2017 年 4 月 1 日

5. 2016 年度会計実査 2017 年 4 月 4 日 (火)

6. 大学歯学部・大学院入学式 2017 年 4 月 5 日 (水) 午前 10 時 (於：楠葉学舎)

2

7. 大学医療保健学部入学式 2017 年 4 月 11 日 (火) 午前 10 時 (於：楠葉学舎)

8. 新入生研修

- ・歯学部 2017 年 4 月 5 日、6 日、7 日 (於：楠葉学舎)
- ・医療保健学部 2017 年 4 月 12 日 (水) 午前 9 時 (於：牧野学舎)

9. 2017 年度 F D セミナー (本文参照)

10. 歯学部第 1 学年薬物乱用防止講演会

2017 年 5 月 10 日 (水) 午前 9 時 (於：楠葉学舎)

11. 2016 年度監事監査 2017 年 5 月 15 日、16 日 (於：楠葉学舎)

12. 解剖体慰霊祭 2017 年 5 月 26 日 (金) 午後 1 時 (於：四天王寺)

13. 歯学部父兄会・共済会総会 (於：楠葉学舎)
2017 年 6 月 24 日 (土) 午後 1 時 父兄出席者数 279 名

14. オープンキャンパス

- 歯学部オープンキャンパス (於：楠葉学舎, 第 2 回のみ天満橋学舎)
 - ・第 1 回 2017 年 7 月 17 日 (月) 158 名参加 (うち, 高校生等 75 名)
 - ・第 2 回 2017 年 8 月 10 日 (木) 87 名参加 (うち, 高校生等 48 名)
 - ・第 3 回 2017 年 8 月 20 日 (日) 103 名参加 (うち, 高校生等 66 名)
 - ・第 4 回 2017 年 9 月 18 日 (月) 129 名参加 (うち, 高校生等 64 名)
- 医療保健学部オープンキャンパス (本文参照)

15. 第 49 回全日本歯科学学生総合体育大会 (当番校: 愛知学院大学歯学部)
2017 年 8 月 1 日 (火) ~ 8 月 10 日 (木) 本学は総合第 4 位

16. 2017 年度人権講演会

2017 年 8 月 30 日 (於：100 周年記念館)
テーマ「大学教育における障害学生支援の動向」講師: 人権教育室 李 嘉永講師

17. 第 25 回公開講座 (本文参照)

18. 第 6 学年父兄会 2017 年 10 月 1 日 (日) 午後 2 時 (於：100 周年記念館)

3

19. 2017 年度地方父兄会 (山陽地区: 岡山県、広島県、山口県)
2017 年 10 月 8 日 (日) 保護者 15 名出席 (於：広島ガーデンパレス)

20. 解剖体遺骨返還式 2017 年 10 月 16 日 (火) 午後 2 時 (於：楠葉学舎)

21. 2017 年度大学祭 (テーマ: power of smile)

- ・体育祭 2017 年 10 月 21 日 (土) (於：牧野学舎)
- ・文化祭 2017 年 10 月 28 日 (土)、29 日 (日) (於：楠葉学舎)

22. 実験動物慰霊祭 2017 年 11 月 17 日 (金) 12 時 35 分 (於：楠葉学舎講堂)

23. 2017 年度防災・防火訓練 楠葉学舎 2017 年 12 月 11 日 (月)
牧野学舎 2017 年 12 月 1 日 (金)
天満橋学舎 2017 年 12 月 15 日 (金)

24. 平成 29 年度臨床能力試験トライアル

- ・一斉技能試験 2017 年 12 月 20 日 (医療系大学間共用試験実施評価機構視察者等来学)
- ・臨床実地試験 2017 年 12 月 21 日

25. 2017 年全学教職員忘年慰労会 2017 年 12 月 28 日 (於：天満橋学舎)

26. 2018 年新年互礼会 2018 年 1 月 5 日 (於：楠葉学舎)

27. 教授退職記念講演会 (於：100 周年記念館)
2018 年 2 月 25 日 (日) (於：100 周年記念館)
大浦清主任教授 (13: 10 ~), 西川泰央主任教授 (13: 55 ~)
森田章介主任教授 (14: 40 ~), 大久保直主任教授 (15: 25 ~)

28. 2017 年度共用試験歯学系 CBT 並びに OSCE
・CBT 2018 年 2 月 27 日 (火) 午前 9 時 30 分 (於：楠葉学舎)
・OSCE 2018 年 3 月 18 日 (日) 午前 9 時 (於：天満橋学舎)

29. 2017 年度卒業式並びに大学院学位認証式
2018 年 3 月 9 日 (金) 午前 10 時 (於：楠葉学舎)

30. 2017 年度歯科医師臨床研修修了証授与式
2018 年 3 月 27 日 (火) 午後 2 時 30 分 (於：天満橋学舎)

4



31. 大阪歯科大学三つのポリシー改正

32. 口腔リハビリテーション科開設並びに診療系教員職の新設

33. 大学院医療保健学研究科設置認可（平成 29 年 8 月 29 日付）
・口腔科学専攻（修士課程）、修業年限 2 年、授与する学位：修士（口腔科学）
・2018 年 4 月 1 日牧野学舎に開設、入学定員 10 名、収容定員 20 名

34. 歯学部特待生の採用
2 年から 6 年の各学年 3 名、計 15 名に対し授業料 100 万円免除

35. 大学学内奨学生選考
3 名の学生に対して総額 2,150,000 円の奨学金を貸与

36. 2018 年度研修歯科医の募集定員
単独研修方式 20 名、複合研修方式 120 名

37. 学位授与
学位記番号 甲第 813 号～ 832 号 20 名に学位記授与
学位記番号 乙第 1607 号～1610 号 4 名に学位記授与

38. 歯学部教員が優秀発表賞等受賞
・小児歯科学講座 篠永ゆかり講師 / 第 55 回日本小児歯科学会大会優秀発表賞、SHOFU AWARD
・小児歯科学講座 河合咲希助教 / 第 55 回日本小児歯科学会大会優秀発表賞
・薬理学講座 河合まりこ講師 / 第 37 回日本歯科薬物療法学会学術大会優秀発表賞

39. 2017 年度法人理事会・法人評議員会・歯学部主任教授会・歯学部教授会・医療保健学部教授会・歯学研究科会議・医療保健学研究科会議

- 1) 法人理事会 16 回開催
(2017 年 4 月 27 日、5 月 25 日(2 回)、6 月 30 日、7 月 27 日、8 月 24 日、9 月 28 日、10 月 26 日、11 月 30 日、12 月 28 日、2018 年 1 月 25 日、2 月 15 日(2 回)、2 月 22 日、3 月 22 日(2 回))
- 2) 法人評議員会 3 回開催
(2017 年 5 月 25 日、2018 年 2 月 15 日、3 月 22 日)
- 3) 歯学部主任教授会 28 回開催
(2017 年 4 月 12 日、4 月 26 日、5 月 10 日、6 月 14 日、7 月 14 日、7 月 19 日、

5

8 月 9 日、8 月 23 日、9 月 6 日、9 月 13 日、10 月 11 日、10 月 19 日、11 月 8 日、11 月 24 日、11 月 30 日、12 月 6 日、12 月 13 日、2018 年 1 月 10 日、1 月 17 日、1 月 26 日、2 月 1 日、2 月 7 日、2 月 14 日、2 月 23 日、3 月 2 日、3 月 8 日、3 月 14 日、3 月 29 日)

- 4) 歯学部教授会 2 回開催
(2017 年 4 月 12 日、2018 年 3 月 29 日)
- 5) 医療保健学部教授会 18 回開催
(2017 年 4 月 4 日、4 月 19 日、5 月 17 日、6 月 21 日、7 月 19 日、8 月 16 日、9 月 20 日、10 月 18 日、11 月 2 日、11 月 15 日、12 月 1 日、12 月 20 日、2018 年 1 月 17 日、2 月 2 日、2 月 21 日、3 月 9 日、3 月 20 日、3 月 29 日)
- 6) 歯学研究科会議 16 回開催
(2017 年 4 月 26 日、5 月 24 日、6 月 28 日、7 月 26 日、8 月 23 日、9 月 27 日、10 月 11 日、10 月 25 日、11 月 22 日、12 月 27 日、2018 年 1 月 24 日、2 月 14 日、2 月 23 日、3 月 2 日、3 月 14 日、3 月 29 日)
- 7) 医療保健学研究科会議 11 回開催
(2017 年 9 月 20 日、10 月 18 日、11 月 10 日、11 月 15 日、12 月 8 日、12 月 20 日、2018 年 1 月 17 日、2 月 9 日、2 月 21 日、3 月 7 日、3 月 20 日)

40. 本学関係 叙勲の受章者
大学 14 回 和田 勝 広島県 旭日双光章 共 12 名

41. 教職員数（2017 年 5 月 1 日現在：365 名）

- 1) 大学 354 名
教員数 191 名
学長 1 名
歯学部 152 名
主任教授 24 名、専任教授 4 名、准教授 24 名、講師 50 名、助教 50 名
医療保健学部 15 名
教授 7 名、准教授 3 名、講師 2 名、助教 3 名
附属病院 23 名
病院教授 1 名、准教授 4 名、講師 9 名、助教 9 名
職員数 163 名
事務・技術 7 名、医療 8 5 名、労務 1 名
- 2) 歯科技工士専門学校 5 名
教員 3 名、事務 2 名
- 3) 歯科衛生士専門学校 6 名
教員 5 名、事務 1 名

6

42. 人事

1. 法人関係
 - 1) 任期満了に伴う理事退任 田中 昭男 共 3 名（2018 年 3 月 31 日付）
 - 2) 評議員就任 辻林 徹
 - 3) 任期満了に伴う評議員退任 大浦 清 共 38 名（2018 年 3 月 31 日付）
2. 名誉教授称号授与 佐ノ木幸夫 共 3 名
3. 退職
 - 1) 定年退職 生理学講座 主任教授 西川 泰央 共 10 名
 - 2) 依願退職 歯科保存学講座 助教 恩田 康平 共 19 名
 - 3) 任期制教員任期満了退職 耳鼻咽喉科 准教授 馬場 一泰 共 4 名
 - 4) 再雇用契約満了退職 中央歯学研究科 研究技術職員 堀 英明 共 3 名
4. 昇任
 - 1) 歯学部准教授 口腔治療学講座 講師 至田 宗泰 共 2 名
 - 2) 歯学部講師 欠損歯列補綴咬合学講座 助教 小正 聡
 - 3) 職員 設置事務室 課長 辻 知幸 共 5 名
5. 任用
 - 1) 定年延長に伴う歯学部主任教授 病理学室 田中 昭男
 - 2) 歯学部主任教授 口腔病理学講座 博士（歯学） 富永 和也 共 2 名
 - 3) 歯学部専任教授 中央歯学研究科 博士（歯学） 橋本 正則 共 2 名
 - 4) 医療保健学部教授 口腔保健学科 歯学博士 小正 裕 共 7 名
 - 5) 医療保健学部准教授 口腔保健学科 博士（歯学） 神 光一郎 共 3 名
 - 6) 歯学部講師 高齢者歯科学講座 博士（歯学） 川本 章代
 - 7) 医療保健学部講師 口腔保健学科 修士（福祉社会学） 久保 樹里 共 2 名
 - 8) 歯学部助教 英語教室 修士（文学） 岡 隼人 共 8 名
 - 9) 医療保健学部助教 口腔保健学科 修士（教育学） 前嶋 亜優子 共 3 名
 - 10) 診療系講師 口腔リハビリテーション科 博士（歯学） 島田 明子
 - 11) 診療系助教 保存修復科 博士（歯学） 横田 啓太 共 6 名
 - 12) 大学院教員
 - 大学院教授 高橋 一也 共 2 名、大学院准教授 西浦 亜紀
 - 大学院講師 河合 まりこ、大学院助教 嘉藤 弘仁 共 2 名
 - 13) 大学事務局長 児玉 孝
 - 14) 看護師 附属病院 島本 真有 共 4 名
 - 15) 任期付職員の専任職員登用 設置事務室 課長補佐 辻 知幸 共 11 名
 - 16) 任期付職員新規採用 総務課 事務職員 清原 春香 共 15 名
6. 歯学部任期制教員任期更新 歯科保存学講座 助教 保尾 謙三 共 6 名
7. リサーチ・アシスタント採用 口腔インプラント学 1 年 黄 安祺 共 3 名
8. 診療系助教異動 高齢者歯科 助教 井上 太郎

7

9. 所属異動 歯科医学教育開発室 専任教授 王 宝禮 共 5 名
10. 兼務 病院事務部 事務部長 田中 武昌 共 4 名
11. 兼務解除 障がい歯科 科長 中嶋 正博
12. 在籍出向
総合診療科 講師 谷岡 歌郁 (出向先: 独立行政法人医薬品医療機器総合機構)
13. 定年延長 施設課 課長 田中 修 共 2 名
14. 定年退職後再雇用 中央歯学研究科事務室 事務職員 村上 よし子 共 3 名
15. 定年退職後再々雇用 中央歯学研究科 技術職員 堀 英明 共 2 名
16. 委嘱

- 1) 大学役職者

歯学部長	田中 昭男
医療保健学部長	小正 裕
図書館長	大浦 清
附属病院副院長	田中 武昌
口腔保健学科長	和唐 雅博
口腔工学科長	柿本 和俊
- 2) 医療保健学部キャリアセンター長 中塚 美智子
- 3) 歯学部特任教授 歯科医学教育開発室 塚本 秀範 共 2 名
- 4) 客員教授 厚生労働省近畿厚生局 局長 丸山 浩 共 10 名
- 5) 医療保健学部客員教授 歯科東洋医学室 特任教授 方 一知
- 6) 客員准教授 大阪歯科大学 元准教授 好川 正孝
- 7) 客員講師 大阪歯科大学 元講師 小川 文也
- 8) Visiting Professor
韓国慶熙大学校歯科大学 主任教授 Young-Guk Park 共 9 名
- 9) 2017 年度歯学部講師（非常勤）解剖学講座 清水 孝治 共 382 名
2017 年度医療保健学部講師（非常勤）荒井 昌海 共 35 名
(2017 年 4 月 1 日付)
- 10) 臨床教授 臨床研修教育科 前田 照太 共 3 名
- 11) 医員 18 名
- 12) 病院医員 65 名
- 13) ティーチング・アシスタント 病理学 2 年 竹内 友規 共 18 名
- 14) ポストドクトラルフェロー 欠損歯列補綴咬合学 蘇 英敏
- 15) 学生相談室カウンセラー 臨床心理士 辻野 達也 共 3 名
- 16) 医務室嘱託医師 大阪大学医学部 講師（医師）木田 博 共 2 名
- 17) 予算委員会委員長 下村鏡三郎
- 18) 学年指導教授
1 年・2 年 藤原 眞一、王 宝禮 3 年・4 年 三宅 達郎、今井 弘一

8

5年・6年 前田 博史、梅田 誠
19) 2017 年度学友会会長 主任教授 松本 尚之

43. 学外活動

- 1) 教授海外視察 歯周病学講座 主任教授 梅田 誠
- 2) 教員海外研修 化学教室 講師 牧田 佳真
- 3) 教員海外出張 薬理学講座 講師 河井 まりこ 共 32 件
- 4) 共同研究員受入 山西医科大学口腔医学院 研究員 王丹 共 7 名
- 5) 国際交流
 - (1) 海外協定校との交流 (本文参照)
 - (2) コロンビア大学から感謝状授与 (6 月 26 日)

44. 補助金・助成金

- 1) 2017 年度大阪歯科大学学術研究奨励助成金交付 (12 件) 2, 00, 000 円
- 2) 2017 年度大阪歯科大学学術研究奨励資金 2, 200, 000 円
・研究課題「安全性の高い iPS 細胞由来間葉系幹細胞調達方法の探索」
(内 700, 000 円は、日本私立学校振興・共済事業団より平成 29 年度学術研究振興資金として交付)
- 3) 平成 29 年度科学研究費補助金交付 (文部科学省) (本文参照)
- 4) 平成 29 年度私立大学等経常費補助金交付額 375, 585, 000 円
(内 18, 205, 000 円は私立大学等改革総合支援事業)
- 5) 平成 29 年度臨床研修費等補助金交付額 72, 477, 000 円
- 6) 国際交流助成
薬理学講座 講師 河井まりこ 共 10 件に対し 1, 937, 900 円の助成
- 7) 寄贈
中村 宏 氏 (本学附属病院患者様) から、病院経費への充当を目的として 500, 000 円 共 6 件

45. 諸規程

- 1) 大阪歯科大学の諸規則の制定等に関する規則
- 2) 大阪歯科大学学則 (一部改正)
- 3) 学校法人大阪歯科大学管理運営規則 (一部改正)
- 4) 大阪歯科大学教員任用規程 (一部改正)
- 5) 学校法人大阪歯科大学教員の定員等に関する規程 (一部改正)
- 6) 学校法人大阪歯科大学教員の定員等に関する規程改正に伴う任期付教員の再任用に関する申し合わせ (一部改正)
- 7) 学校法人大阪歯科大学教員の任期に関する規程 (一部改正)

9

- 8) 大阪歯科大学教員選考規程 (一部改正)
- 9) 教員候補者資格審査に関する申し合わせ (一部改正)
- 10) 大阪歯科大学診療系教員選考規程 (施行)
- 11) 診療系教員に関する申し合わせ (施行)
- 12) 大阪歯科大学歯学部教授会・主任教授会規程 (一部改正)
- 13) 大阪歯科大学学費等納付金規程 (一部改正)
- 14) 楠葉学舎施設使用規程 (一部改正)
- 15) 大阪歯科大学医療保健学部教授会規程 (施行)
- 16) 大阪歯科大学医療保健学部入試委員会規程 (施行)
- 17) 大阪歯科大学医療保健学部教務部委員会規程 (施行)
- 18) 大阪歯科大学医療保健学部学生部委員会規程 (施行)
- 19) 大阪歯科大学医療保健学部カリキュラム委員会規程 (施行)
- 20) 大阪歯科大学医療保健学部キャリア支援委員会規程 (施行)
- 21) 大阪歯科大学医療保健学部生涯学習委員会規程 (施行)
- 22) 大阪歯科大学医療保健学部履修規程 (施行)
- 23) 大阪歯科大学医療保健学部社会福祉士コースに関する細則 (施行)
- 24) 大阪歯科大学の諸規則の制定等に関する規則 (施行)
- 25) 学校法人大阪歯科大学嘱託規程 (一部改正)
- 26) 学校法人大阪歯科大学給与規程 (一部改正)
- 27) 学校法人大阪歯科大学教育職嘱託給与規程 (施行)
- 28) 学校法人大阪歯科大学事務組織及び事務分掌規程 (一部改正)
- 29) 学校法人大阪歯科大学事務組織表 (一部改正)
- 30) 学校法人大阪歯科大学経理規程 (一部改正)
- 31) 学校法人大阪歯科大学予算執行規程 (一部改正)
- 32) 大阪歯科大学奨学金貸与規程 (一部改正)
- 33) 助言教員・特別アドバイザーに関する申し合わせ (一部改正)
- 34) 研修歯科衛生士 (非常勤) 規程 (施行)
- 35) 大阪歯科大学附属病院中央滅菌材料室運営委員会規程 (一部改正)
- 36) 材料薬品等管理運営委員会規程 (一部改正)
- 37) 院内感染防止委員会規程 (一部改正)
- 38) 大阪歯科大学歯科技工士専門学校学則 (一部改正)
- 39) 大阪歯科大学歯科衛生士専門学校学則 (一部改正)

(以上、2017 年 4 月 1 日付)

- 40) 大阪歯科大学ホームページの運用・管理規則 (一部改正)

(2017 年 4 月 27 日付)

- 41) 教員の兼務、出張及び研修に関する内規 (一部改正)

(2017 年 5 月 25 日付、2018 年 4 月 1 日より適用)

10

- 42) 大阪歯科大学附属病院規程 (一部改正)
- 43) 大阪歯科大学附属病院運営委員会規程 (一部改正)
(以上 2017 年 5 月 25 日付)
- 44) 学校法人大阪歯科大学個人情報保護委員会規程 (施行)
- 45) 学校法人大阪歯科大学個人情報取扱規程 (施行)
- 46) 学校法人大阪歯科大学個人データの取扱いに関する細則 (施行)
(以上 2017 年 5 月 30 日付)
- 47) 学校法人大阪歯科大学旅費規程 (一部改正)
- 48) 公印規程 (一部改正)
(以上 2017 年 6 月 30 日付)
- 49) 大阪歯科大学学費等納付金規程 (一部改正)
- 50) 大阪歯科大学附属病院リスクマネージャ部会規程 (施行)
(以上 2017 年 7 月 27 日付)
- 51) 大阪歯科大学附属病院医療安全管理委員会規程 (一部改正)
(2017 年 8 月 24 日付)
- 52) 学校法人大阪歯科大学寄附行為 (一部改正)
(平成 29 年 8 月 29 日付、平成 30 年 3 月 28 日付)
- 53) 病棟管理運営委員会規程 (一部改正)
- 54) 医療事故調査に関する規程 (施行)
- 55) 院内診療情報管理運営委員会規程 (一部改正)
(以上 2017 年 9 月 28 日付)
- 56) 学校法人大阪歯科大学給与規程 (一部改正)
(2017 年 10 月 26 日付、2018 年 4 月 1 日より適用)
- 57) 昇給・降給に関する取扱細則 (一部改正)
- 58) 昇格・降格に関する取扱細則 (一部改正)
(以上 2017 年 10 月 26 日付)
- 59) 任期制教員の再任用基準に関する申し合わせ (一部改正)
(2017 年 11 月 30 日付)
- 60) 学校法人大阪歯科大学教員の定員等に関する規程 (一部改正)
(2017 年 12 月 28 日付、2018 年 1 月 25 日付)
- 61) 大阪歯科大学診療系教員選考規程 (一部改正)
- 62) 診療系教員に関する申し合わせ (一部改正)
- 63) 学校法人大阪歯科大学特任教授規程 (一部改正)
- 64) 大阪歯科大学客員教員規程 (一部改正)
(以上 2018 年 1 月 25 日付)
- 65) 大阪歯科大学歯学部学業成績評価に関する規程 (一部改正)
- 66) 大阪歯科大学歯学部教授候補者選考委員会規程 (一部改正)

11

- 67) 大阪歯科大学臨床准教授等の称号の付与に関する規則 (一部改正)
(以上 2018 年 2 月 22 日付)
- 68) 学校法人大阪歯科大学講師 (非常勤) 就業規則 (施行)
- 69) 学生の通学が困難となる事由が発生した場合の授業等の取扱い規程 (一部改正)
- 70) 臨床実習連絡委員会規程 (一部改正)
- 71) 学校法人大阪歯科大学臨床研究利益相反管理規程 (一部改正)
- 72) 大阪歯科大学附属病院病院情報システム管理運用規程 (一部改正)
- 73) 大阪歯科大学転学科の取扱いに関する規程 (施行)
- 74) 大阪歯科大学大学院医療保健学研究科大学院委員会規程 (施行)
(以上 2018 年 3 月 22 日付)

※ そのほか、医療保健学部設置に伴い委員会規程等を改正した (2017 年 4 月 1 日付)。

12



平成29年度

決算報告

平成29年度決算は、平成30年5月24日に開催された法人理事会で承認され、同日に開催された第163回評議員会に報告されました。

平成29年度決算における「資金収支計算書」「活動区分資金収支計算書」「事業活動収支計算書」「貸借対照表」の概要は次のとおりです。

1. 資金収支計算書

「資金収支計算書」の目的は、当該会計年度中のすべての収入と支出に係る内容と資金の顛末を明示することにあります。

平成29年度は、収入の部で「学生生徒等納付金収入」が予算を下回り、支出の部で「その他の支出」が予算を大幅に上回ったため、「翌年度繰越支払資金」は、予算を下回る30億3,158万円となりました。

平成29年度 資金収支計算書 (平成29年4月1日から平成30年3月31日まで)			
収入の部		(単位：円)	
科 目	予 算	決 算	差 異
学生生徒等納付金収入	4,728,590,000	4,484,385,000	244,205,000
手数料収入	31,787,000	36,122,800	△ 4,335,800
寄付金収入	41,670,000	49,942,000	△ 8,272,000
補助金収入	438,240,000	451,099,133	△ 12,859,133
資産売却収入	0	3,429	△ 3,429
付随事業・収益事業収入	2,039,586,000	2,053,841,189	△ 14,255,189
受取利息・配当金収入	113,829,000	118,241,693	△ 4,412,693
雑収入	373,272,000	387,971,911	△ 14,699,911
借入金等収入	0	0	0
前受金収入	492,300,000	488,702,500	3,597,500
その他の収入	1,248,127,000	1,273,124,878	△ 24,997,878
資金収入調整勘定	△ 1,027,671,000	△ 1,005,780,595	△ 21,890,405
小計	8,479,730,000	8,337,653,938	142,076,062
前年度繰越支払資金	3,402,131,542	3,402,131,542	
収入の部合計	11,881,861,542	11,739,785,480	142,076,062

支出の部			
(単位：円)			
科 目	予 算	決 算	差 異
人件費支出	4,358,151,000	4,357,897,347	253,653
教育研究経費支出	2,219,186,776	2,126,079,370	93,107,406
管理経費支出	459,977,800	443,728,336	16,249,464
借入金等利息支出	0	0	0
借入金等返済支出	0	0	0
施設関係支出	115,776,000	92,102,384	23,673,616
設備関係支出	358,749,968	278,475,046	80,274,922
資産運用支出	955,199,000	1,046,494,583	△ 91,295,583
その他の支出	272,770,000	764,520,707	△ 491,750,707
「予備費」	(88,579,544)		111,420,456
資金支出調整勘定	△ 253,780,000	△ 401,096,743	147,316,743
小計	8,597,451,000	8,708,201,030	△ 110,750,030
翌年度繰越支払資金	3,284,410,542	3,031,584,450	252,826,092
支出の部合計	11,881,861,542	11,739,785,480	142,076,062

2. 活動区分資金収支計算書

「活動区分資金収支計算書」は現金預金の流れを3つの活動区分（「教育活動」「施設整備等活動」「その他の活動」）ごとに把握するものです。

平成29年度 活動区分資金収支計算書 (平成29年4月1日から平成30年3月31日まで)		
(単位：円)		
教育活動による資金収支	科 目	
	金 額	
	収入	学生生徒等納付金収入
		4,484,385,000
		手数料収入
		36,122,800
		特別寄付金収入
		47,942,000
		一般寄付金収入
		2,000,000
	支出	経常費等補助金収入
		451,099,133
		付随事業収入
		69,098,898
		医療収入
		1,984,742,291
		雑収入
		387,971,911
施設整備等資金収支	教育活動資金収入計	
	7,463,362,033	
	支出	人件費支出
		4,357,897,347
		教育研究経費支出
		1,698,710,091
		医療経費支出
		427,369,279
		管理経費支出
		443,728,336
	差 引	教育活動資金支出計
		6,927,705,053
		調整勘定等
		84,432,297
		教育活動資金収支差額
		620,089,277
	施設整備等活動資金収入計	
	0	
その他の活動による資金収支	施設整備等活動資金支出計	
	598,470,206	
	差 引	調整勘定等
		△ 363,928,175
		施設整備等活動資金収支差額
		△ 962,398,381
	小計（教育活動資金収支差額＋施設整備等活動資金収支差額）	
	△ 342,309,104	

平成29年度 活動区分資金収支計算書 (平成29年4月1日から平成30年3月31日まで)		
(単位：円)		
その他の活動による資金収支	科 目	
	金 額	
	収入	有価証券売却収入
		3,429
		退職金引当特定資産取崩収入
		623,934,601
		貸付金回収収入
		47,004,955
		預り金受入収入
		3,757,823
	支出	小 計
		674,700,808
		受取利息・配当金収入
		118,241,693
		その他の活動資金収入計
		792,942,501
	差 引	退職金引当特定資産繰入支出
		803,336,070
		有価証券購入資金引当特定資産繰入支出
		5,265,639
		記念行事資金引当特定資産繰入支出
		10,000,098
		貸付金支払支出
		2,150,000
施設整備等資金収支	小 計	仮払金支払支出
		110,000
		小 計
		820,861,807
	差 引	その他の活動資金支出計
		820,861,807
		調整勘定等
		△ 27,919,306
		施設整備等活動資金収支差額
		△ 28,237,988
	支払資金の増減額（小計＋その他の活動資金収支差額）	
	△ 370,547,092	
前年度繰越支払資金	3,402,131,542	
	3,031,584,450	

3. 事業活動収支計算書

「事業活動収支計算書」の目的は、学校法人の経営状況を表し、当該会計年度における事業活動収支の均衡状況とその内容を明らかにすることにあります。

平成29年度の「基本金組入前当年度収支差額」は、8,845万円の収入超過となり、6期連続で収入超過を維持することができました。

平成29年度 事業活動収支計算書 (平成29年4月1日から平成30年3月31日まで)					
(単位：円)					
教育活動 収支	取 入 業 の 活 動 部 動	科 目	予 算	決 算	差 異
		学生生徒等納付金	4,728,590,000	4,484,385,000	244,205,000
		手数料	31,787,000	36,122,800	△ 4,335,800
		寄付金	41,670,000	50,616,762	△ 8,946,762
		経常費等補助金	438,240,000	451,099,133	△ 12,859,133
		付随事業収入	2,039,586,000	2,053,841,189	△ 14,255,189
	支 出 業 の 活 動 部 動	雑収入	373,272,000	392,331,487	△ 19,059,487
		教育活動収入計	7,653,145,000	7,468,396,371	184,748,629
		科 目	予 算	決 算	差 異
		人件費	4,164,712,000	4,218,558,152	△ 53,846,152
教育活動外 収支	取 入 業 の 活 動 部 動	教育研究経費	2,807,064,776	2,749,956,414	57,108,362
		管理経費	545,595,800	530,593,343	15,002,457
		徴収不能額等	0	201,303	△ 201,303
		教育活動支出計	7,517,372,576	7,499,309,212	18,063,364
		教育活動収支差額	135,772,424	△ 30,912,841	166,685,265
		科 目	予 算	決 算	差 異
	支 出 業 の 活 動 部 動	受取利息・配当金	113,349,000	117,761,693	△ 4,412,693
		その他の教育活動外収入	0	0	0
		教育活動外収入計	113,349,000	117,761,693	△ 4,412,693
		科 目	予 算	決 算	差 異
借入金等利息		0	0	0	
その他の教育活動外支出		0	0	0	
教育活動外収支差額	教育活動外支出計	0	0	0	
	教育活動外収支差額	113,349,000	117,761,693	△ 4,412,693	
	経常収支差額	249,121,424	86,848,852	162,272,572	

特別収支	収入業の活動部	科目	予算	決算	差異
		資産売却差額	0	2,852	△ 2,852
		その他の特別収入	10,000,000	15,461,934	△ 5,461,934
		特別収入計	10,000,000	15,464,786	△ 5,464,786
	支出業の活動部	科目	予算	決算	差異
		資産処分差額	0	13,854,151	△ 13,854,151
		その他の特別支出	0	0	0
		特別支出計	0	13,854,151	△ 13,854,151
	特別収支差額	特別収支差額	10,000,000	1,610,635	8,389,365
		「予備費」	(30,713,576) 169,286,424		169,286,424
基本金組入前当年度収支差額	基本金組入前当年度収支差額	基本金組入前当年度収支差額	89,835,000	88,459,487	1,375,513
		基本金組入額合計	△ 249,870,000	△ 672,716,635	422,846,635
		当年度収支差額	△ 160,035,000	△ 584,257,148	424,222,148
		前年度繰越収支差額	△ 19,701,477,442	△ 19,701,477,442	0
	基本金取崩額	基本金取崩額	15,854,000	38,556,142	△ 22,702,142
		翌年度繰越収支差額	△ 19,845,658,442	△ 20,247,178,448	401,520,006

4. 貸借対照表

「貸借対照表」は、会計年度末時点における財政状況（保有する資産と負債の状況）を表示するものです。平成30年3月31日現在の資産総額は、4億132万円減少して588億1,480万円となり、負債総額は4億8,978万円減少して50億8,723万円となりました。

この結果、「純資産の部合計」は前年度に比べ8,845万円増加し537億2,756万円となりました。

貸借対照表 (平成30年3月31日)			
資産の部 (単位：円)			
科目	本年度末	前年度末	増減
固定資産	55,240,512,109	55,174,320,227	66,191,882
有形固定資産	18,645,438,422	18,936,101,048	△ 290,662,626
特定資産	36,079,321,619	35,657,241,637	422,079,982
その他の固定資産	515,752,068	580,977,542	△ 65,225,474
流動資産	3,574,295,413	4,041,812,804	△ 467,517,391
資産の部合計	58,814,807,522	59,216,133,031	△ 401,325,509
負債の部 (単位：円)			
科目	本年度末	前年度末	増減
固定負債	3,857,631,636	3,965,978,939	△ 108,347,303
流動負債	1,229,606,986	1,611,044,679	△ 381,437,693
負債の部合計	5,087,238,622	5,577,023,618	△ 489,784,996

純資産の部 (単位：円)			
科目	本年度末	前年度末	増減
基本金	73,974,747,348	73,340,586,855	634,160,493
第1号基本金	43,591,747,348	42,957,586,855	634,160,493
第3号基本金	29,839,000,000	29,839,000,000	0
第4号基本金	544,000,000	544,000,000	0
繰越収支差額	△ 20,247,178,448	△ 19,701,477,442	△ 545,701,006
純資産の部合計	53,727,568,900	53,639,109,413	88,459,487
負債及び純資産の部合計	58,814,807,522	59,216,133,031	△ 401,325,509



2017年度

監事監査報告

2018年（平成30年）5月15日

2017年度（平成29年度）監事監査報告書

学校法人 大阪歯科大学

理事長 川添 堯彬 殿

学校法人 大阪歯科大学

監事 本井 文夫

監事 生駒 等

私たちは、私立学校法第37条第3項及び当学校法人大阪歯科大学寄附行為第13条の規定に基づき、2017年（平成29年）4月1日から2018年（平成30年）3月31日までの2017年度（平成29年度）における学校法人の業務、財産の状況及び計算書類等、すなわち事業報告書、資金収支計算書（人件費内訳表を含む）、事業活動収支計算書、貸借対照表（固定資産明細表、借入金明細表及び基本金明細表を含む）及び財産目録について監査を行った結果、次のとおり報告いたします。

1. 監査方法の概要

私たちは、理事会、評議員会及びその他重要な会議に出席し、理事から、事業の報告を聴取し、重要な決裁書類等を閲覧するとともに、会計監査人と連携し、計算書類について検討するなど、必要な監査手続きを実施いたしました。

2. 監査の結果

- (1) 資金収支計算書、事業活動収支計算書、貸借対照表及び財産目録は、会計帳簿の記載と一致し、法令及び寄附行為に従い、収支状況及び財産状況を正しく示しているものと認めます。
- (2) 理事の業務執行に関しては、不正の行為はなく、かつ、法令若しくは寄附行為に違反する重大な事実はありません。

以上

2018年度

事業計画

はじめに

大阪歯科大学は、建学の精神である「博愛」と「公益」を、教育・研究・診療等の全ての諸活動の根幹に据え、教育基本法及び学校教育法に則り、歯科医学に関する学術の理論及び応用を教授し、併せて人格を陶冶し国家社会のために有用な人材を養成するとの目的に則し地道な努力を続け、平成29年4月には医療保健学部を開設することで、医療系総合大学への一步を踏み出した。

本学の平成30年度の事業計画は、「教育力目標」「附属病院目標」「医療保健学部・大学院医療保健学研究科の運営」「学生の国際交流力の向上」を大項目として重点的に取り組むものである。

大学においては、常に教育活動の点検・評価を図るとともに、公正な研究活動の推進を図ることとする。歯学部においては、学生の精神面や学習態度のサポートの徹底（育み・寄り添い教育の充実）、オナーズ教育の推進、学生・教員の国際交流の活性化を図る。医療保健学部においては、歯学部と

連携し、歯科医療の担い手となる優秀な歯科医療人を育成していくとともに、国際交流の積極展開を図る。大学院歯学研究科においては、基礎系大学院生、社会人大学院生の募集を進展させ、本学における将来の教育・研究・診療を担える人材の育成を行う。平成30年4月から開設する大学院医療保健学研究科口腔科学専攻修士課程では、教育者・研究者としての人材育成とともに現役の歯科衛生士、歯科技工士等へのリカレント教育を行う。さらに同研究科博士課程の設置に向けた準備を進める。

附属病院においては、患者数の全診療科20%増加、土曜日診療の全科での実施、診療参加型臨床実習、臨床研修プログラムの充実（訪問診療・在宅診療の実施）に注力していく。

上記のような計画を強力に推進し、経費の削減に努めながら一層の教育、研究、診療、管理運営の向上を目指すものである。

平成 30 年度事業計画

平成 30 年度の事業として次の細目を掲げ、着実に実行していくものである。

I 大学

【大学全体】

【歯学部】

1. 教学 -a (第 1 学年～第 4 学年) の改革
2. 教学 -b (第 5 学年、第 6 学年、既卒者) の改革
3. 研究に関すること
4. 国際交流に関すること
5. 社会連携・社会貢献・広報活動に関すること

【医療保健学部】

1. 教育課程の編成の考え方及び特色
2. 学部拠点の整備
3. 学生の受け入れ

【歯科衛生士専門学校】

II 大学院

1. 歯学研究科
2. 医療保健学研究科

III 教員力

IV 附属病院

V キャンパス施設・設備

VI 法人・大学

I 大学

本学は、教育基本法の規定する教育の一般的な目的と方針に則り、歯学に関する学術を中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の領野における学理技術を教授研究し、知的、道德的及び応用的能力を展開させ、もって文化の創造と発展に貢献することを目的としている。

【大学全体】

- ・本学は、「平成 29 年度文部科学省私立大学等改革総合支援事業（タイプ 1）教育の質的転換（建学の精神を生かした大学教育の質向上）」に採択された。歯学部、医療保健学部、附属病院が連携し、教育・研究・診療の諸活動について、自己点検・評価を図りさらなる質向上に努める。
- ・教育、研究、診療の成果を社会へ発信し、広報活動の充実を進める。
- ・アーリーエクスポージャー（早期臨床体験学習）、大阪府枚方市の環境美化事業（ODU ソーシャルコミュニティ）を通じた態度教育・キャリア教育を充実させる。
- ・学生相談室カウンセラーを楠葉、牧野、天満橋の 3 学舎に配属し、年間を通して個別面談を行い学生支援の徹底を図る。
- ・枚方市及び関連団体と市内大学との地域連携を強化し、「文部科学省私立大学等改革総合支援事業（タイプ 5）プラットフォーム形成」の採択を目指す。

- ・歯学部、医療保健学部ともに学生・教員の国際交流を推進する。

【歯学部】

1. 教学 - a (第 1 学年～第 4 学年) の改革

(1) 学生の受け入れ

- ・学生の受け入れ方針（アドミッションポリシー）に基づき、一般入試（前期・後期日程）における大学入試センター利用入試を継続して実施するとともに、入試制度の多様化を図っていく。
- ・平成 27 年度から導入の入学初年度にかかる学費を免除する入学試験成績優秀者特待生制度を活用し、優秀な新入生の確保を図っていく。
- ・入試倍率 3 倍以上を目標として、本学の魅力を受験生にアピールすべく積極的な広報活動を推進していく。
- ・高大連携改革の取り組みとして、教育連携協力協定校の香里ヌヴェール学院高等学校、大阪府下の高等学校との相互交流を推進する。

(2) IR (Institutional Research) 室と教学部門等との連携

教学部門及び歯科医学教育開発室等との連携を一層強化し、入学段階から卒業までの学生の実態や学修効果が俯瞰できるデータの蓄積を行い、日常の学生指導に役立つ情報を提供する体制を整備する。

(3) 学生の教育支援について

- ・6 年間の教育課程を通じて、学位授与方針（ディプロマポリシー）に基づいて低年次からの学力レベルの向上（留年者の減少）、確実な進級を果たすべく教育支援に取り組む。
- ・本学の教育課程編成・実施方針（カリキュラムポリシー）に基づき、態度教育科目として、第 1 学年次の「社会福祉施設体験学習」や「現代教養」において、学習態度の確立やオナズ教育を行う。
- ・学生カルテの機能を充実させ、学生情報の共有化を図り、教育支援の基幹システムとして活用することを目指す。
- ・「研究チャレンジ」を積極的に行い、学生の研究力の向上を目指す。
- ・「SCRIP 参加研究」「TOEIC、TOEFL 受験」を積極的に展開していく。
- ・高い進級率を達成することを目指すとともに、第 4 学年次に行われる共用試験（CBT、OSCE）の高位合格率（本試験合格）を目標にした対応を行う。
- ・学舎全体の自習室の利用状況をモニタリングし、学生の学修環境の見直しを図っていく。
- ・学修の手引き（シラバス）、学生生活ハンドブック等の学生生活指導の指針の更新を行い、学生に対してその活用を促していく。
- ・薬物乱用防止、女性被害防止に関する講演会を企画し、安全な学生生活を過ごすうえで必要な知識の啓発に努める。
- ・障害者差別解消法が施行されたことを受け、本学の「障がいのある学生の修学等の支援に関する指針」に基づいて支



援体制の整備を図る。

2. 教学-b（第5学年、第6学年、既卒者）の改革

（1）第5学年への教育

- ・クリッカーの導入による出欠管理の徹底と、臨床実習の成績と臨床知識試験（年5回）と臨床講義、臨床実習終了時試験の実施により学力の向上を目指していく。
- ・全診療科での「自験」を実施し、参加型臨床実習の充実を図る。
- ・PostCC-OSCE（臨床能力試験）の本格実施に向けた体制を整備する。

（2）第6学年への教育

学士試験1、2本試験全員合格と、歯科医師国家試験の高位の合格率（新卒者合格率80%以上、最低修業年限国家試験合格率の向上）を目指す。

（3）既卒者への対応

既卒者教務部委員会により、既卒者のモチベーションを向上させる指導を継続し、平成30年度も個別指導・相談の徹底、相談会への定期出席を厳守させる。

3. 研究に関すること

- ・科学研究費補助金をはじめ各種競争的外部資金の獲得件数を高めるよう研究活動の活性化を図る。
- ・研究倫理については、「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」に沿った取り組みを行い、研究者の倫理観を向上させる。
- ・大阪歯科大学学術リポジトリの充実を図り、本学の保有する学術研究の成果を社会に還元し、国際的な発信力の強化に繋げていく。
- ・歯科医学の発展のため、臨床ゲノム医療学会に協賛し、ゲノム研究に向けた研究体制を整備する。
- ・学長のリーダーシップのもと、文部科学省私立大学研究ブランディング事業等の獲得のための研究推進体制を構築する。

4. 国際交流に関すること

- ・中国、韓国、ベトナム、台湾、アメリカ、イギリス、ハンガリー、ウルグアイの海外15大学との学術交流協定締結校との事業を継続して行い、一層の充実を図る。
- ・科学技術振興機構の「日本・アジア青少年サイエンス交流事業」の実施申請を行い、アジア地域と日本の科学技術の発展に寄与する。

5. 社会連携・社会貢献・広報活動に関すること

- ・枚方市の学園都市ひらかた推進協議会事業、健康医療都市ひらかたコンソーシアム事業へ積極的に参加し、地域連携を推進する。
- ・本学公開講座の内容を充実させ、市民の健康（健口）づくりに貢献する。

【医療保健学部】

1. 教育課程の編成の考え方及び特色

- 1) 医療人としての素養の形成、歯科の基礎的な知識の獲得、歯科臨床の知識の獲得、歯科臨床の技能の獲得、実践能力の獲得、教育内容の整理と知識と技能の固定化を体系的に行う。国家試験合格率100%達成にむけた教育、英会話力アップのための教育、学生の国際交流の推進を学部運営の基本軸とする。
- 2) 医療人としての素養の養成、口腔リハビリテーションや訪問歯科診療などの高齢化に応じた知識と技能の獲得に重点を置く。
- 3) 歯科衛生士、歯科技工士国家試験受験資格とともに、意欲ある学生に対して社会福祉士国家試験受験資格の取得コースの受講を促す。

2. 学部拠点の整備

経費の抑制を図りながら、既存校舎改修及び設備の更新等の環境整備を行い、できるだけキャンパスのアメニティの向上を図る。

3. 学生の受け入れ

- ・学部の認知度と入学定員充足率を向上させるため、本学ホームページの内容の充実とともに、受験生の確保に向けて高校訪問などの積極的な入試広報活動を行う。
- ・学生生活を過ごす上で必要な事項の概要を逐次改定し、学生のサポート体制の充実を図る。

【歯科衛生士専門学校】

これまで培われた特色ある教育を生かし、国家試験合格率100%、就職率100%という輝かしい実績を4年制大学学部教育へ継承していく。

II 大学院

【歯学研究科】

本学大学院歯学研究科博士課程は、大学院生に歯学に関する学術の理論及び応用を教授研究し、その深奥を究めて文化の進展に寄与するとともに、大学院生を当該専攻分野に関する高度の研究指導者に養成することを目的としている。

1. 大学院生の入学倍増への取り組み

- ・基礎系を専攻する学生への優遇策の継続実施（授業料等の減免）
- ・臨床系の新専攻科目の開設などを検討する。
- ・大学院講義の楠葉・天満橋両学舎での実施
- ・社会人大学院生の受け入れを促進する。
- ・外国人留学生の受け入れを促進する。
- ・大学院生・ポストドクトラルフェローの海外留学を支援する。
- ・大学院生の優秀論文表彰制度の継続実施
- ・大学院歯学研究科ホームページの充実による広報

2. ポストドクトラルフェロー事業

大学院博士課程修了者のうち2名の枠を設け、研究活動の継続及び後継者養成のため本学大学院に採用する。

3. ティーチング・アシスタント事業

15名の枠を設けることで、学部学生に対する教育補助業務を行う。

4. 学術研究奨励助成金

大学院生に対して若手研究者育成のために研究助成を行う。

5. 学術研究奨励資金事業及び若手研究者奨励金事業

日本私立学校振興・共済事業団事業で、研究計画を学内公募のうえ選考し、事業団へ申請する制度を積極的に活用する。

6. 海外研究発表助成事業

大学院博士課程第3・4学年を対象に、海外で行われる学会でのファーストオーサーで研究発表を行う場合に研修費として助成する。

7. 大学院生による診療活動の推進

本学附属病院での診療活動を活性化させることを通じ、研究能力（論文作成力）の向上を目指す。（基礎系大学院生の診療活動の推進）

【医療保健学研究科】

- ・修士課程口腔科学専攻では、基礎科目（研究者及び指導・教育者としての素養を養成する科目）、専門科目（高度な専門性の高い知識と技能を学修する科目）、専門研究（修士論文をまとめる科目）の3つの科目群からなるカリキュラムにより体系的な教育を推進する。
- ・現役の歯科衛生士、歯科技工士等の有職者に対して、長期履修制度（最大4年間）や、大学院設置基準第14条による夜間等の特定の時間での教育指導体制により、きめ細かなリカレント教育を実施する。
- ・医療保健学研究科博士課程の設置に向け、申請スケジュールを見据え準備を行う。

Ⅲ 教員力

1. 教員評価の実施

「新授業評価表」による優れた教員の発掘で教員力を高める。アクティブラーニングなどを取り入れた授業を行う人材を育成するためのFD研修会を頻繁に実施する。

2. 人材の登用

- ・大学院修了者・ポストドクトラルフェローへ海外留学を推奨し、本学の「海外留学経験者の特別採用に関する規程」に基づき帰国後に教員任用を図っていく。
- ・客員教授、Visiting Professor、Honorary Visiting Professor による講義など特色ある教育の展開を促していく。

Ⅳ 附属病院

本学附属病院は、本学大学学則の第1条の目的に則り、患者診療を通じて歯科医学の教育研究を達成するとともに、地域社会に貢献することを目的としている。このことを踏ま

え、地域における患者ニーズに合った良質な歯科診療を行うとともに、臨床研修施設として歯科医師の養成と資質向上に取り組んでいる。合わせて新しい歯科医療提供体制（高齢者、スペシャルニーズ患者について対応できるきめ細かな体制）を整え、一層の医療収入の改善に向けて取り組むものである。

平成30年度においては、引き続き附属病院の機能を一層充実させる取り組みを推進し、経営効率の一層の向上を図り、次の事項を実現し、医療収入の増加（黒字化）を目指す。

- ・16診療科の延べ患者数の2割増加を目指す。
- ・土曜日における16診療科の開院
- ・附属病院ホームページの内容を充実させ、患者ニーズ（診療医員の担当曜日スケジュールの表示など）に即応できる体制を整える。
- ・先進的な歯科治療を提供する役割を発揮するため、地域医療機関からの受け入れを円滑に進める。
- ・口腔リハビリテーション科、スペシャルニーズ歯科・障がい者歯科の拡充を図る。
- ・臨床研修プログラムに、現代医療の今日的課題である訪問診療・在宅診療を積極的に取り入れ、臨床研修施設として、優秀な歯科医師を養成する機能の充実を図る。
- ・訪問歯科診療（国家公務員共済組合連合会大手前病院）、MRI特殊検査（関西医科大学天満橋総合クリニック）の継続実施
- ・地域の診療所への支援として、CT、MRI、歯科用CT、検体検査及び病理組織検査を継続実施
- ・歯科医師派遣（沖縄県、阪神福祉事業団、日本放送協会大阪放送局）の継続実施
- ・患者への説明責任、医療倫理の遵守とその徹底を行う。
- ・歯学部附属病院医療事故防止相互チェックへの参画
- ・医療安全に関する講習会により、医療人としての職業意識の向上を図る。
- ・病院情報システムの活用による医療サービスの一層の質的向上を図る。
- ・公益財団法人日本医療機能評価機構による病院機能評価を受けるべく基盤整備を行う。
- ・省エネルギー対策を徹底し、エネルギー使用量と経費の抑制、削減を図る。

V キャンパス施設・設備

平成30年度における施設・設備の整備予定（抜粋）は、次のとおりである。

○楠葉学舎

【歯学部】

- ・排水処理設備整備工事
- ・講堂屋上防水工事
- ・マルチ型空冷ヒートポンプパッケージ更新工事
- ・第4実習室AV機器改修工事



- ・ネットワーク環境の整備（VPN 装置更新）
- ・中央歯学研究所における研究用機器備品の拡充（全自動磁気細胞分離装置、デジタル X 線センサー、万能試験機、スパイラルプレーター）

○牧野学舎

【医療保健学部】

- ・1号館3階エアコンの更新工事
- ・2号館2階レントゲン室整備
- ・3号館改修工事、CAD/CAM 室整備

○天満橋学舎

【附属病院】

- ・デジタル口内法撮影 CR 装置
- ・ジェットウォッシャー洗浄装置
- ・密閉式自動固定包埋装置・パラフィン包埋ブロック作成装置
- ・電子カルテシステムへの検査結果反映接続システム
- ・西館エレベーターリニューアル工事
- ・受電設備リレー更新工事
- ・診療用チェアーの一部更新

VI 法人・大学

法人・大学の運営を効率的に行っていくかなければならない。平成 30 年度においても、経費を削減・抑制し、業務の改善に努力する。

- ・徹底した経費の削減・抑制を図る観点から、学内会議で配付される膨大な紙ベースの資料について、タブレット端末を使用したペーパーレス会議の実施を推進する。
- ・歯学部・大学院歯学研究科のメインキャンパスの楠葉学舎、医療保健学部のメインキャンパスの牧野学舎、歯学部・同附属病院の拠点である天満橋学舎の3学舎の有機的な連携を図るため、情報ネットワーク環境の整備を行う。
- ・教職員の業務上の資質を高めるための研修会、人権意識高揚に向けた講演会を行う。
- ・事務職員の知識修得のための SD（スタッフディベロップメント）を実施し、近年変化の著しい業務内容の変化に即応できる人材の育成を図る。
- ・教職員の省エネルギーへの意識を高める啓発活動を組織的に行い、エネルギー使用量と経費の節減の実績を上げるよう努力する。

平成30年度

科学研究費補助金交付

研究種目	継続 新規	課題番号	研究代表者 氏名	所属	研究課題名	助成額（円） 直接経費 / 間接経費
基盤研究 (C)	継続	16K02147	桒 則章	人権教育室	わが国における歯科医療倫理学の構築のための総合的研究	1,200,000 360,000
基盤研究 (C)	継続	16K04985	緒方 智壽子	歯周病学	複眼撮像システムによる歯周治療の高度化	1,100,000 330,000
基盤研究 (C)	継続	16K08960	宮永 史子	内科学	メタボリック症候群の治療抵抗性・脂肪細胞機能に関連する新規細胞因子の探索	1,100,000 330,000
基盤研究 (C)	継続	16K11469	南部 隆之	細菌学	口腔内硝酸還元活性に個人差をもたらす菌叢の解明	1,200,000 360,000
基盤研究 (C)	継続	16K11533	隈部 俊二	口腔解剖学	咀嚼筋痛障害モデル動物を用いた咀嚼筋痛障害に伴う慢性痛発症機序の解明	500,000 150,000
基盤研究 (C)	継続	16K11534	秋山 広徳	歯科放射線学	口腔癌 3 次元画像誘導小線源治療におけるリアルタイム線量評価システムの構築	400,000 120,000
基盤研究 (C)	継続	16K11574	好川 正孝	口腔治療学	二相性担体での血球系細胞および口腔粘膜細胞の再分化による歯髄・象牙質複合体の再生	900,000 270,000
基盤研究 (C)	継続	16K11617	田口 洋一郎	歯周病学	インプラント周囲炎に対する先制医療戦略の基盤構築	1,000,000 300,000
基盤研究 (C)	継続	16K11667	馬場 俊輔	口腔 インプラント学	薬物担持担体と幹細胞を用いた広域顎口腔組織欠損再生	1,400,000 420,000
基盤研究 (C)	継続	16K11668	今井 弘一	歯科理工学	チタン合金インプラント組成金属の E S / i P S 細胞による発生毒性の検討	900,000 270,000
基盤研究 (C)	継続	16K11774	百田 義弘	歯科麻酔学	虚血耐性現象における傷害誘導性神経幹細胞の解析	1,200,000 360,000
基盤研究 (C)	継続	16K11820	有田 憲司	小児歯科学	新概念の齲蝕管理システム ICCMS に適した新規高機能性材料の商品化への戦略的研究	900,000 270,000
基盤研究 (C)	継続	16K11821	松本 尚之	歯科矯正学	口唇口蓋裂治療のための多孔体 TCP ポリマー複合体と破骨細胞抑制因子の骨再生	1,500,000 450,000
基盤研究 (C)	継続	16K11847	田中 昭男	病理学	ヒト由来アメロゲンインペプチドに対する歯根膜幹細胞の遺伝子発現	700,000 210,000
基盤研究 (C)	継続	16K11876	真下 千穂	細菌学	口腔硝酸還元性を基にした口腔健康指標の開発	1,200,000 360,000

研究種目	継続 新規	課題番号	研究代表者 氏名	所属	研究課題名	助成額（円） 直間経費 / 間接経費
基盤研究 (C)	継続	16K11877	高橋 一也	高齢者歯科学	放電プラズマ法により新規合成された高純度過ギ酸における抗微生物活性の検証	1,200,000 360,000
基盤研究 (C)	継続	17K04256	宮川 淑恵 (濱島 淑恵)	口腔保健学科	「ヤングケアラー（ケアを担う子ども）」の実態と発見手法の開発	1,100,000 330,000
基盤研究 (C)	継続	17K05084	松原 英一	物理学	IV 族プラズマフォトンニクスによる凝縮系の全赤外高感度コヒーレント分光	900,000 270,000
基盤研究 (C)	継続	17K11635	河井 まりこ	薬理学	Sorcin の細胞内局在と軟骨内骨化過程における細胞分化との関連性を明らかにする	900,000 270,000
基盤研究 (C)	継続	17K11770	橋本 典也	歯科理工学	iPS 細胞由来間葉系幹細胞を用いた広域顎骨組織欠損再生に向けた基礎的研究	1,100,000 330,000
基盤研究 (C)	継続	17K11779	橋本 正則	口腔保健学科	酵素活性阻害作用と抗菌性を発現する新規金属ナノ粒子の開発	1,100,000 330,000
基盤研究 (C)	継続	17K11818	梅田 誠	歯周病学	糖尿病患者のインプラント周囲炎を見据えた先制歯科医療戦略の構築	1,000,000 300,000
基盤研究 (C)	継続	17K11864	窪 寛仁	口腔外科学第二	顎骨再生における頬脂肪由来脱分化脂肪細胞・PRP 複合体のトランスレーショナル研究	1,300,000 390,000
基盤研究 (C)	継続	17K12034	高山 由希	口腔衛生学	唾液タンパク由来ペプチド抗原に対する分泌型 IgA 抗体の歯周病細菌付着阻害能の検証	1,500,000 450,000
基盤研究 (C)	継続	17K12068	吉川 美弘	生化学	スフィンゴ脂質が骨代謝に及ぼすメカニズムに関する研究	1,300,000 390,000
若手研究 (B)	継続	16K20475	竹内 摂	歯科保存学	MMPs 解析における象牙質・歯髄複合体組織破壊抑制と新規接着システムの開発	1,000,000 300,000
若手研究 (B)	継続	16K20525	覚道 昌樹	有歯補綴咬合学	咀嚼時舌運動と食塊咽頭移送の関係の解明	500,000 150,000
若手研究 (B)	継続	16K20526	向井 憲夫	有歯補綴咬合学	咬合違和感症候群（ODS）の顎顔面領域の触・圧覚に関する研究	600,000 180,000
若手研究 (B)	継続	16K21499	坂井 加奈	歯科矯正学	伸縮可能な硬組織模倣シートを応用した歯周組織細胞間ネットワーク解析デバイスの開発	1,300,000 390,000
若手研究 (B)	継続	17K15254	円山 由郷	細菌学	アーキアにおける染色体高次構造変化を介した環境応答	1,100,000 330,000
若手研究 (B)	継続	17K17199	田中 佑人	障がい者歯科	正確度 (Accuracy) と精度 (Precision) に着目した咬合高径決定法	800,000 240,000
若手研究 (B)	継続	17K17200	西村 貴子	小児歯科学	新規アパタイトアイオノマーセメント AIC の各種口腔内細菌に対する影響に関する研究	900,000 270,000
若手研究 (B)	継続	17K17227	李 佩祺	口腔 インプラント学	免疫回避機能を有する PEG 骨再生材料の開発	1,800,000 540,000
若手研究 (B)	継続	17K17228	柏木 隆宏	口腔 インプラント学	新規骨補填材を基盤とした血管網内包型培養骨の開発	1,300,000 390,000
若手研究 (B)	継続	17K17300	大郷 英里奈	歯科麻酔学	薬物療法に依存しない慢性疼痛緩和法の確立	1,300,000 390,000
若手研究 (B)	継続	17K17343	安井 憲一郎	歯科矯正学	自家骨と骨補填材を組み合わせた自家骨移植法の開発	1,800,000 540,000
若手研究 (B)	継続	17K18247	篠永 ゆかり	小児歯科学	新規高機能蝕蝕充填・予防充填材料の反応メカニズムの解明に関する研究	1,000,000 300,000
基盤研究 (B)	継続	17H04424	片岡 宏介	口腔衛生学	唾液腺における IgA 抗体形質細胞への最終分化メカニズムの解明と加齢が及ぼす影響	4,400,000 1,320,000
研究活動 スタート支援	継続	17H07261	乾 志帆子	欠損歯列 補綴咬合学	未来型生体活性チタン人工骨の設計・機械的強度についての研究	1,160,000 300,000
研究活動 スタート支援	継続	17H07264	首藤 崇裕	口腔工学科	市販歯磨剤を用いたブラッシングがチタンの表面性状に与える影響	1,000,000 300,000
研究活動 スタート支援	継続	17H07265	島田 明子	口腔リハビリテー ション科	顎堤粘膜疼痛感覚のエントロピー分析	400,000 120,000
基盤研究 (C)	新規	18K09516	納富 拓也	薬理学	RANKL/OPG リソソーム選別輸送制御による骨代謝動態の解明	1,400,000 420,000
基盤研究 (C)	新規	18K09563	堂前 英資	生化学	ヒト $\gamma \delta$ T 細胞による口腔癌抑制作用をニュートリゲノミクスにより制御する	1,100,000 330,000
基盤研究 (C)	新規	18K09570	岩崎 剣吾	中央歯学研究所	間葉系幹細胞-血管内皮細胞相互作用を応用した新規歯周組織再生治療開発	1,100,000 330,000
基盤研究 (C)	新規	18K09590	辻 則正	口腔治療学	硬組織誘導性新規合成ペプチドの歯内治療への適用についての検索	1,400,000 420,000
基盤研究 (C)	新規	18K09613	前田 博史	口腔治療学	Rothia mucilaginosa 感染症の病因解明と感染コントロール法の確立	1,100,000 330,000
基盤研究 (C)	新規	18K09629	牧田 佳真	化学	分子カプセルを利用したヨード造影剤の開発	700,000 210,000
基盤研究 (C)	新規	18K09647	戸田 伊紀	解剖学	ウロコラーゲンの骨増生における生体足場材料としての効果	900,000 270,000



研究種目	継続 新規	課題番号	研究代表者 氏名	所属	研究課題名	助成額(円) 直間経費 / 間接経費
基盤研究(C)	新規	18K09712	岡崎 定司	欠損歯列 補綴咬合学	軽量で金属のアレルギーの少ない患者重視型新義歯の開発	1,100,000 330,000
基盤研究(C)	新規	18K09713	楠本 哲次	口腔工学科	高齢者における骨質の制御を期待する生体材料の創製とインプラントへの応用	1,200,000 360,000
基盤研究(C)	新規	18K09736	大西 祐一	口腔外科学第二	口腔扁平上皮癌における癌幹細胞マーカーの解析と新規分子標的治療薬の開発	1,200,000 360,000
基盤研究(C)	新規	18K09803	野崎 中成	薬理学	多能性幹細胞が分泌するエクソソーム機能性 RNA の細胞外機能に関する基礎的研究	1,800,000 540,000
基盤研究(C)	新規	18K09900	益野 一哉	歯科医学 教育開発室	人工知能の歯科医学教育への応用	1,700,000 510,000
基盤研究(C)	新規	18K09928	池尾 隆	生化学	ヒドロキサム酸系阻害剤による破骨細胞分化促進とその分子機構の解明	1,300,000 390,000
基盤研究(C)	新規	18K09929	王 宝禮	歯科医学 教育開発室	慢性歯周炎によるがん化シグナルメカニズムの解明から漢方薬物由来創薬開発	1,200,000 360,000
基盤研究(C)	新規	18K10767	小野 圭昭	障がい者歯科	口腔内感覚が咀嚼嚥下の誘発におよぼす影響	300,000 90,000
基盤研究(B)	新規	18H02986	本田 義知	中央歯学研究所	ストレス誘導性老化細胞の挙動解析から迫る未知なる骨形成阻害機構の解明	7,800,000 2,340,000
若手研究	新規	18K17080	嘉藤 弘仁	歯周病学	エムドゲイン由来合成ペプチドを応用した新規歯髄温存・石灰化療法の創製	1,700,000 510,000
若手研究	新規	18K17092	小林 信博	口腔 インプラント学	重度歯周病治療のための線維芽細胞増殖因子担持担体の歯周組織再生のメカニズム解明	1,100,000 330,000
若手研究	新規	18K17106	山脇 勲	歯周病学	全体表面酸化ナノ改質による先制医療志向型インプラント周囲炎予防戦略の創製	2,400,000 720,000
若手研究	新規	18K17160	原 朋也	口腔 インプラント学	新規ダブルアクチベート法を用いた多血小板血漿による歯槽骨再生法の開発	800,000 240,000
若手研究	新規	18K17207	小滝 真也	歯科放射線学	MRI による下歯槽神経障害の定量的評価法の確立	1,100,000 330,000
若手研究	新規	18K17274	河合 咲希	小児歯科学	乳歯歯髄由来未分化幹細胞における低酸素培養の影響	900,000 270,000
研究活動 スタート支援	新規	18H06334	中山 雄司	歯科矯正学	iPS 由来間葉系幹細胞を用いた口唇口蓋裂治療の基礎的研究	1,200,000 360,000
合計 64 件 (うち継続 41 件)						81,460,000 24,390,000

2018年度 大阪歯科大学学術研究奨励助成金(大学院生)

課題番号	氏 名	専 攻	学年	研究課題	助成額(円)
18-01	井村 和希	歯科保存学	4	ナノアパタイト-線維芽細胞増殖因子複合体を用いた新規歯髄法の開発	140,000
18-02	森川 裕仁	歯科保存学	4	新規バイオガラス含有バイオアクティブ材料による軟化象牙質の再石灰化促進効果に関する研究	140,000
18-03	小淵 健二郎	歯周病学	3	DNA ダブルアジュバントによる歯周病細菌表面タンパク抗原特異的免疫応答の分子細胞学的解析	140,000
18-04	森田 達	高齢者歯科学	4	嚥下力測定装置の開発	140,000
18-05	杉立 尚城	有歯補綴咬合学	4	在宅医療現場で短時間に可撤性義歯が製作できる全顎咬合印象法の導入	140,000
18-06	松尾 信至	有歯補綴咬合学	4	超音波診断装置を用いた摂食嚥下時における舌運動の定性的評価基準の確立	180,000
18-07	安井 由香	有歯補綴咬合学	4	アイトラッカーを用いた食品の嗜好と視線との関連の解明	140,000
18-08	寺田 知里	欠損歯列補綴咬合学	3	インプラント周囲の硬組織・歯周組織複合体への再生誘導を目指す新規生体材料の創製	140,000
18-09	陳 路沅	欠損歯列補綴咬合学	3	フッ素含有 HA コーティング純チタン金属がインプラント埋入周囲組織に与える影響について	140,000
18-10	笹山 智史	口腔インプラント学	4	新規足場材料エビガラカテキングレート結合ゼラチンの骨再生用細胞播種担体としての有用性評価	140,000
18-11	黄 安祺	口腔インプラント学	2	エビガラカテキングレート結合ゼラチンの生体内分解機序に関する検討	140,000
18-12	成瀬 かおり	口腔外科学第一	4	エナメル上皮腫の発育における細胞接着分子および上皮間葉転換分子の発現の検討	140,000
18-13	今瀧 梨江	小児歯科学	3	レジン添加型ガラスアイオノマーセメントとハイドロキシアパタイトの反応メカニズムの解明に関する研究	140,000
18-14	大本 博樹	障害者歯科学	4	異常咬反反射患者の歯科治療時におけるストレスに関する検討	140,000
計 14 件					2,000,000

平成30年

春秋の褒章・叙勲受章者

平成30年春、秋の褒章・叙勲において、本学の関係者として以下の先生方が受章されました。

<平成30年春>

・褒章

大学27回 中道 雄司 兵庫県 藍綬褒章

・叙勲

大学8回 高田 勝美 岐阜県 瑞宝双光章

大学10回 岡野 和子 和歌山県 瑞宝双光章

大学11回 竹松 利登 長野県 旭日双光章

大学13回 永富 研二 京都府 瑞宝双光章

大学13回 藤田 智 滋賀県 瑞宝双光章

大学16回 黒川 勇次郎 富山県 瑞宝双光章

大学17回 稲田 義仁 宮崎県 旭日双光章

大学17回 仁保 光昭 山口県 旭日双光章

大学18回 近森 信人 大阪府 旭日双光章

大学19回 田中 康正 奈良県 旭日小綬章

<平成30年秋>

・褒章

大学28回 佐藤 修斎 徳島県 藍綬褒章

・叙勲

大学14回 海堀 昭彦 和歌山県 瑞宝双光章

大学16回 生駒 等 大阪府 旭日双光章

大学19回 塩見 聰 兵庫県 旭日双光章

大学20回 徳富 敏信 長崎県 旭日双光章

大学20回 山科 透 広島県 旭日中綬章

大学20回 山本 馨 福井県 旭日小綬章

大阪府病院協会第43回病院職員永年勤続表彰

附属病院病棟看護部主任の中塚美智子さんと管理栄養士主任の保田紀子さんが、一般社団法人大阪府病院協会主催の第43回病院職員永年勤続表彰を受けました。これは、永年にわたり医療業務に従事し、病院の発展のため不断に努力してきた病院職員を表彰するもので、昭和51年度から実施されています。表彰式は12月20日、大阪府病院年金会館で行われました。二人は表彰に対し感謝するとともに、「今後も当院の病院理念に基づいた安全・安心な医療の提供に尽力していきたい」と話していました。



寄 贈

下記のとおり寄贈を受けました。心より感謝いたします。

・大阪歯科大学第66回卒業生 | 卒業を記念して |

天満橋学舎南館1階学生控室及び楠葉学舎図書館備品一式(テーブル・チェア・書架)(2018年3月9日)

・大阪歯科大学硬式野球部OB会 | 創立100周年を記念して | クロガネモチ1株及び記念碑一式(2018年3月24日)

・大浦清 名誉教授 | 定年退職にあたり、学術研究奨励資金として | 金1,000,000円(2018年4月1日)

・西川泰史 名誉教授 | 定年退職にあたり、一般寄附として | 金1,000,000円(2018年4月5日)

・大久保直 名誉教授 | 定年退職にあたり、ウェルネス・ホールのトレッドミル購入費用として | 金1,000,000円(2018年5月9日)

・大阪歯科大学歯科技工士専門学校共済会 |

本学医療保健学部口腔工学科の教育・研究の充実、施設の整備のため | 金58,791,867円(2018年5月29日)

・大阪歯科大学歯科技工士専門学校保護者会 | 本学医療保健学部口腔工学科の教育・研究の充実、施設の整備のため | 金3,467,265円(2018年5月29日)

・大阪歯科大学第36回卒業生(嵩山会) | 卒業30周年を記念して、学術研究奨励資金として | 金300,000円(2018年9月16日)

・大阪歯科大学第16回卒業生(天章会) | 卒業50周年を記念して | 金500,000円(2018年11月10日)



人 事

2018年の主な教員人事は次のとおりです。

名誉教授

大浦 清
西川 泰央
森田 章介
大久保 直
以上 2018.4.1 付

大学役職者

副学長、歯学部長、総務部長、
教務部長、アドミッションセンター長

副学長

学生部長

図書館長

附属病院病院長

大学院歯学研究科科長

中央歯学研究所所長

教育情報センター所長

国際交流部長、附属病院副病院長

附属病院副病院長

附属病院副病院長

医療保健学部長、大学院医療保健学研究科科長

口腔保健学科長

口腔工学科長

田中 昭男

今井 弘一

田中 昌博

清水谷公成

中嶋 正博

岡崎 定司

梅田 誠

辻林 徹

松本 尚之

山本 一世

田中 武昌

小正 裕

和唐 雅博

柿本 和俊

以上 2018.4.1 付

教員任用

《歯学部》

障がい者歯科	専任教授	小野 圭昭
口腔インプラント学講座（臨床系）	准教授	山田 陽一
口腔インプラント学講座（診療系）	准教授	草野 薫
歯科放射線学講座（診療系）	講師	小滝 真也
歯科麻酔学講座（診療系）	講師	内田 琢也
口腔病理学講座	助教	池田千浦子
歯科理工学講座	助教	白井 翼
歯周病学講座（臨床系）	助教	山内 伸浩
歯周病学講座（診療系）	助教	東 仁
欠損歯列補綴咬合学講座（臨床系）	助教	田代悠一郎
欠損歯列補綴咬合学講座（臨床系）	助教	西崎真理子
口腔インプラント学講座（臨床系）	助教	武田 吉裕
口腔外科学第一講座（診療系）	助教	河野多香子
口腔外科学第一講座（診療系）	助教	姫嶋 皓大
口腔外科学第二講座（診療系）	助教	濱田 裕之
歯科矯正学講座	助教	中山 雄司
歯科麻酔学講座	助教	新井由起子
口腔リハビリテーション科	助教	永久 景那
	以上	2018.4.1 付

細菌学講座	主任教授	沖永 敏則
		2018.6.1 付
中央歯学研究所	講師	岩崎 剣吾
		2018.8.1 付
内科学講座	主任教授	志水 秀郎
		2018.11.1 付

《医療保健学部》

口腔保健学科	教授	元根 正晴
口腔保健学科	教授	橋本 正則
口腔工学科	教授	西崎 宏
口腔保健学科	准教授	頭山 高子
口腔保健学科	准教授	山中 武志
口腔工学科	講師	樋口 鎮央
口腔保健学科	助手	尾形 祐己
口腔工学科	助手	藤田 暁
	以上	2018.4.1 付

昇任

《歯学部》

口腔解剖学講座	専任教授	隈部 俊二
歯科理工学講座	講師	秋山 真理
障がい者歯科	講師	伊達岡 聖
	以上	2018.4.1 付
口腔外科学第二講座（臨床系）	講師	正重 裕一
		2018.10.1 付
薬理学講座	主任教授	野崎 中成
口腔外科学第一講座	主任教授	井関 富雄
	以上	2018.11.1 付

大学院教員任用

《歯学研究科》

大学院教授

解剖学	大学主任教授	竹村 明道
口腔解剖学	大学主任教授	田村 功
生化学	大学主任教授	池尾 隆
病理学	大学主任教授	富永 和也
歯科理工学	大学主任教授	今井 弘一
口腔衛生学	大学主任教授	三宅 達郎
歯科保存学	大学主任教授	山本 一世
歯内治療学	大学主任教授	前田 博史
歯周病学	大学主任教授	梅田 誠
高齢者歯科学	大学主任教授	高橋 一也
有歯補綴咬合学	大学主任教授	田中 昌博
欠損歯列補綴咬合学	大学主任教授	岡崎 定司
口腔インプラント学	大学主任教授	馬場 俊輔
口腔外科学第二	大学主任教授	中嶋 正博
歯科矯正学	大学主任教授	松本 尚之

歯科放射線学	大学准教授	清水谷 公成
小児歯科学	大学准教授	有田 憲司
歯科麻酔学	大学准教授	百田 義弘
	以上	2018.4.1 付
細菌学	大学准教授	沖永 敏則
		2018.7.1 付
薬理学	大学准教授	野崎 中成
口腔外科学第一	大学准教授	井関 富雄
内科学	大学准教授	志水 秀郎
	以上	2018.12.1 付

大学院准教授

解剖学	大学准教授	戸田 伊紀
口腔解剖学	大学専任教授	隈部 俊二
生理学	大学准教授	内橋 賢二
生化学	大学准教授	鎌田 愛子
薬理学	大学講師	河井 まりこ
歯科理工学	大学准教授	橋本 典也
口腔衛生学	大学准教授	片岡 宏介
歯科保存学	大学准教授	吉川 一志
歯内治療学	大学准教授	至田 宗泰
歯周病学	大学准教授	田口 洋一郎
有歯補綴咬合学	大学准教授	田中 順子
口腔外科学第一	大学准教授	井関 富雄
口腔外科学第二	大学准教授	大西 祐一
歯科麻酔学	大学准教授	佐久間 泰司
内科学	大学准教授	澤井 宏文
英語	大学准教授	藤田 淳一
倫理学	大学専任教授	樫 則章
	以上	2018.4.1 付
障害者歯科学	大学専任教授	小野 圭昭
		2018.5.1 付
口腔インプラント学	大学准教授	山田 陽一
		2018.8.1 付

大学院講師

解剖学	大学講師	上村 守
生理学	大学講師	井上 博
生理学	大学講師	平野 俊一朗
生理学	大学講師	藤本 哲也
生化学	大学講師	吉川 美弘
生化学	大学講師	堂前 英資
薬理学	大学講師	野崎 中成
薬理学	大学講師	納富 拓也
歯科理工学	大学講師	秋山 真理
口腔衛生学	大学講師	土居 貴士
高齢者歯科学	大学助教	奥野 健太郎
有歯補綴咬合学	大学講師	佐藤 正樹
欠損歯列補綴咬合学	大学講師	小正 聡
口腔外科学第一	大学講師	吉田 博昭
口腔外科学第二	大学講師	窪 寛仁

小児歯科学	大学准教授	原田 京子
小児歯科学	大学講師	篠永 ゆかり
倫理学	大学講師	李 嘉永
中央歯学研究所	大学准教授	本田 義知
	以上	2018.4.1 付

大学院助教

病理学	大学助教	岡村 友玄
細菌学	大学講師	山根 一芳
細菌学	大学講師	真下 千穂
細菌学	大学講師	南部 隆之
歯科保存学	大学講師	谷本 啓彰
歯科保存学	大学助教	竹内 摂
歯周病学	大学助教	保尾 謙三
高齢者歯科学	大学専任教授	嘉藤 弘仁
有歯補綴咬合学	大学講師	小野 圭昭
有歯補綴咬合学	大学助教	鳥井 克典
口腔外科学第一	大学講師	藤井 孝政
口腔外科学第一	大学講師	松本 和浩
口腔外科学第二	大学講師	山田 耕治
歯科矯正学	大学講師	蠅庭 秀也
歯科放射線学	大学講師	居波 薫
歯科放射線学	大学講師	蒲生 祥子
小児歯科学	大学講師	秋山 広徳
歯科麻酔学	大学講師	阿部 洋子
障害者歯科学	大学講師	加藤 裕彦
	以上	伊達岡 聖
		2018.4.1 付
解剖学	大学助教	川島 渉
		2018.9.1 付

《医療保健学研究科》

大学院教授

口腔科学専攻	大学教授	小正 裕
口腔科学専攻	大学教授	糸田 昌隆
口腔科学専攻	大学教授	柿本 和俊
口腔科学専攻	大学教授	楠本 哲次
口腔科学専攻	大学教授	西崎 宏
口腔科学専攻	大学教授	橋本 正則
口腔科学専攻	大学教授	元根 正晴
口腔科学専攻	大学教授	要田 洋江
口腔科学専攻	大学教授	和唐 雅博

大学院准教授

口腔科学専攻	大学准教授	神 光一郎
口腔科学専攻	大学准教授	頭山 高子
口腔科学専攻	大学教授	都賀谷 紀宏
口腔科学専攻	大学准教授	中塚 美智子
口腔科学専攻	大学准教授	濱島 淑恵

大学院講師

口腔科学専攻	大学講師	錦織 良
--------	------	------



大学院助教

口腔科学専攻	大学助教	首藤 崇裕
口腔科学専攻	大学講師	樋口 鎮央
口腔科学専攻	大学助教	前嶋亜優子
口腔科学専攻	大学助教	三宅 晃子
	以上	2018.4.1 付

定年退職

生理学講座	主任教授	西川 泰央
薬理学講座	主任教授	大浦 清
口腔外科学第一講座	主任教授	森田 章介
内科学講座	主任教授	大久保 直
歯科理工学講座	講師	大島 浩
欠損歯列補綴咬合学講座	講師	兼平 治和
	以上	2018.3.31 付

依願退職

高齢者歯科学講座	講師	渋谷 友美
口腔インプラント学講座	講師	新井 是宜
口腔外科学第二講座	講師	吉本 仁
歯周病学講座	助教	木村 大輔
口腔インプラント学講座	助教	李 佩祺
口腔インプラント学講座	助教	柏木 隆宏
口腔外科学第一講座	助教	内田 理恵
	以上	2018.3.31 付
生理学講座	准教授	内橋 賢二
		2018.8.31 付

任期満了退職

耳鼻咽喉科	准教授	馬場 一泰
口腔外科学第一講座	助教	福田あおい
歯科矯正学講座	助教	有馬 良幸
歯科麻酔学講座	助教	大郷英里奈
	以上	2018.3.31 付

あ と が き

本誌名は「大阪歯科大学広報」、別名「ODU NEWS」ですが、近年諸事情から年1回の発行が続いています。今号もニュースというより年報と呼ぶに相応しい内容であることを先ずお断りしておかなければなりません。どうかご了承ください。

さて、今号では2018（平成30）年1月から12月までの、本学の出来事、在学生や教職員の活躍を紹介しています。創立107周年となる2018年は、医療保健学部が開設2年目を迎え、同じ牧野キャンパスに大学院医療保健学研究科が新設されました。附属病院では歯科衛生士の復職を支援する「歯科衛生士研修センター」が始動するなど、前年同様、本学にとって一つのエポックを画する年

であったといえるでしょう。

年始から、医療保健学部の濱島淑恵准教授のヤングケアラーに関する研究活動が主要メディアで度々取り上げられました。（濱島先生への取材問合せはその後にも各方面から寄せられています）流行語大賞ではありませんが、2018年を表す大事なことばとして「ヤングケアラー」を認知された方も多いのではないのでしょうか。歯科医師でない濱島先生の調査研究が社会的な注目を集めたことは、ある意味で新生・大阪歯科大学を象徴するニュースでした。

この年も学部生が米国コロンビア大学をはじめ6大学を海外研修で訪れました。学生たちの感想文からは、限られた時間の中で思いがけない、得難い経験をし、何かを掴んで帰国したことがうかがえます。彼らの生の声をどうぞご一読ください。

3月末に定年退職された3人の教授のあいさつには、40年余に及ぶ教員生活の支えとなった、至言ともいえることばや諸先輩の訓えが随所に見出せます。後に残るわたしたち教職員にとっても今後の励みや助けとなることばの数々。味読いただけましたら幸いです。

そして川添堯彬理事長・学長は新入生たちにこう語りかけています。「コミュニケーションというのは、まず自分から始めなければならない。自分から挨拶し、もし相手が返してくれなくても、何度でも自分から挨拶することが大切」「勉強以外に打ち込める何かをもつと人生は2倍豊かになる」「苦しいとき人に頼るのでなく自分で克服できるようになってほしい」

皆さまの心に響くことばが本誌中にあらんことを。

大阪歯科大学広報 第180号

2018.01.01～2018.12.31

発行月 2020年3月
編集発行 大阪歯科大学広報委員会
〒573-1121
枚方市楠葉花園町8-1
TEL 072-864-3001
